木古内町（きこないちょう）

大平（おおひら）遺跡（4）

―高規格幹線道路函館江差自動車道工事用地内埋蔵文化財発掘調査報告書―

平成28年度

公益財団法人　北海道埋蔵文化財センター

木古内町（きこないちょう）

大平（おおひら）遺跡（4）

―高規格幹線道路函館江差自動車道工事用地内埋蔵文化財発掘調査報告書―

平成28年度

公益財団法人　北海道埋蔵文化財センター

口絵 1

大平遺跡調査区遠景　大平川河口から望む

調査区南西から　縦貫するのは左から北海道新幹線・道南いさりび鉄道・国道 228 号

口絵 2

大平遺跡調査状況　北東から

斜面から出土した縄文時代晩期後葉の遺物

P-243 断面

P-246 断面

P-243 遺物出土状況

P-246 遺物出土状況

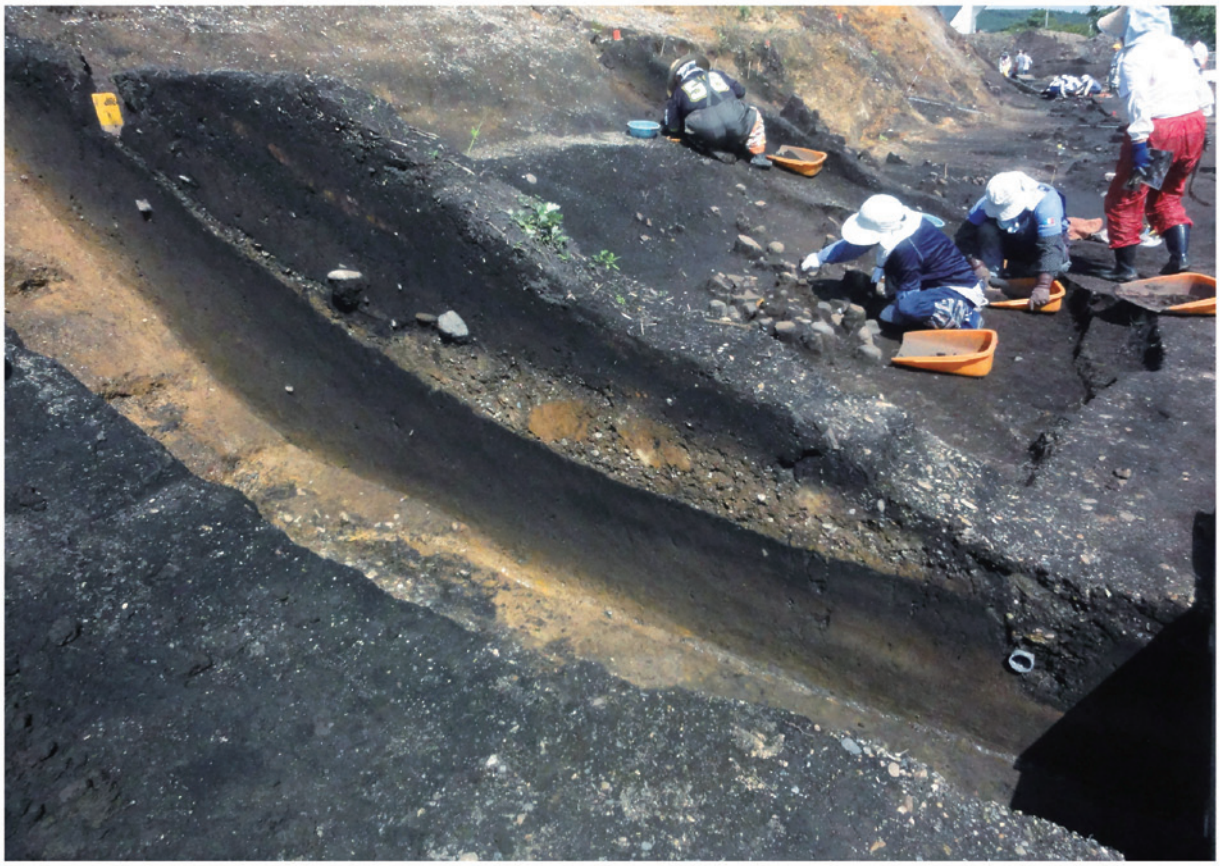
晩期後葉の遺物出土状況

畝状遺構（畑跡）検出状況

晩期前葉の遺物出土状況

後期後葉の土偶出土状況

口絵 4



斜面から低地にかけての土層堆積　途中に地すべりとみられる無遺物層を挟む

斜面から低地にかけての土層堆積　水付部分

1 号小ピット（SP-1）検出状況と、上部の断面

中位の土器の状況

下位の土器の状況

1 号小ピット　出土土器

口絵 6

c95 区　遺物出土状況

e98 区　遺物出土状況

P-243 出土遺物

包含層出土　漆製品

口絵 8

包含層出土　土偶

例　　言

1．本書は、国土交通省北海道開発局が行う高規格幹線道路函館江差自動車道建設工事に伴い、公益財団法人北海道埋蔵文化財センターが平成25年度に発掘調査を実施した、上磯郡木古内町大平遺跡の埋蔵文化財発掘調査報告書である。

2．報告内容は、木古内町大平遺跡平成25年度調査範囲（1,700㎡）の遺構と遺物である。

3．大平遺跡では、北海道新幹線建設事業に伴う埋蔵文化財発掘調査の報告書が、これまでに３冊刊行されている。本書を『大平遺跡（４）』（北埋調報329）としたのは平成22年度刊行の『大平遺跡・大平４遺跡』（北埋調報280）、平成27年度刊行の『大平遺跡（２）』（北埋調報321）、平成28年度刊行の『大平遺跡（３）』（北埋調報328）に続く報告書としたからである。

4．本書の執筆は畝状遺構を谷島由貴と土肥研晶が、その他執筆・編集は土肥が担当した。

5．整理作業の担当は土肥が、掲載遺物の写真撮影を、第２調査部第１調査課の中山昭大（平成27年度）が、調査時に破損した漆塗り竪櫛の復元と分析を、第１調査部第１調査課の髙橋美鈴（平成25年度　現様似町教育委員会）が行った。

6．発掘調査の土工事は株式会社大森組、基準杭設置は小林土木工業所、空撮をシン技術コンサルに委託した。

7．各種分析・同定・実測は下記に委託した。

土器・石器実測の一部：株式会社トラスト技研
炭化種実同定：株式会社古環境研究所
黒曜石の産地分析：株式会社パレオ・ラボ
炭化種実同定：株式会社古環境研究所
放射性炭素年代測定：株式会社加速器分析研究所
漆塗り製品の保存処理：株式会社東都文化財研究所

8．出土遺物は木古内町教育委員会が保管する。写真などの記録類は当センターが保管する。

9．調査・報告にあたっては、下記の諸機関および諸氏に御協力、御指導をいただいた。
北海道教委員会、木古内町教育委員会、北斗市教育委員会、知内町郷土資料館
野村広章（木古内町教育委員会教育長）、木元　豊（木古内町教育委員会）
西脇対名夫（北海道教育委員会）、村本周三（北海道教育委員会）、中田裕香（北海道教育委員会）
工藤研二（北海道教育委員会）、森　靖裕（北斗市教育委員会）、高橋豊彦（知内町教育委員会）
竹田　聡（知内町教育委員会）、石井淳平（厚沢部町教育委員会）、山田　央（七飯町教育委員会）
高橋　毅（森町教育委員会）、髙橋美鈴（様似町教育委員会）、奥山さとみ（江差町教育委員会）
須藤　隆（東北大学名誉教授）、横山英介（北海道考古学研究所）、佐藤由紀男（岩手大学教授）
右代啓視（北海道博物館）、鈴木拓也（北海道博物館）、大阪　拓（北海道博物館）
飯島義雄（ぐんま史跡維持支援団）、大沼忠春

記号等の説明

1．本文中および図、表中では以下の記号を用い、確認順に番号を付した。また、遺構番号は平成21～23年度に北海道新幹線建設工事に伴い当センターが実施した、同遺跡の発掘調査で付された番号を踏襲し、土坑が241号から、焼土が101号から、小ピットが１号からとした。平成27年度刊行の『北埋調報321　大平遺跡（２）－遺構編－』の内容を確認すると、報告済みの土坑は230号までと250号となっており、大平遺跡全体では欠番が231号～240号と249号の11基あることになる。また、畝状遺構には番号を付していない。

P：土坑（墓を含む）P－241から、F：焼土　F－101から、SP：小ピット　SP－１から。

2．遺構図や遺物の縮尺は、墓坑としたP－241、243、246を１：20、その他の土坑、焼土１：40、SP－１断面図１：20、遺物出土状況図１：10、畝状遺構　平面図２：125・断面図１：25、大平遺跡土層断面図１：100、土器実測図・拓影図１：４、土偶２：３、土製円盤１：３、剥片石器・礫石器１：２、P－246出土の台石・石皿10：375、包含層出土の漆製品２：３、P－243出土の櫛１：１、サメ歯１：１、石製品２：３、とし、それぞれにスケールを付した。

3．遺構の規模は、確認できた形状の上場長軸長×短軸長、坑底面の長軸長×短軸長、上場から坑底面までの最大深を示し、土層図、遺構図中のレベルは標高（単位m）を示し、遺構ごとに方位記号を記している。出土した遺物について、土器はⅣ章にすべて掲載し、出土状況図に小さい実測図と、Ⅳ章の掲載番号を示した。石器、漆製品、サメ歯については遺構ごとに図版を作成した。

4．土器の大きさは、器高は計測可能な個体の突起部を含む最大高で計測、口径・底径は計測可能なもののみ、器厚は胴部の平均的な厚みで示した。石器の大きさは最大長×最大幅×最大厚で（単位mm）記してある。なお、破損しているものについては、現存の最大値を示した。

石器実測図中でたたき痕は∨―∨、すり痕は｜――｜で範囲を表した。また、自然面はドットで表現した。掲載遺物の写真は縮尺を統一していない。

5．土層の観察には『標準土色帖』（小山・竹原1977）および『土壌調査ハンドブック』（ペドロジスト懇談会1984）を用いている。また、火山灰について以下の略号を用いている部分がある。これらは層位的な検出状況と外見から判断しており、分析による同定は行なっていない。

Ko－d：駒ケ岳d降下火山灰（1640年降下）、B-Tm：白頭山－苫小牧火山灰（10世紀降下）

6．セクション図に用いられている土層番号と土層内容は以下のとおりである。

Ⅰ　撹乱層を含む表土層で、台地上は耕作、台地下は道や宅地跡などの撹乱を受けている。発掘調査ではB-Tm層までスコップ等で荒く掘るため、Ⅱ層上位中の遺物のもⅠ層扱いになった。

Ⅱ　遺物包含層である黒色土層で、部分的にKo－d層やB-Tm層の薄い堆積が見られる。

Ⅲ　Ⅱ層下にある黒褐色から暗褐色の遺物包含層で、縄文時代晩期後葉の遺物が集中する箇所がみられた。また、台地下の低地部では、狭小な範囲ではあるが、本層がシルト質の間層を挟んで３つの層に分離する。

Ⅳ　褐色ローム質土層　崖の表面観察で、本層は標高７m付近まで堆積し、その下に砂礫層が約２m、橙色粘土層が約0.5m、それより下は基盤の凝灰岩層となり、大平川の河床や河口付近の海岸部に岩盤の露頭が観察できる。

目　　次

口　絵
例　言
記号等の説明
目　次　挿図・表・図版
Ⅰ　諸　言
1．調査要項 …… 1
2．調査体制 …… 1
3．調査に至る経緯 …… 2
4．調査の方法 …… 2
（1）調査範囲とグリッドの設定 …… 2
（2）濁水対策 …… 5
（3）包含層掘削 …… 5
（4）遺構調査 …… 5
（5）整理の方法 …… 5
（6）遺物の分類 …… 6
5．調査結果の概要 …… 7
Ⅱ　遺跡の位置と環境 …… 9
1　位置と環境 …… 9
2　土層 …… 9
3　周辺の遺跡 …… 12
Ⅲ　遺構 …… 15
Ⅳ　遺物 …… 29
Ⅴ　自然科学的分析 …… 145
1　大平遺跡出土黒曜石製石器の産地同定 …… 145
2　大平遺跡炭化種実同定 …… 148
3　大平遺跡における放射性炭素年代（AMS測定） …… 151
4　大平遺跡出土の漆塗り櫛の分析 …… 154
Ⅵ　まとめ …… 156
引用・参考文献 …… 162
写真図版 …… 165
報告書抄録

挿 図 目 次

図Ⅰ－1　大平遺跡位置図 …… 3
図Ⅰ－2　大平調査区位置図 …… 4
図Ⅰ－3　グリッド設定図 …… 5
図Ⅱ－1　大平遺跡土層断面図 …… 10
図Ⅲ－1　遺構位置図 …… 16
図Ⅲ－2　P-241 …… 16

図Ⅲ－３　P-243 …… 18
図Ⅲ－４　P-243出土遺物 …… 19
図Ⅲ－５　P-246 …… 21
図Ⅲ－６　P-246出土遺物 …… 22
図Ⅲ－７　P-242・244・245・247・248 … 24
図Ⅲ－８　F-101・102・103・104・SP-１　26
図Ⅲ－９　畝状遺構平面図・断面図 …… 28
図Ⅳ－１　晩期後葉　器形区分 …… 31
図Ⅳ－２　晩期後葉　突起の形状区分 …… 33
図Ⅳ－３　晩期後葉　文様帯の区分と
　　貼瘤の分類…… 35
図Ⅳ－４　晩期後葉　文様の分類 …… 37
図Ⅳ－５　土器実測図１ …… 39
図Ⅳ－６　土器実測図２ …… 40
図Ⅳ－７　土器実測図３ …… 41
図Ⅳ－８　土器実測図４ …… 42
図Ⅳ－９　土器実測図５ …… 43
図Ⅳ－10　土器実測図６ …… 44
図Ⅳ－11　土器実測図７ …… 45
図Ⅳ－12　土器実測図８ …… 46
図Ⅳ－13　土器実測図９ …… 47
図Ⅳ－14　土器実測図10 …… 48
図Ⅳ－15　土器実測図11 …… 49
図Ⅳ－16　土器実測図12 …… 50
図Ⅳ－17　土器実測図13 …… 51
図Ⅳ－18　土器実測図14 …… 52
図Ⅳ－19　土器実測図15 …… 53
図Ⅳ－20　土器実測図16 …… 54
図Ⅳ－21　土器実測図17 …… 55
図Ⅳ－22　土器実測図18 …… 56
図Ⅳ－23　土器実測図19 …… 57
図Ⅳ－24　土器実測図20 …… 58
図Ⅳ－25　土器実測図21 …… 59
図Ⅳ－26　土器実測図22 …… 60
図Ⅳ－27　土器実測図23 …… 61
図Ⅳ－28　土器実測図24 …… 62
図Ⅳ－29　土器実測図25 …… 63
図Ⅳ－30　土器実測図26 …… 64
図Ⅳ－31　土器実測図27 …… 65
図Ⅳ－32　土器実測図28 …… 66
図Ⅳ－33　土器実測図29 …… 67
図Ⅳ－34　土器実測図30 …… 68
図Ⅳ－35　土器実測図31 …… 69
図Ⅳ－36　土器実測図32 …… 70
図Ⅳ－37　土器実測図33 …… 71
図Ⅳ－38　土器実測図34 …… 72
図Ⅳ－39　土器実測図35 …… 73
図Ⅳ－40　土器実測図36 …… 74
図Ⅳ－41　土器実測図37 …… 75
図Ⅳ－42　土器実測図38 …… 76
図Ⅳ－43　土器実測図39 …… 77
図Ⅳ－44　土器実測図40 …… 78
図Ⅳ－45　土器実測図41 …… 79
図Ⅳ－46　土器実測図42 …… 80
図Ⅳ－47　土器実測図43 …… 81
図Ⅳ－48　土器実測図44 …… 82
図Ⅳ－49　土偶実測図 …… 83
図Ⅳ－50　土偶・土製品実測図 …… 84
図Ⅳ－51　石器実測図１ …… 87
図Ⅳ－52　石器実測図２ …… 88
図Ⅳ－53　石器実測図３ …… 89
図Ⅳ－54　石器実測図４ …… 90
図Ⅳ－55　石器実測図５ …… 91
図Ⅳ－56　石器実測図６ …… 92
図Ⅳ－57　石器実測図７ …… 93
図Ⅳ－58　石器実測図８ …… 94
図Ⅳ－59　石器実測図９ …… 95
図Ⅳ－60　石器実測図10 …… 96
図Ⅳ－61　石器実測図11 …… 97
図Ⅳ－62　石器実測図12 …… 98
図Ⅳ－63　石器実測図13 …… 99
図Ⅳ－64　石器実測図14 ……100
図Ⅳ－65　石器実測図15 ……101
図Ⅳ－66　石器実測図16 ……102
図Ⅳ－67　石器実測図17 ……103
図Ⅳ－68　石器実測図18 ……104
図Ⅳ－69　石器実測図19 ……105
図Ⅳ－70　石製品・漆製品実測図 ……106
図Ⅳ－71　大平遺跡測量遺物全点 ……130
図Ⅳ－72　土器出土状況図１ ……131
図Ⅳ－73　土器出土状況図２ ……132
図Ⅳ－74　土器出土状況図３ ……133
図Ⅳ－75　土器出土状況図４ ……134
図Ⅳ－76　土器出土状況図５ ……135

図Ⅳ－77　土器出土状況図６ ……136
図Ⅳ－78　土器出土状況図７ ……137
図Ⅳ－79　土器出土状況図８ ……138
図Ⅳ－80　土器出土状況図９ ……139
図Ⅳ－81　土器出土状況図10 ……140
図Ⅳ－82　土器出土状況図11 ……141
図Ⅳ－83　土器出土状況図12 ……142
図Ⅳ－84　土器出土状況図13 ……143
図Ⅳ－85　土器出土状況図14 ……144
図Ⅴ－１　北日本の黒曜石原石
　　採取地の分布図……146
図Ⅴ－２　黒曜石産地推定判別図 ……147
図Ⅴ－３　暦年較正年代グラフ ……153
図Ⅴ－４　竪櫛構造模式図 ……155
図Ⅴ－５　XRF分析データ３元素指定 ……155
図Ⅵ－１　晩期後葉器種別編年図 ……159
図Ⅵ－２　北海道内の出土例 ……161

表 目 次

表Ⅳ－１　掲載土器一覧１ ……107
　　掲載土器一覧２ ……108
　　掲載土器一覧３ ……109
　　掲載土器一覧４ ……110
　　掲載土器一覧５ ……111
　　掲載土器一覧６ ……112
　　掲載土器一覧７ ……113
　　掲載土器一覧８ ……114
　　掲載土器一覧９ ……115
　　掲載土器一覧10 ……116
　　掲載土器一覧11 ……117
　　掲載土器一覧12 ……118
　　掲載土器一覧13 ……119
　　掲載土器一覧14 ……120
　　掲載土器一覧15 ……121
　　掲載土器一覧16 ……122
表Ⅳ－２　掲載土製品一覧 ……122
表Ⅳ－３　掲載石器一覧１ ……123
表Ⅳ－３　掲載石器一覧２ ……124
表Ⅳ－３　掲載石器一覧３ ……125
表Ⅳ－３　掲載石器一覧４ ……126
表Ⅳ－４　遺構遺物一覧 ……127
表Ⅳ－５　掲載石製品・漆一覧 ……127
表Ⅳ－６　出土遺物一覧 ……128
表Ⅴ－１　分析対象となる黒曜石製石器 …145
表Ⅴ－２　北日本黒曜石産地の判別群 ……145
表Ⅴ－３　測定値および産地推定結果 ……146
表Ⅴ－４　出土層位および器種別の産地 …146
表Ⅴ－５　試料一覧 ……148
表Ⅴ－６　炭化種実同定結果 ……149
表Ⅴ－７　放射性炭素年代測定結果 ……152
表Ⅴ－８　放射性炭素年代測定結果 ……153

図 版 目 次

口絵１
　大平遺跡調査区遠景　大平川河口から望む
　調査区南西からの遠景
口絵２
　大平遺跡調査状況　北東から
　斜面から出土した縄文時代晩期後葉の遺物
口絵３
P-243　断面
P-243　遺物出土状況
晩期後葉の遺物出土状況
晩期前葉の遺物出土状況
P-246　断面
P-246　遺物出土状況
畝状遺構（畑跡）検出状況

後期後葉の土偶出土状況
口絵４
斜面から低地にかけての土層堆積
斜面から低地にかけての土層堆積　水付部分
口絵５
１号小ピット（SP-１）検出状況と、上部の断面
中位の土器の状況
下位の土器の状況
１号小ピット　出土土器
口絵６
c95区　遺物出土状況
e98区　遺物出土状況
口絵７
P-243　出土遺物
包含層出土　漆製品
口絵８
包含層出土土偶

図版Ⅴ-１　黒曜石製石器原材料産地分析資料
図版Ⅴ-２　大平遺跡の炭化種子

図版１
調査前の状況
表土除去
段丘上の調査
段丘上遺物検出状況
C94・95土器捨て場　確認状況
土器捨て場　調査開始
土器捨て場　調査中盤
土器捨て場　調査終盤
図版２
墓坑の調査状況
P-243　検出状況
P-246　検出状況
P-241　調査状況
P-241　断面
図版３
P-244　検出
P-244　調査状況
P-245　確認状況
P-245　坑底面の遺物
P-242　調査状況
P-247　検出
SP-１　断面
P-248　断面
図版４
F-102・F-103
F-104

畝状遺構　断面
段丘上４ライン　断面
３ラインに現れた小さな沢状の断面
調査区北東縁７ライン　断面
図版５
97ラインセクション　低湿部
96ライン　下位の段丘断面
95ライン　断面
図版６
低位段丘面の調査状況
出土遺物量ピークに達する
斜面と低位の中間の調査
調査済みの斜面には基盤の岩盤が露頭
降雨中の測量作業
調査終了状況
図版７
土器506　出土状況
土器に混じり玉類出土
土器285　出土状況
土器275と土器381
土器404に重なり土器600出土
土器507　出土状況
土偶２　出土状況
土器126　Ⅲ-２層より一括出土
図版８
P-246　１～３
P-241　礫
P-243　礫
P-246　礫
図版９　土器７～14・16・17
図版10　土器15・18～20・32～35・55・56
図版11　土器60・63・64・75～80
図版12　土器81・85・91～93
図版13　土器94～98・112～115・122・123
図版14　土器124～126
図版15　土器127～132・100＋218
図版16　土器219～222・228・229・238～248
図版17　土器249～251・253・254・274～276
図版18　土器280・282・284～288・290
図版19　土器299～304・309・311・312・314
図版20　土器317～325
図版21　土器326～328・330・331・344・346

図版22　土器349～351・360～364・367・375＋376
図版23　土器396～399・403～405・407
図版24　土器408～409・413・420～424
図版25　土器425～432
図版26　土器433～435・437・440～443・445
図版27　土器454～461
図版28　土器462～467・469・470・481・484
図版29　土器505～507・509～512・514
図版30　土器569～576・583～587
図版31　土器591・593・594・596～610・619
図版32　土器620～630
図版33　土器631～642・647～649・655
図版34　土器１～６・21～31・36～39
図版35　土器40～51
図版36　土器52～54・57～59・61・62・65～74・82～84・86～88
図版37　土器89～90・99～111・116～121・135・137・138
図版38　土器133・134・136・139～148
図版39　土器149～166
図版40　土器167～189
図版41　土器190～218
図版42　土器223～227・230～237・252
図版43　土器267～272・277～279・281・283・289・291～298・303・305～308
図版44　土器310・313・315・316・329・332～339
図版45　土器340～343・345・347・348・352～357
図版46　土器358・359・365・366・368～374・377～387
図版47　土器388～395・397・400・402・406・410～412・414～419
図版48　土器436・438・439・444・447～453・468・471～474・476
図版49　土器475・477～480・482～483・485～496
図版50　土器497～504・508・513・515～524・526～529・531～533・536～544
図版51　土器525・530・534～535・545～568・577～580
図版52　土器581・582・588～590・592・595・611～618・643～646・650～654・656～660
図版53　土製品２・４～23・石製品１～13
図版54　石器１～109
図版55　石器110～178
図版56　石器179～201
図版57　石器202～233
図版58　石器234～267
図版59　石器268～289
図版60　石器290～306
図版61　石器307～320

Ⅰ　諸　　言

１．調査要項

事 業 名：高規格幹線道路函館江差自動車道工事用地内埋蔵文化財発掘調査
委 託 者：国土交通省北海道開発局函館開発建設部
遺 跡 名：大平遺跡（北海道教育委員会登載番号　B－05－07）
所 在 地：上磯郡木古内町字大平63－3.
調査面積：1,700㎡
発掘期間：平成25年５月13日　～　平成25年11月８日
整理期間：平成25年７月１日　～　平成29年３月31日

２．調査体制

平成25年度	理事長		坂本　均
	副理事長		畑　宏明
	事務局長		中田　仁（専務理事兼任）
	常務理事		千葉英一（第１調査部長兼任）
	第１調査部第３調査課	平成25年度調査体制	
	課長		土肥研晶（発掘担当者）
	主査		立川トマス（８月１日から）
	主査		谷島由貴（８月１日から）
	嘱託		奥山さとみ（７月11日まで）
平成26年度	理事長		坂本　均
	副理事長		畑　宏明（平成26年８月28日死去）
	事務局長		中田　仁（専務理事兼任）
	常務理事		千葉英一（第１調査部長兼任）
	第１調査部第３調査課	課長	土肥研晶（編集担当者）
平成27年度	理事長		坂本　均（６月26日まで）
			越田賢一郎（６月26日から）
	副理事長		中田　仁（６月26日から）
	事務局長		山田寿雄（６月26日から）
	常務理事		長沼　孝（６月26日から）
	第１調査部第３調査課	課長	土肥研晶（編集担当者）
平成28年度	理事長		越田賢一郎
	副理事長		中田　仁
	事務局長		山田寿雄
	常務理事		長沼　孝（第１調査部長兼任）
	第１調査部第３調査課	課長	土肥研晶（編集担当者）

３．調査に至る経緯

高規格幹線道路「函館江差自動車道」は、北海道縦貫自動車道・函館新道と一体となって高速ネットワークを形成する一般国道228号の自動車専用道路で、近隣主要都市を経由し、函館港・函館空港への物流の効率化と生活の利便性を向上させる目的で、北海道開発局により整備が進められている。現在（平成28年７月）、函館IC～北斗茂辺地ICの18.0㎞が供用され、北斗茂辺地IC～木古内ICの延長16.0㎞の「茂辺地木古内道路」で平成31年度の供用開始をめざし事業が進められている。

平成11年、国土交通省北海道開発局函館開発建設部（以下「函館開発建設部」）は、函館江差自動車道、茂辺地木古内道路における埋蔵文化財包蔵地に関する事前協議書を北海道教育委員会(以下「道教委」）に提出した。これを受けて現地踏査を実施した道教委は、木古内町大釜谷から大平までの範囲の15地点に関して所在確認調査が必要と通知した。大平遺跡における所在確認調査は平成24年10月４日に実施、海岸段丘台上の606㎡について、発掘調査が必要と回答された。函館開発建設部は、工事計画の変更は不可能であることから、平成25年度４月１日（公財）北海道埋蔵文化財センターに発掘調査を委託した。事業を受託した当センターは、平成25年度５月から発掘調査を実施した。

発掘調査着手後まもなく、調査範囲の外に遺物包含層が広がることがわかり、協議の結果、平成25年６月25日に低地部の範囲確認調査を実施、遺物包含層の拡がりが確認され、調査面積は1,094㎡追加の合計1,700㎡となった。追加範囲の調査は９月10日からはじまり、調査期間の一週間の延長による対応で11月８日現地調査を終了した。

４．調査の方法

（１）調査範囲とグリッドの設定

大平遺跡の調査区設定に当たっては、本調査区の北側約50mで北海道新幹線建設事業に伴い当センターが平成21～23年度に実施した、大平遺跡の発掘調査で設定した調査区（北埋調報280）を用いた。

設定に使用した基軸は北海道新幹線計画路線上の中心線115k300～115k400で、この座標から平行移動したb40～b60とC40～C60を算出、これをもとに調査区内に５m×５mの方眼杭を設定した。発掘区はアルファベットと数字の組み合わせで表示している。路線と平行方向のに５m毎に設定されているローマ数字は、大平遺跡調査区中央付近で０となり、次に再び99から始まり数字が小さくなる設定、路線垂直方向に５m毎に設定しているアルファベットは調査区北端で大文字のZに達し、次に再び小文字aから始まる設定としている。このメッシュは大平遺跡と孫七川を挟んだ大平４遺跡も共通で使用しており、遺構・遺物の対比には好都合であるが、一方で同名のグリッド番号が生ずる不都合があったが、さいわい調査年度の違いなどから混乱は今のところ生じていない。

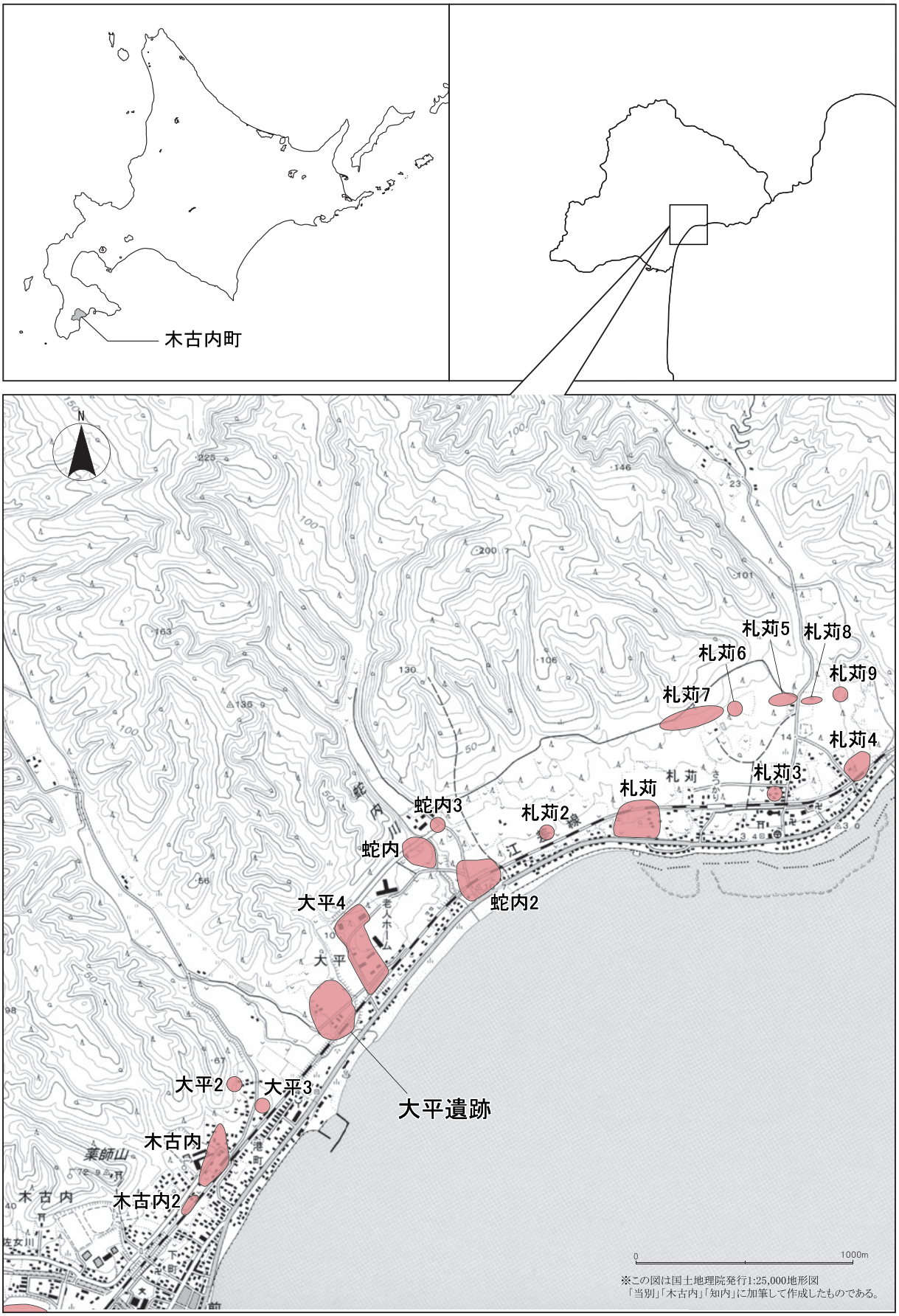
北海道新幹線の中心線上の115k300と115k400の世界測地系による座標は、平面直角座標第ＸＩ系に基づき以下の数値となっている。また、この軸は真北に対し39°50′55″東偏する。

115k300　　X＝－256,239.449Y＝16,593.122

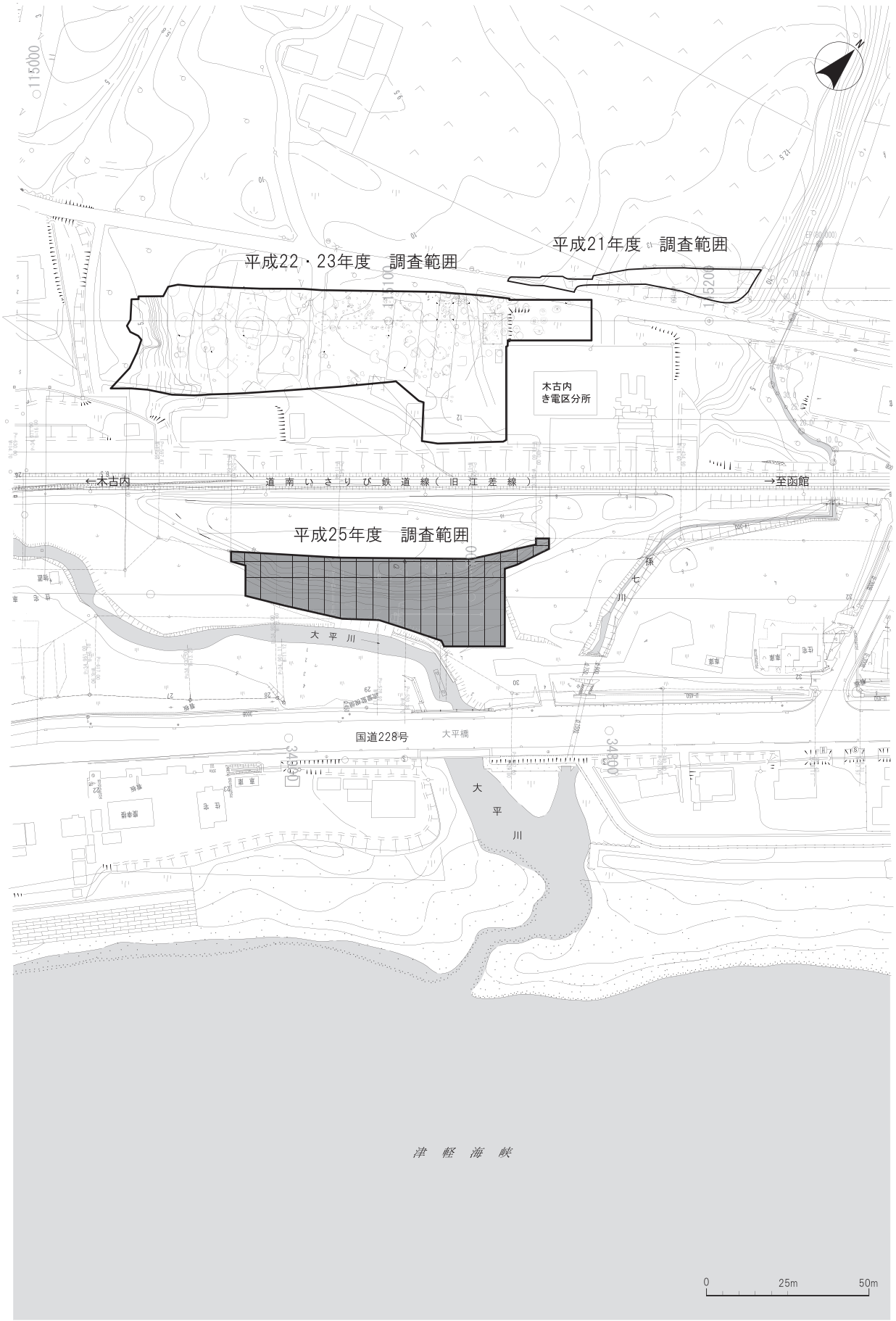
115k400　　X＝－256,263.675Y＝16,657.198

（２）濁水対策

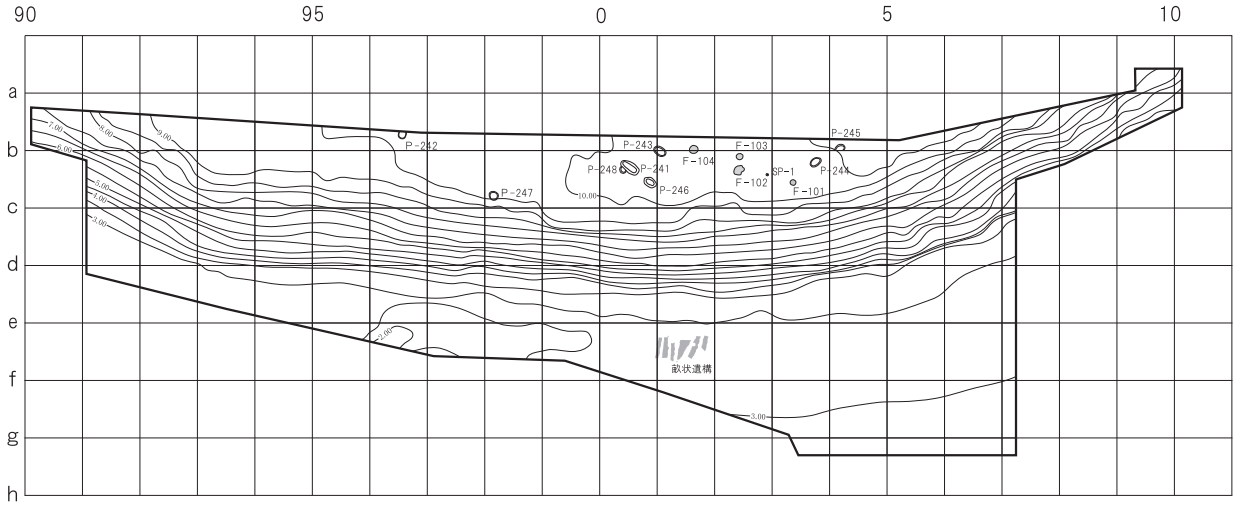
調査計画段階での濁水対策は、土嚢による用地際の補強と溝の掘削により濁水が用地から直接大平川への流入するのを防ぐものであったが、調査区拡張後は、表土除去後の低位の調査区は水の逃げ道がなく、降雨のたびに水没したため、効率よく調査を進めるために、雨水などの濁水を１ヵ所に集めて排水する方法に切り替えた。具体的には、先に南東側角の調査を終え、そこに５×10×３mの穴を掘削し、調査区内の雨水が集まるよう溝を切りながら調査をすすめ、集めた水の上澄みをポンプ排水する方法をとった。


木古内町
札苅5
札苅8
札苅6
札苅9
札苅7
札苅4
札苅3
札苅
蛇内3
札苅2
蛇内
蛇内2
大平4
大平
大平2
大平3
大平遺跡
木古内
木古内2
葉師山
木古内
蛇内川
札苅
老人ホーム
港町
0
1000m
※この図は国土地理院発行1:25,000地形図
「当別」「木古内」「知内」に加筆して作成したものである。

図Ⅰ－1　大平遺跡位置図



図Ⅰ-2 大平遺跡 調査区位置図



図Ⅰ-3　グリッド設定図

（３）包含層掘削

当初計画では、台地上の狭小な範囲の調査で、重機も近づけないことから、表土から人力による掘削を行う予定であったが、笹や灌木などの根が深くはいり、表土からの掘削作業は困難とみられた。調査にあたり、全面を覆う笹を刈ったところ、台地上で耕作を行っていた頃のものとみられる道筋が２ヵ所みつかり、これを少し拡張し、小型の重機を段丘上に上げ、表土除去を行った。台地上の包含層は、５ライン付近が最も残りが良く、B-Tm層を挟んで黒色土が層厚約70㎝で残っていた。出土する遺物は、笹の根直下の黒色土層（Ⅱ層）から縄文時代晩期の土器・石器が多数の出土し、黒色土層より下位の黒褐色土層（Ⅲ層）に達すると、ほぼ無遺物層になる。耕作による削平とみられるが、０ラインより南西側や斜面部では、黒色土層が失われている部分が多く、このような場所はスコップによる掘削を行った。包含層出土の遺物は、細かい破片は取り上げ、ある程度の大きさのあるものや、まとまって出土する遺物については、図化を行い、グリッド毎に№１から番号を付して取り上げた。

（４）遺構調査

検出された墓坑は、包含層Ⅱ層の掘削中に小礫が集中が出土することで墓と判断した。小礫集中の範囲を検出、図化後、墓の長軸で半截し、断面実測、完掘を行った。墓坑埋土中にも多数の小礫が出土したが、大型の礫や副葬品とみられる遺物以外は図化していない。そのほかの土坑は、Ⅲ、Ⅳ層面で上位層の落ち込みとして確認している。

遺物集中域は極力出土状況を図化し番号を付して取り上げ、玉類など微細な遺物出土が見込まれる範囲は土砂を回収し土壌水洗を行った。ただし、扱いは包含層出土の遺物と同じで、遺構名は付けず、測量遺物の集合で現わしている。

畝状遺構は低位の段丘で狭小な範囲で確認され、畝間の測量の後、耕作痕の検出も行ったが確認面からの耕作深度は浅いせいか、はっきりしなかった。

（５）整理の方法

取り上げた遺物は、現地では原則として以下の作業工程で整理を行った。遺構・包含層それぞれの「遺物取り上げ台帳」、および「土壌水洗サンプル取り上げ台帳」を作成し、これをもとに水洗、乾燥、分類、注記、点数集計等の作業を進めた。注記の内容は、大平遺跡を「大」と略記し、その後に

グリッド名、層位、取上げ番号の順に記した。注記するスペースのない、小さな遺物については省略した遺物の出土グリッド、層位、点数、分類名、日付などの情報は「遺物カード」に記録し、遺物とともにビニール袋へ入れ、収納した。カードの情報は遺構ごと、分類ごとの情報を集計し、最終的な遺物台帳を作成した。

（６）遺物の分類

（１）土　器

土器は大きな区分である時期ごとの特徴から、便宜的に縄文時代早期に属する資料をⅠ群とし、以下順に前期をⅡ群、中期をⅢ群、後期をⅣ群、晩期をⅤ群、続縄文時代をⅥ群、擦文時代相当のものをⅦ群、とし、各群にアルファベットの小文字を組み合わせ、前半（a類）、後半（b類）、あるいは前葉（a類）、中葉（b類）、後葉（c類）に分類した。また、本遺跡で最も多く出土した縄文時代晩期後葉（Ⅴc類）の土器群の器形、突起の形状、文様などについては、図Ⅳ－１～図Ⅳ－４に示した記号を掲載遺物一覧表中で用いた。

Ⅰ群　縄文時代早期に属する土器群

a類：貝殻条痕文、貝殻腹縁文、などが施される

b類：撚糸文、組紐圧痕文、絡条体圧痕文、貼付文、縄文等の施されるもの

Ⅱ群　縄文時代前期に属する土器群

a類：縄文の施された丸底・尖底を特色とするもの。春日町式など

b類：円筒土器下層式に相当するもの

Ⅲ群　縄文時代中期に属する土器群

a類：円筒土器上層式に相当するもの

b類：円筒土器上層式に後続する土器群で見晴町式・榎林式・大安在B式・ノダップⅡ式・煉瓦台式に相当するもの

Ⅳ群　縄文時代後期に属する土器群

a類：初頭～前葉の土器。天祐寺式・涌元式・トリサキ式・大津Ⅶ群・白坂３式に相当するもの

b類：中葉の土器。ウサクマイC式、手稲式、ホッケマ式併行に相当するもの

c類：後葉の土器。堂林式・三ツ谷式・湯の里３式に相当するもの

Ⅴ群　縄文時代晩期に属する土器

a類：大洞B・BC式・上ノ国式に相当するもの

b類：大洞C１式・C２式、聖山Ⅰ式に相当するもの

c類：大洞A・A´式、聖山Ⅱ式に相当するもの

Ⅵ群　続縄文時代に属する土器群

Ⅶ群　擦文時代に属する土器群

石器等

石器等は以下の器種に分類した。

石鏃：主に両面加工で整形され、尖頭形を呈するもの　最長で5.66mm

石錐：端部に錐状の突出部が作り出されたもの

ナイフ：主に両面加工で整形され、尖頭部をもたず、直線的な刃部や柄を有するもの

端部にノッチ状の加工によるつまみが作り出されたものも含めた

ヘラ状石器：刃部は主に片面加工の左右対称形の細長い石器で、最大幅が刃部付近にあるもの

スクレイパー類：素材の側縁・端部に連続的な剥離によって刃部が作り出されるもの
Rフレイク、Uフレイクもこの分類に含む

楔形石器：素材の両端部に、対向する剥離や潰れが認められるもの

石核：剥片を剥離した痕跡が認められる、剥片石器と共通する石材のもの

石斧：研磨で整形された斧状の刃部を有するもの、製作時の擦り切りにより生じた、残片に刃部が付けらるものも多い

たたき石：礫にたたき痕が認められるもののうち、手に持って使用されたと想定されるもの

すり石：礫にすり痕が認められるもののうち、手に持って使用されたと想定されるもの

砥石：礫にすり痕が認められるもののうち、研磨作業に使用されたと想定されるもの

扁平打製石器：扁平な礫の縁辺を打ち欠き、半円または楕円に整形されたもので、縁辺に擦り痕を有するもの

石鋸：板状の礫などの素材の縁辺に、断面がV・U字形を呈するすり痕が認められ、石斧製作時の擦り切り作業に使用されたと想定されるもの

石錘：扁平な礫の縁辺に、打ち欠きが認められるもの

台石：礫にたたき痕が認められるもののうち、置いて使用したと想定されるもの

凹み石：礫の主面に敲打によるくぼみが観察される石器

石皿：礫にすり痕が認められるもののうち、置いて使用したと想定されるもの

フレイク：石核・石器などから剥離されたもので、二次加工・使用痕が認められないもの

原石：頁岩産地のため、頁岩系の礫が多く、使用痕・加工痕のないものは礫に分類した

５．調査結果の概要

検出された遺構は、墓３基、土坑５基、焼土４ヵ所、小ピット１ヵ所、畝状遺構（畑跡）１ヵ所である。このほかに、調査区斜面や低地から土器、礫などの捨て場がみつかっている。

検出された墓は、いずれも段丘面上の標高10.5m前後の黒色土層中から小礫が集中出土してみつかっている。時期は縄文時代晩期前葉の上ノ国式併行で、３基のうち２基からは土器、石器のほか漆塗り竪櫛やサメ歯を利用した装身具などの副葬品がみつかっている。これら墓坑は密集して分布していることから、墓域があるとみられ、その範囲は調査区外にも広がると考えられる。

墓坑から東、約10数メートルからは、墓と同時期の土坑が２基検出された。平面形は小判型、掘り込みは比較的浅い皿状で、覆土は黒色土層の落ち込みである。どちらの土坑も坑底面から、まとまった土器片などが出土している。この２基の土坑も近接しており、墓域の東側に分布域をもっている可能性がある。時期不明の円形土坑は墓坑より西側に散在して３基検出された。そのうちの１基は墓坑に切られて検出されている。時期は縄文時代晩期前葉よりも古いとみられる。焼土は縄文時代晩期前葉の墓と土坑が分布する範囲の間で４ヵ所検出されている。晩期後葉の遺物散布面より下からみつかっていることから、墓や土坑と同時期とみられる。晩期前葉の遺構は、海岸段丘上の包含層の残りが良い範囲と重なって検出されているため、より西側にも焼土や浅い土坑はあった可能性もあるが、今回調査した狭小な範囲では、西から墓坑群、焼土群、土坑群と遺構毎に集中域があるようにみえた。

晩期後葉の遺構では、海岸段丘上から小ピット１ヵ所を検出し、その覆土上部には土器３個体が伏せた状態で重ねられていた。調査区c94・95区からは時間幅の狭い晩期後葉の土器捨て場もみつかっ

ている。

畝状遺構は、海抜３m弱の斜面裾で、B-Tm層を切る畝間５条が確認された。B-Tm層が残る範囲でなければ気づかないため、確認範囲は狭く、上部の断面も失われているため、隣接地の畝の掘り下がった地点で断面測量を行っている。

遺物は、土器63,777点、石器類64,804点、その他土製品、石製品、漆製品他201点をあわせ、合計128,782点が出土した。

過年度の調査で、本調査区の北側約50mから縄文時代前期の大規模な集落址が見つかっているが、それと同時期の遺構はなく、遺物も土器の細片が少量出土しただけであった。出土した土器の７割強は縄文時代晩期後葉のもので、土器捨て場や包含層からは、聖山式以降の新しい時期の土器が、平面的なまとまりをもって出土した。聖山式以降の土器としては、森町の尾白内貝塚や函館市日ノ浜遺跡などからみつかっているが、その内容を上回る出土量で、これらの土器には、工字文や変形工字文が付される搬入品が伴って検出され、新旧の時期差もあるものとみられる。

表Ⅰ-1　出土遺物一覧

		遺構　計	包含層　計	合計
土　器	Ⅱb		44	44
	Ⅳa		28	28
	Ⅳc		2987	2987
	Ⅴa	1335	13036	14371
	Ⅴc	75	46055	46130
	Ⅵ		72	72
	Ⅶ		128	128
	陶磁器		17	17
	土器合計	1410	62367	63777
石　器	石鏃	5	204	209
	石錐	1	94	95
	ナイフ		9	9
	ヘラ状石器	1	9	10
	スクレイパー		631	631
	楔形石器		24	24
	フレイク	1032	27379	28411
	石核		41	41
	石器合計	1039	28386	29425
礫石器	石斧		34	34
	たたき石	1	209	210
	すり石		3	3
	砥石		24	24
	扁平打製石器		1	1
	石鋸		44	44
	石錘		1	1
	台石・石皿	2	8	10
	凹み石	1	49	50
	礫石器合計	4	373	377
礫	礫	10337	24665	35002
	礫合計	10337	24665	35002
土製品	土製品		2	2
	土偶		10	10
	土製円盤		26	26
	焼成粘土	34	29	63
	土製品合計	34	67	101
石製品	石製品		1	1
	石棒		12	12
	玉・垂飾		11	11
	石製品合計		24	24
その他	漆製品	26	3	29
	近現代	1	13	14
	サメの歯	18	0	18
	ベンガラ原材	1	13	14
	鉄滓		1	1
	その他合計	46	30	76
	総　計	12870	115912	128782

Ⅱ　遺跡の位置と環境

１　位置と環境

木古内町は北海道の南西部、渡島半島の南端付近の函館駅から西南西に直線で約25km、渡島半島西部の江差町、松前町、函館市の中央に位置し、漁業、酪農などを基幹産業とする町である。町名の由来はアイヌ語の「リコナイ（高く昇る源）」または、「リロナイ（潮の差し入る川）」から転化したものと言われている。木古内町の中心にある木古内駅は、1930年（昭和５年）に江差線の終着駅として開業し、1937年（昭和12年）の松前線開業にともない、江差線と松前線の分岐駅となった。1988年には松前線が廃止となったが、同年、海峡線の開業とともに東北新幹線連絡特急「はつかり」の停車駅となる。連絡特急はその後「白鳥」・「スーパー白鳥」と改称し2008年（平成20年）からはすべての特急が停車する駅となった。2014年、江差線の木古内駅～江差駅間が廃止され、再び江差線の終着駅となるが、2016年（平成28年）３月26日に北海道新幹線の木古内駅が開業し、北海道新幹線「はやぶさ」・「はやて」の13往復のうち、８往復16本が停車する駅となった。その一方、江差線の五稜郭駅～木古内駅間はJR北海道から経営分離され、第三セクターの「道南いさりび鉄道」へ移管された。町の人口は1961年（昭和36年）の青函トンネル建設開始前後にピークを迎えるが、その後減り続け、平成28年２月末で4,515人である。大平は、町の中心から東へ２㎞ほどの地域の字名で、地名の由来は江戸期の松浦武四郎『竹四郎回浦日記』に「ヲヒラ川　ヌフケサワの川ノ名也」そのヲヒラが転じて大平になったものとみられる。「ヲヒラ」はアイヌ語の地形地名「o－pira：（川）」口にある崖」があてられ、大平遺跡南端の海岸段丘崖（調査地点一帯）が地名の由来となった地形とおもわれる。調査範囲は現海岸線から100m内陸の大平川左岸の標高12m前後の海岸段丘上から標高３m前後の低位の段丘面までで、低位の段丘縁は、現大平川により浸食され、法面には遺物包含層が露頭していたが、河口付近は護岸されている。川底は基盤の凝灰岩層が露頭しており、河口付近の海底まで同じ状態であることが干潮時に視認できる。海岸段丘脇を流れる大平川と孫七川は調査区から国道228号を越えた南側、約50mで合流し、津軽海峡にそそぐ。調査地点の内陸側は道南いさりび鉄道（旧江差線）で寸断され、さらに約30m山側には北海道新幹線の路線が通る。段丘上からは天気の良い日には対岸の津軽半島の建物までが目視できる。

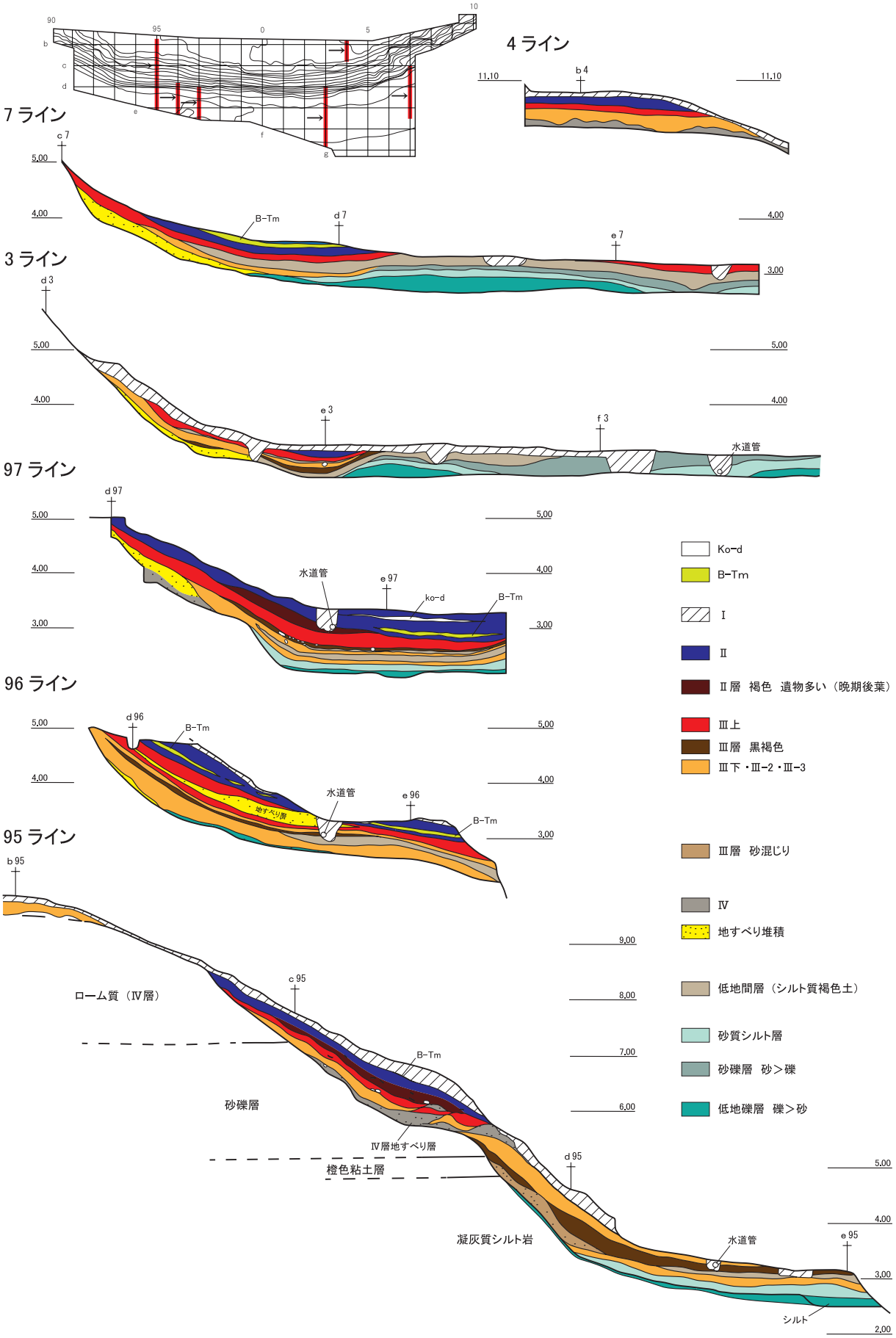
２　土層

遺跡は津軽海峡と後背の山地に挟まれた標高12m前後の海岸段丘上から、大平川が開析した標高３m前後の低位の段丘面上にひろがる。付近の地形の基盤は凝灰質シルト岩で、段丘部では標高５m付近から現れ（口絵２、図Ⅱ－１・95ライン参照）、河床部や河口付近の潮間帯にかけて露頭している。こうした潮間帯にはカモメガイ類が岩に穿孔して生息し、その痕跡が残る穴の開いた円礫が遺跡からもしばしば出土した。基盤上には、空気に触れると褐色になる粘土層が20～30cmで堆積し、その上に砂礫層が２～３m、その上にⅣ層とした褐色ローム層が２～３m堆積する。

基本土層は台地上の包含層調査からⅠ～Ⅳ層に分層した。

Ⅰ層：Ⅱ層起原の黒褐色土層で、撹乱層を含む表土層。台地上は耕作、台地下は道や宅地跡などの撹乱を受けていたが、その後荒地となっており、全面笹原に覆われ、層中には笹の根が密に入っていた。層中には下位層からの遺物が含まれている。

Ⅱ層：遺物包含層である黒色土層で、残りの良い本層中にではKo-d層（2.5Y8/1灰白色）やB-Tm


4 ライン
b 4
11.10
7 ライン
c 7
d 7
e 7
B-Tm
5.00
4.00
3.00
3 ライン
d 3
e 3
f 3
水道管
97 ライン
d 97
e 97
ko-d
B-Tm
96 ライン
d 96
e 96
地すべり層
95 ライン
b 95
c 95
d 95
e 95
ローム質（Ⅳ層）
砂礫層
Ⅳ層地すべり層
橙色粘土層
凝灰質シルト岩
シルト
9.00
8.00
7.00
6.00
2.00
Ko-d
B-Tm
Ⅰ
Ⅱ
Ⅱ層　褐色　遺物多い（晩期後葉）
Ⅲ上
Ⅲ層　黒褐色
Ⅲ下・Ⅲ-2・Ⅲ-3
Ⅲ層　砂混じり
Ⅳ
地すべり堆積
低地間層（シルト質褐色土）
砂質シルト層
砂礫層　砂＞礫
低地礫層　礫＞砂

図Ⅱ－1　土層断面図

層（7.5YR6/6橙色）の薄い堆積が見られる。台地上のⅡ層は、a５調査区付近が最も残りが良く、B-Tm層（7.5YR6/6橙色）を挟んだ上位に30㎝、下位に10㎝ほどの堆積が観察された。遺物包含層は火山灰層直下の黒色土層から縄文時代晩期の遺物が出土し、それより下位の黒褐色土層（Ⅲ層）になると遺物はなかった。低位の段丘面では、崖縁にd４区付近（図Ⅱ－１・３ライン参照）から発生し、d96区（図Ⅱ－１・97ライン参照）で調査区南側に外れる、融雪期などに水が流れた痕跡（流路跡）が検出された。流路上では包含層が厚く堆積し、最も下流側のe96区付近では、Ⅱ層中に、Ko-d（2.5Y8/1灰白色）とB-Tmの２枚の火山灰層が残っていた。

Ⅲ層：Ⅱ層下にある黒褐色（10YR2/3）から暗褐色（10YR3/4）の遺物包含層で、段丘上では遺物がほとんど含まれなかった。調査区の拡張後、低位の段丘面の調査でも、Ⅱ層下に段丘上と同じく黒褐色土層があらわれたため、同じ基本土層で調査をすすめたが、低位の段丘で現れるⅢ層は、段丘上のⅢ層とは異なる層であることが調査を進めるにつれ判明した。まず、流路跡では、狭小な範囲ではあるが、本層がローム質の間層を挟んで３つの層に分離していた。これを上層のⅢ層に対し、中間の層をⅢ－２層、下層をⅢ－３層とし調査をすすめた。出土する遺物は、Ⅲ－２層からは縄文時代晩期前葉、Ⅲ－３層からは縄文時代後期後葉の遺物が出土した。また、Ⅲ－３層から出土する遺物は０ラインより東側にかぎられたた。d96区斜面際には、厚く黒褐色土層が堆積し、その下位には、拳大ほどの円礫を多く含む縄文時代晩期後葉の層が確認された（図Ⅱ－１・97ライン参照）。さらにその下位には縄文時代晩期前葉の遺物を含む黒褐色土層があり、流路部で３層に分離し、Ⅲ－２層からは、上ノ国式の深鉢が一括で出土した。このことからd96～97にかけてⅡ層下には遺物を含む縄文時代晩期後葉の人為的な廃土層が挟まっていたとみられる。また、「地すべり層」とした無遺物のブロック状のⅣ層と砂礫層の混土層がd95区のⅢ層中にみられた（図Ⅱ－１・96ライン参照）。この層はc94・95区の風倒木などで生じたとみられ、その結果くぼんだ斜面に土器などが廃棄され、堆積した地すべり層にぶつかり流路跡はd96区で南にそれたと考えられる。同様な地すべりの可能性のある層は斜面裾d、e97～99区の低地でも確認された。砂礫層の薄い堆積がⅡ層中に挟まり、その上下から縄文時代晩期後葉の遺物が出土している。時期差は不明である。

Ⅳ層：褐色ローム質土層、本層は黒褐色土層下の漸移層～褐色ローム層とする。台地上の包含層で基本土層を決めたため、遺物の出土しない暫移層を設定していない。崖の堆積状況から、Ⅳ層は標高約７ｍまで堆積する。

その他：低位の段丘面を調査する際に設定した土層である。土層堆積が二次的（地すべり層）とみられる部分には、層中にドットを加えている。95ラインなどでは、斜面中腹でⅢ層とⅣ層の逆転しているところがあり、ドットが付されたⅣ層が96ラインの地すべり層と繋がり、その下位のⅢ層からは後期前葉の土器６、後期後葉の底部片土器52が出土しているほかはほとんど遺物がない。流路跡のⅢ層が分離する間層に「低地間層」とした土層を設定した。

海岸段丘裾の流路は、e３区付近から生じていたようだが、付近にコンクリート製の住宅基礎が残っており、詳細不明である。また、e３区より東側は孫七川側にゆるやかに傾斜し、Ⅲ層中には同様に低地の間層が挟まるが、Ⅲ層以下から遺物は出土しなかった。３、７ラインの観察から、遺物包含層は海岸段丘裾の沢を越えた海側では、河川性の堆積層（青系で彩色）が標高３ｍ付近まで高まっており、黒色土層も標高４ｍ付近まであった可能性があるが、住宅等で削平されていた。

３　周辺の遺跡

木古内町内の遺跡は、海岸に沿った段丘上に集中することがしられている。平成28年８月現在、木古内町内で周知されている遺跡は62ヵ所である。そのうち、これまでに調査あるいは一部調査の行われた遺跡は全部で35ヵ所である。近年、緊急発掘調査が増えており、農道整備事業で９遺跡、砂利採取事業で２遺跡、北海道新幹線建設事業で６遺跡、高規格道路函館江差自動車道建設事業で14遺跡の調査が行われている。

大平遺跡周辺には、南西側に大平２遺跡（21)、大平３遺跡（22)、木古内遺跡（３)、木古内２遺跡（28）が、北東側には大平４遺跡（29)、蛇内遺跡（８)、蛇内２遺跡（19)、蛇内３遺跡、札苅２遺跡（30)、札苅遺跡（４）がある。(　) 内は搭載番号。このうち、調査された遺跡について、概略を記す。

大平遺跡：報告範囲の北側では、北海道新幹線建設工事に伴い、平成21～23年度に4,786㎡の発掘調査が実施され、縄文時代前期後半の大規模な集落跡がみつかっている。検出された遺構は、竪穴住居跡53軒(擦文文化期６軒、後期前葉１軒、中期初頭１軒、前期後半45軒)、土坑52基、フラスコ状ピット64基、柱穴状ピット36基、盛土遺構１ヵ所などで、出土遺物総数は178万点にのぼる。前期以外では、擦文文化期の竪穴住居址が、大平川に近い、台地上西側に６軒が並んで検出されている。時期は８世紀中葉が５軒、９世紀中葉が１軒である。また、台地上の住居址の覆土の落ち込みなどからは、縄文時代晩期後葉の遺物がまとまって出土している。(北埋調報280・321)

大平４遺跡：孫七川左岸にひろがる。発掘調査は、平成21・22年度に北海道新幹線建設工事に伴い3,183㎡、平成24～26年度にかけては高規格道路函館江差自動車道建設事業で15,593㎡、合計18,776㎡の発掘調査を実施している。縄文時代中期後半の集落跡が検出されている。遺構は、竪穴住居跡14軒（中期後半12軒、早期後半２軒)、土坑68基、Tピット４基などで、出土遺物総数は約148,000点である。(北埋調報280・292・調査年報25・26・27)

木古内遺跡：北海道新幹線建設工事に伴い平成22・23年度に12,020㎡の発掘調査を実施した。

検出された遺構は、竪穴住居跡31軒（擦文文化期２軒、早期後半７軒、前期後半14軒、後期前半６軒、縄文時代２軒)、土坑153基、Tピット９基、擦文文化期のものとみられる溝状遺構１ヵ所などで、出土遺物総数は138,574点である。(北埋調報304)

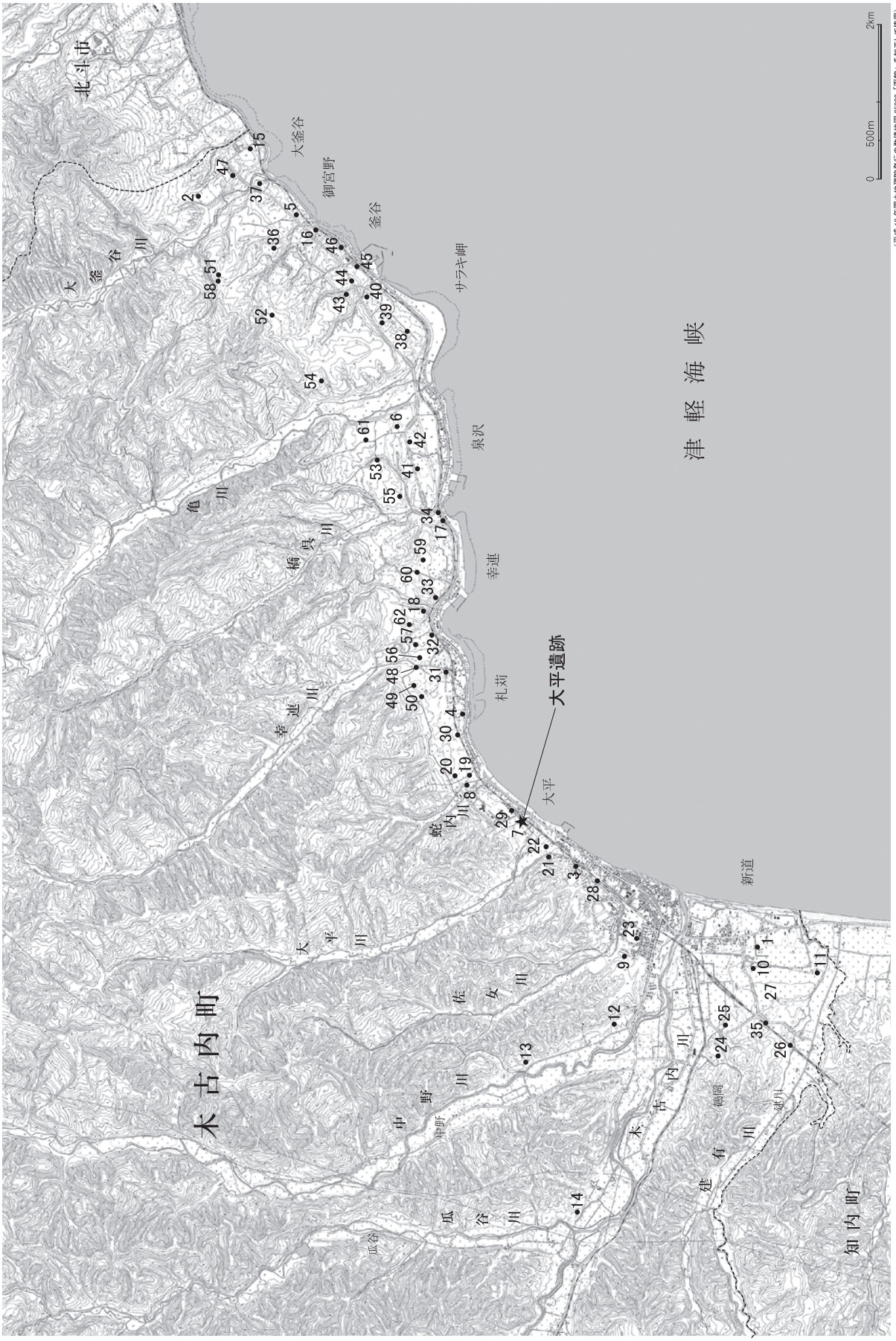
木古内２遺跡：北海道新幹線建設工事に伴い平成22・23年度に1,280㎡の発掘調査を実施した。

台地縁の狭い範囲から、長径11mを越える大型竪穴住居跡を含む縄文時代前期後半の竪穴住居跡６軒等が検出された。出土遺物総数は19,323点である。(北埋調報278・293)

蛇内遺跡：広域営農団地農道整備に伴い平成12年度に1,200㎡の発掘調査を実施し、竪穴住居跡８軒、土坑39基、捨て場遺構などを検出した。(木古内町教育委員会1997)

蛇内２遺跡：北海道新幹線建設工事に伴い平成21～23年度に11,357㎡の発掘調査を実施した。検出された遺構は、竪穴住居跡15軒、土坑87基、フラスコ状ピット９基などで、出土遺物総数は138,574点である。(北埋調報281・292)

札苅遺跡：北海道開拓記念館（現北海道博物館）が昭和46～47年度に学術調査353㎡を実施し、晩期中葉の墓60基や竪穴住居跡２軒がみつかっている。(北海道開拓記念館1976）昭和48年度には、国道拡幅に伴う発掘調査812㎡を木古内町教育委員会が実施し、竪穴住居跡２軒、和人の墓１基、アイヌ墓１基などがみつかっている。遺物は、縄文時代晩期前・中葉の遺物を中心に約176,000点が出土している。(木古内町教育委員会1974）昭和60年度には津軽海峡線建設工事に伴う発掘調査1,753㎡が実施され、晩期中葉の土坑４基などが検出されている。(北埋調報34)



図Ⅱ-3　木古内町内の遺跡

表Ⅱ-1　木古内町の遺跡一覧

登載番号	遺　跡　名	種　別	主な時期	調　査　歴(報告年)
B-05-01	新道遺跡	遺物包含地	縄文	
B-05-02	大釜谷遺跡	遺物包含地	縄文(中期・後期)	
B-05-03	木古内遺跡	集落跡	縄文(前期・中期)・擦文	2010・2011　道埋文(2013)
B-05-04	札苅遺跡	集落跡	縄文(晩期)・近世	1971・1972　北海道開拓記念館(1976) 1973　町教委(1974) 1983　道埋文(1986)
B-05-05	釜谷遺跡	集落跡	縄文(早期～晩期)・擦文	1991～1993　町教委(1999)
B-05-06	泉沢遺跡	遺物包含地	縄文	
B-05-07	大平遺跡	集落跡	縄文(早期～晩期)・擦文	2009～2011・2013　道埋文(2011・2015・2016本書)
B-05-08	蛇内遺跡	集落跡	縄文(前期～後期)	2000　町教委(2004)
B-05-09	新栄町遺跡	遺物包含地	縄文(後期・晩期)	
B-05-10	新道3遺跡	集落跡	縄文(中期・後期)	1996　町教委(1997)
B-05-11	新道2遺跡	集落跡	縄文(前期)	1997～2002　町教委(1999・2004)
B-05-12	中野A遺跡	遺物包含地	縄文	
B-05-13	中野B遺跡	遺物包含地	縄文	
B-05-14	瓜谷遺跡	遺物包含地	縄文	
B-05-15	大釜谷2遺跡	遺物包含地	縄文(前期・中期)	
B-05-16	釜谷2遺跡	遺物包含地	縄文	
B-05-17	橋呉遺跡	遺物包含地	縄文・続縄文(前半期)	
B-05-18	幸連遺跡	遺物包含地	縄文(中期・後期)	
B-05-19	蛇内2遺跡	集落跡	縄文(早期～晩期)	2009～2011　道埋文(2011・2012)
B-05-20	蛇内3遺跡	遺物包含地	縄文(後期・晩期)	
B-05-21	大平2遺跡	遺物包含地	縄文(後期・晩期)	
B-05-22	大平3遺跡	遺物包含地	縄文(中期)	
B-05-23	高校高台遺跡	遺物包含地	縄文(後期・晩期)	
B-05-24	鶴岡遺跡	遺物包含地	縄文	
B-05-25	鶴岡2遺跡	遺物包含地	縄文(前期～後期)・続縄文	1988・1989　町教委(1989・1990)
B-05-26	建川遺跡	遺物包含地	縄文(早期～後期)	1984　道埋文(1986)
B-05-27	新道4遺跡	集落跡	旧石器・縄文(早期～晩期)・続縄文	1984～1986・2013　道埋文(1986・1987・1988・2015)
B-05-28	木古内2遺跡	集落跡	縄文(前期)	2010・2011　道埋文(2011・2012)
B-05-29	大平4遺跡	集落跡	縄文(早期～中期・晩期)	2009・2010・2012～2014　道埋文(2011・2012・2016)
B-05-30	札苅2遺跡	遺物包含地	不明	
B-05-31	札苅3遺跡	遺物包含地	不明	
B-05-32	札苅4遺跡	遺物包含地	不明	
B-05-33	幸連2遺跡	遺物包含地	不明	
B-05-34	橋呉2遺跡	遺物包含地	不明	
B-05-35	建川2遺跡	集落跡	縄文(前～晩期)	1985・1986　道埋文(1987)
B-05-36	釜谷3遺跡	遺物包含地	縄文(後期)	
B-05-37	釜谷4遺跡	遺物包含地	旧石器・縄文(早期～後期)	1990　町教委(1991)
B-05-38	亀川遺跡	遺物包含地	縄文(晩期)	
B-05-39	亀川2遺跡	遺物包含地	縄文(中期～晩期)	1995　町教委(1998)
B-05-40	亀川3遺跡	集落跡	縄文(早期～後期)	1995　町教委(1998)
B-05-41	泉沢2遺跡	集落跡	縄文(前期～晩期)・擦文	1998～2001　町教委(2003・2004)
B-05-42	泉沢3遺跡	遺物包含地	縄文(後期)	1996　町教委(1998)
B-05-43	亀川4遺跡	遺物包含地	縄文	
B-05-44	釜谷5遺跡	集落跡	縄文(早期～晩期)	1993　町教委(1995)
B-05-45	釜谷6遺跡	遺物包含地	縄文	
B-05-46	釜谷7遺跡	遺物包含地	縄文	
B-05-47	大釜谷3遺跡	集落跡	縄文(前期～晩期)	2001　町教委(2003)
B-05-48	札苅5遺跡	遺物包含地	縄文(早期・前期・後期)	2011　道埋文(2012)
B-05-49	札苅6遺跡	集落跡	縄文(中期・後期)	2011　道埋文(2013)
B-05-50	札苅7遺跡	集落跡	縄文(中期・後期・晩期)	2013～2016　道埋文
B-05-51	釜谷8遺跡	遺物包含地	縄文(早期・中期・後期)	2011・2012　道埋文(2013)
B-05-52	釜谷9遺跡	遺物包含地	縄文	
B-05-53	泉沢4遺跡	遺物包含地	縄文	
B-05-54	亀川5遺跡	遺物包含地	縄文(後期・晩期)	2014　道埋文(2016)
B-05-55	泉沢5遺跡	集落跡	縄文(中期・後期)	2014　道埋文(2016)
B-05-56	札苅8遺跡	集落跡	旧石器・縄文(前期)	2014　道埋文
B-05-57	札苅9遺跡	遺物包含地	不明	
B-05-58	釜谷10遺跡	遺物包含地	縄文(後期)	2016　道埋文
B-05-59	幸連3遺跡	遺物包含地	縄文(中期)	2015　道埋文
B-05-60	幸連4遺跡	遺物包含地	縄文(前期後半・中期後半～後期前葉)	2015・2016　道埋文
B-05-61	泉沢6遺跡	遺物包含地	縄文(早期後半・後期前葉)	2015・2016　道埋文
B-05-62	幸連5遺跡	集落跡	縄文(前期・中期)	2016　道埋文

町教委:木古内町教育委員会、道埋文:北海道埋蔵文化財センター

Ⅲ　遺　　構

検出された遺構は、墓３基、土坑５基、焼土４ヵ所、小ピット１ヵ所、畝状遺構（畑跡）１ヵ所である。縄文時代の遺構はいずれも段丘面上の標高10.0mより高い位置から掘り込まれている。特に縄文時代晩期後葉の墓、焼土、土坑は標高10.5mよりも高い場所に集中分布している。

晩期前葉の墓（P－241、P－243、P－246）は、包含層Ⅱ層中から小礫が集中出土することからみつかっている。長軸は東西方向で、頭位は東側にあるとみられる。（図Ⅲ－１　遺構位置図）時期は大洞BC式併行の上ノ国式期で、３基のうち２基から土器、石器のほか漆塗り竪櫛やサメ歯を利用した装身具などの副葬品が出土している。墓坑は密集分布していることから、墓域を形成しているとみられ、その範囲は調査区外にも広がると考えられる。

縄文時代晩期後葉の土壙２基（P－244、P－245）は、墓から東に約10m離れた場所で検出された。平面形は小判型で、掘り込みは皿状で比較的浅く、覆土はⅡ層の落ち込む堆積である。坑底面付近からは土器片などがまとまって出土している。この２基の土坑も近接しており、墓域の東側に分布域をもっていた可能性がある。時期不明の円形土坑（P－242、P－247、P－248）は墓坑より西側に散在して３基が検出された。そのうちの１基は墓に切られてみつかっている。時期は縄文時代晩期前葉よりも古いとみられる。焼土（F－101～104）は縄文時代晩期前葉の墓と土坑が分布する範囲の間で４ヵ所みつかっている。付近には晩期後葉の遺物散布面があったが、それより低い面で検出されていることから、墓や土坑と同時期とみられる。晩期前葉の遺構は、台地上の包含層の残りが良い範囲と重なって検出されているため、より西側にも焼土や浅い土坑はあった可能性もあるが、今回調査した狭小な範囲では、西から墓坑群、焼土群、土坑群と遺構毎に集中域があるようにみえる。

以下個々の遺構の記載にはいるが、遺構番号順ではなく、掲載順に墓、土坑、焼土の順に記載する。

P－241（図Ⅲ－２・図Ⅳ－８－62・図Ⅳ－13－194・図版２・８・36・41）

位置　ｂ０区

規模　181.0×81.2×50.4㎝

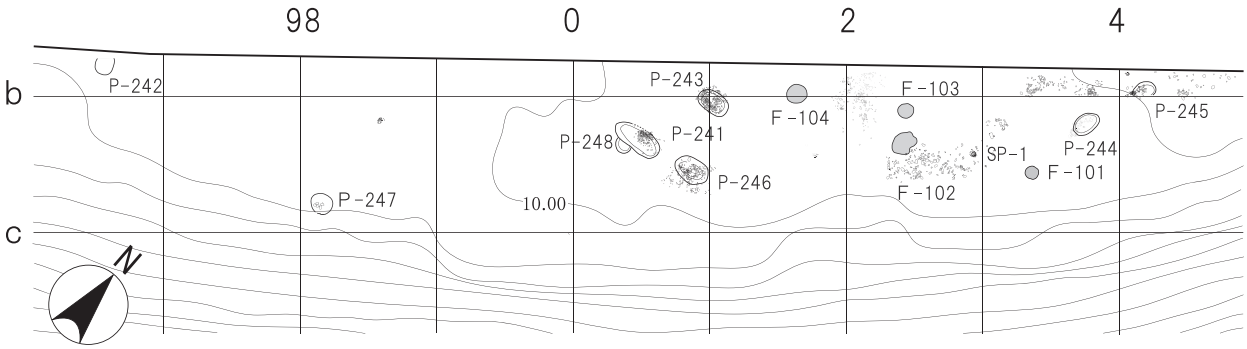
平面形　長円形

確認・調査：表土層を取り除いたあとのⅡ層面に小礫が集中する場所を発見したことから墓の存在する可能性があるとみて調査を進めた。墓の掘り込み面は撹乱を受けているとみられるが、まず小礫集中範囲を平らに検出し、その範囲を測量したのち、検出された範囲の長軸を軸とし北側を掘削した。覆土にも小礫は多量に含まれ、測量は検出面と北半分の掘削直後にとどめたが、覆土の全面を覆っていたとみられる。小礫層をこえると黒褐色土層の堆積になり、含まれる小礫の量は減ったが、この時点で手前を掘りすぎた。礫層下の黒褐色土層はⅢ層とⅣ層の混土で、遺構の中央で山形に盛り上がり、堆積の裾は長軸両端付近に達した。覆土下位なるにつれⅢ層とⅣ層がブロック状に混じりあう堆積に変化しする。検出面で確認した小礫層は本層に重なって堆積する。坑底面は平らで、少量の円礫がみられたほか遺物や遺体の痕跡はみつからなかった。

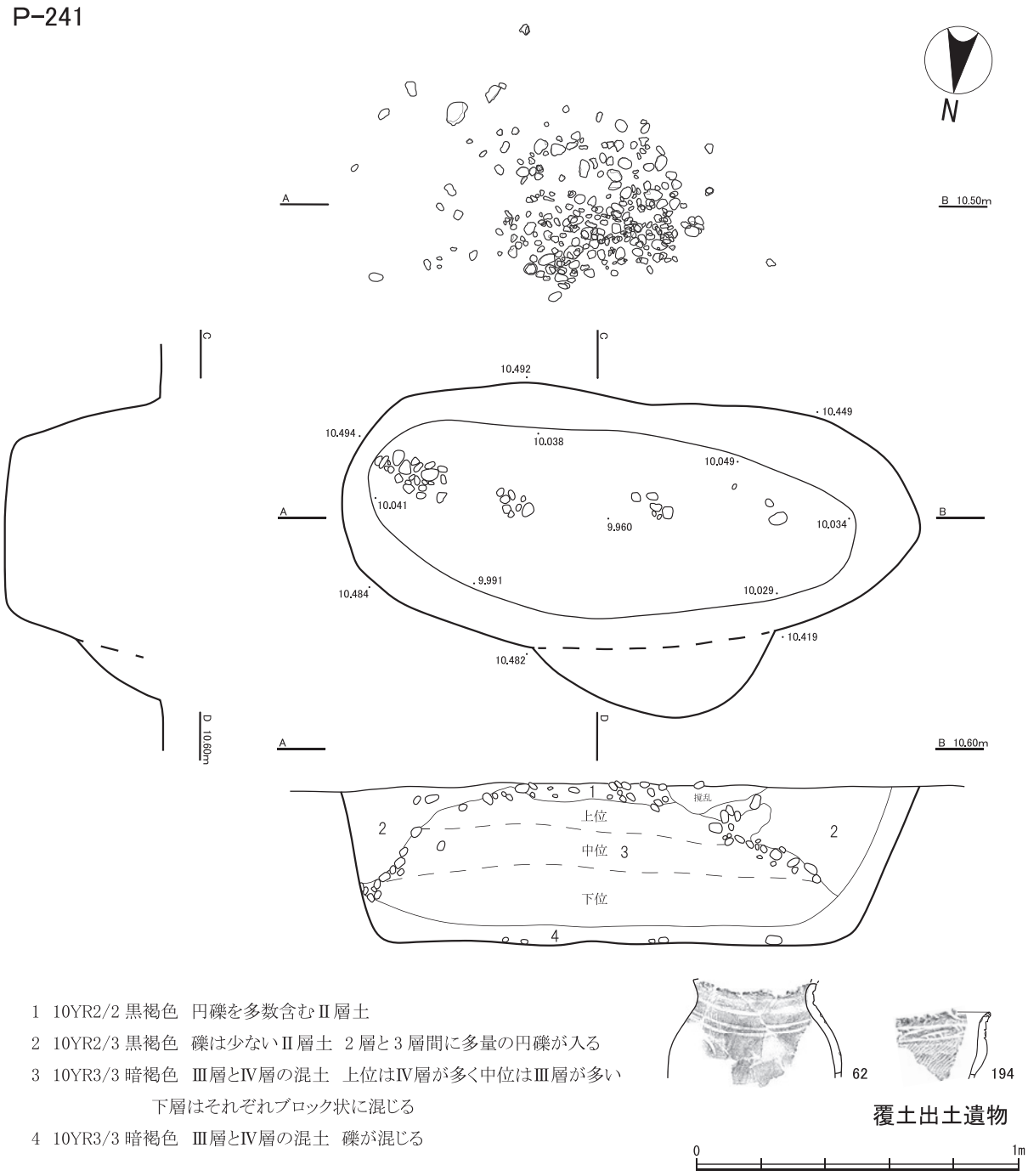
遺物出土状況：検出面から覆土にかけて出土した小礫は、頁岩、珪岩質の粒径３～４㎝前後の円礫が主体で、付近の海岸や河原の粒径がそろっている場所から持ち込んだものと考えられる。回収できた礫の総数は3,422点、総重量39,522gで、それに混じり土器の小片や剥片類が出土した。

時期：検出された土器はすべて縄文時代晩期前葉で、墓も同時期とみられる。

掲載遺物：土器62は搬入品とみられる壺形土器の頸部片で、無文地に頸部に３条の沈線、体部上半には三叉文が施される。土器194は頸部に羊歯状文が施された鉢の口縁部片である。



図Ⅲ-1　遺構位置図



1　10YR2/2 黒褐色　円礫を多数含むⅡ層土
2　10YR2/3 黒褐色　礫は少ないⅡ層土　2 層と 3 層間に多量の円礫が入る
3　10YR3/3 暗褐色　Ⅲ層とⅣ層の混土　上位はⅣ層が多く中位はⅢ層が多い
　　下層はそれぞれブロック状に混じる
4　10YR3/3 暗褐色　Ⅲ層とⅣ層の混土　礫が混じる

図Ⅲ-2　P-241 平面図・断面図

P－243（図Ⅲ－３・図Ⅲ－４・図Ⅳ－10－132・図Ⅳ－８－91・93・口絵３・７・図版２・12・15）
位置：ｂ１杭下
規模：115.8×72.4×55.6㎝
平面形：　小判形
確認・調査：包含層調査が進むと、ｂ１の杭の周囲に小礫が集中出土することがわかり、杭山を小さく削り小礫集中の範囲の検出を進めた。全体の範囲が見えてくると、一部礫のない場所が現れ、その脇に大型礫が２個、範囲中央に向かって落ち込む状況で検出された。そこで、２つの大型礫に重なる方向で断面測量の軸を決め、その南側を掘削した。断面はこの位置でほぼ墓の中央にあたり、上部に落ち込む包含層Ⅱ層と杭を取り除くと（口絵３　P－243断面参照）、上層の小礫が多数混じる黒褐色土層が墓の中央に落ち込み、その上に二つの大型礫がのっているのが解った。覆土下位はⅣ層起原の暗褐色土層になり、坑底面付近に薄くベンガラ混じりの層が入る。坑底面は平らで、坑底東側から大臼歯が２本、中央から臼歯の破片が検出された。
遺物出土状況：出土した小礫は、ほとんどが検出面から覆土１層で出土し、覆土中や坑底面面からも少量が出土した。ほかの墓坑と同じく粒径３～４㎝前後の頁岩や珪岩質の円礫が主体で、付近の海岸や河川から持ち込んだものと考えられる。回収した礫の総数は4,151点、総重量45,677gである。墓坑中央で出土した大型礫は長径20㎝前後で、白いメノウ質のものと、桃色に近い珪岩質の礫で、こういった礫も木古内では普通にみられる。出土状況から、墓の上面に小礫を敷きつめ、その上に大きな礫が長軸方向に２個並んでいたとみられる。

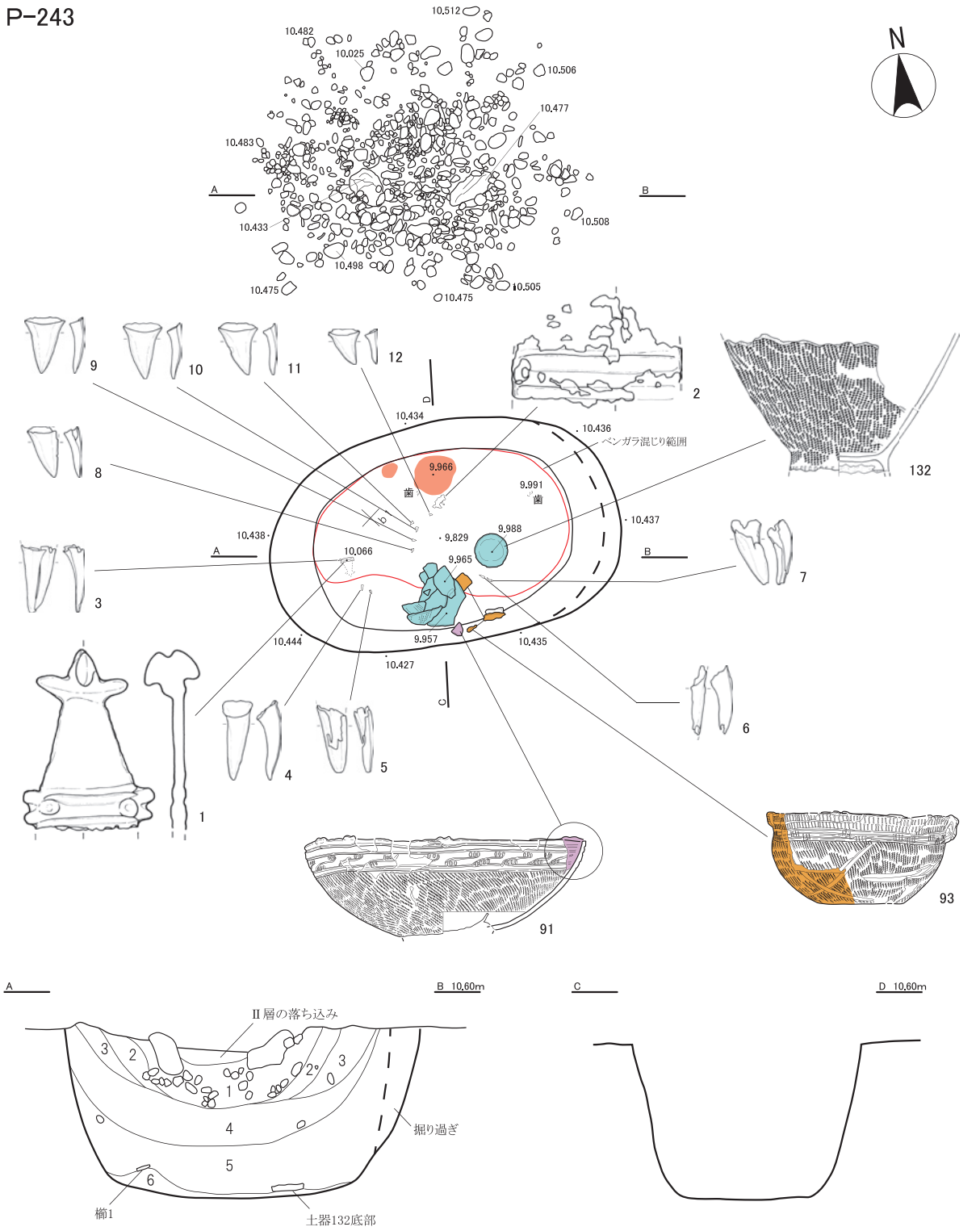
坑底面南側からは副葬品とみられる大型の台付深鉢底部片がまとまって出土し、その周辺からP－246に副葬されていた２個体の土器の一部の破片が出土している。装身具とみられるアオザメの歯15点や漆塗り竪櫛２点は坑底面のベンガラ混じりの薄い層上や層中から出土している。

これら装身具は、墓坑を半截している際に、縦櫛頂部の装飾を破損し、破片を掘り上げた土の中から回収している。また、その際にサメ歯もみつかっており、掲載したサメの歯15点中の５点は排土から回収したもの、残る10点中の、№４～７の位置は掘り手の申告位置である。竪櫛（図Ⅲ－４－１）は、結歯部の破片が断面中に残っており、出土位置や層位、出土方向は確定できた。完掘の際、坑底面に薄く堆積するベンガラ混じりの層上から縦櫛１の結歯部と、サメ歯№３が重なって出土した。
時期：副葬された土器から縄文時代晩期前葉の墓とみられる。
掲載遺物：土器132は大型の台付深鉢底部片で、口縁部から胴部と台の端部を欠く。台にヘラ状の工具による刺突列が施されることから、縄文時代晩期前葉の上ノ国式相当と考えられる。土器91は同時期の墓P－246の坑底面付近から出土した底部を欠く浅鉢で、口縁部片の１片が、土器132隣の南壁面に付く状況で出土した。土器93もP－246の覆土中からまとまって出土した破片だが、口縁部から胴下部の破片が土器132の下からと脇の南壁面で出土している。

櫛１（図Ⅲ－４－１）は結歯部から上部の装飾部を破損し、接合復元したもので、表面に水銀朱が塗布される。櫛歯は８本で、両脇の歯が太かったとみられる。頂部の装飾の加工が搬入品の大洞BC式土器にみられる貼瘤文と酷似しており、搬入品と考えられる。詳しい分析は第Ⅴ章に記載している。

櫛２（図Ⅲ－４－２）は脆弱な状況で出土したため、出土状況で固めている。水銀朱が塗布され、結歯部の幅は55㎜、厚さは５㎜ほどで、櫛歯は10本程度あったとみられる。

図Ⅲ－４－３～17はサメ歯の装飾品とみられる。歯根部は失われており、穿孔などの加工があったかは不明である。アオザメの下顎の歯がほとんどで、重複している歯が多い（サメの歯は同じ歯が複数ある）。同じ歯でも大きさが異なることから、同一個体の歯ではないとみられる。

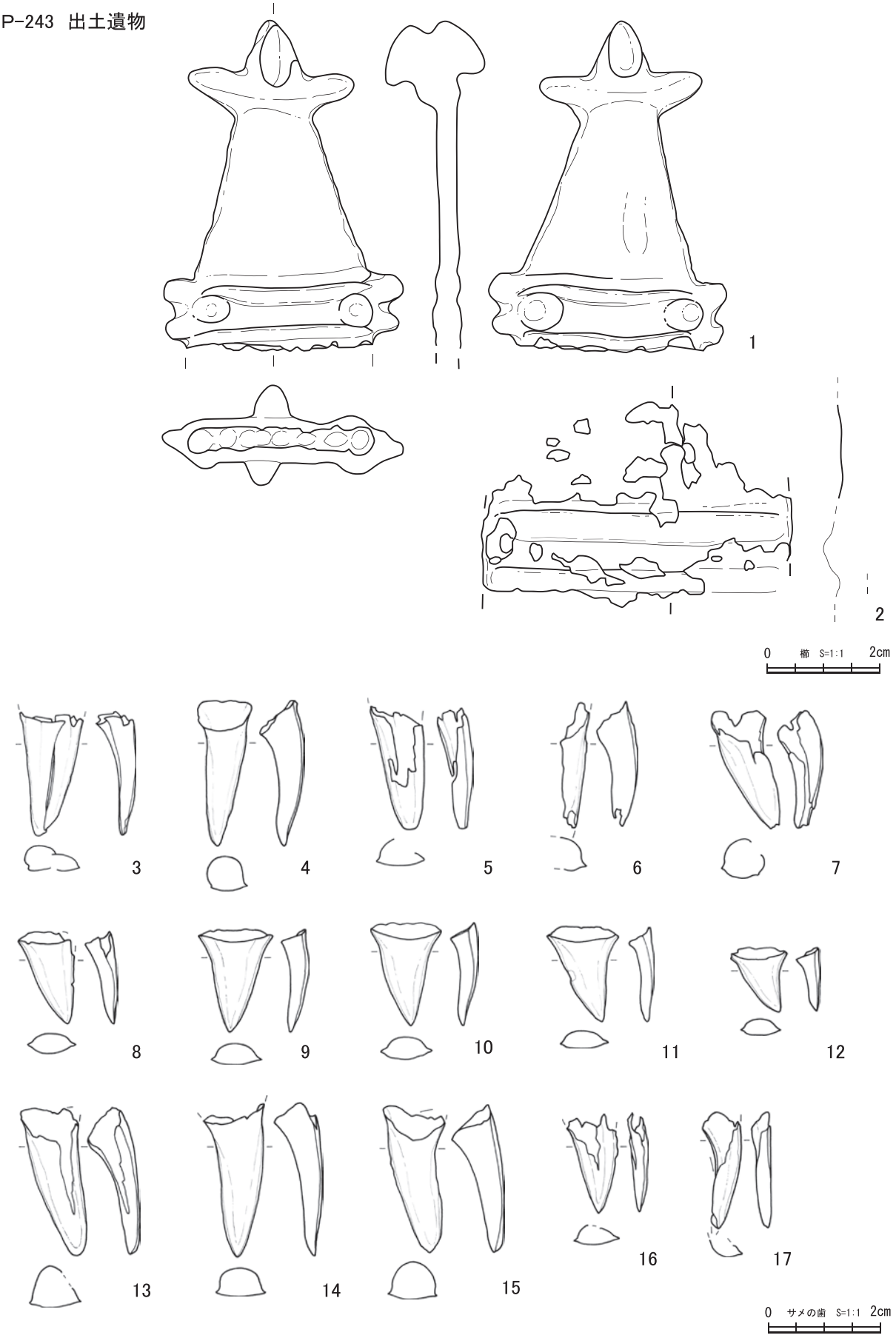


1　10YR3/1 黒褐色　小礫を多数含むⅢ層土
2　10YR4/3 にぶい黄褐色　Ⅳ層にⅢ層が少量混じる
3　10YR3/1 黒褐色　Ⅲ層土
4　10YR4/1 褐灰色　Ⅲ層＋Ⅳ層の混土　1：1
5　10YR4/3 にぶい黄褐色　Ⅳ層主体にわずかにⅢ層混入
6　7.5YR4/2 灰褐色　ベンガラが混じる　遺体層

0　1m

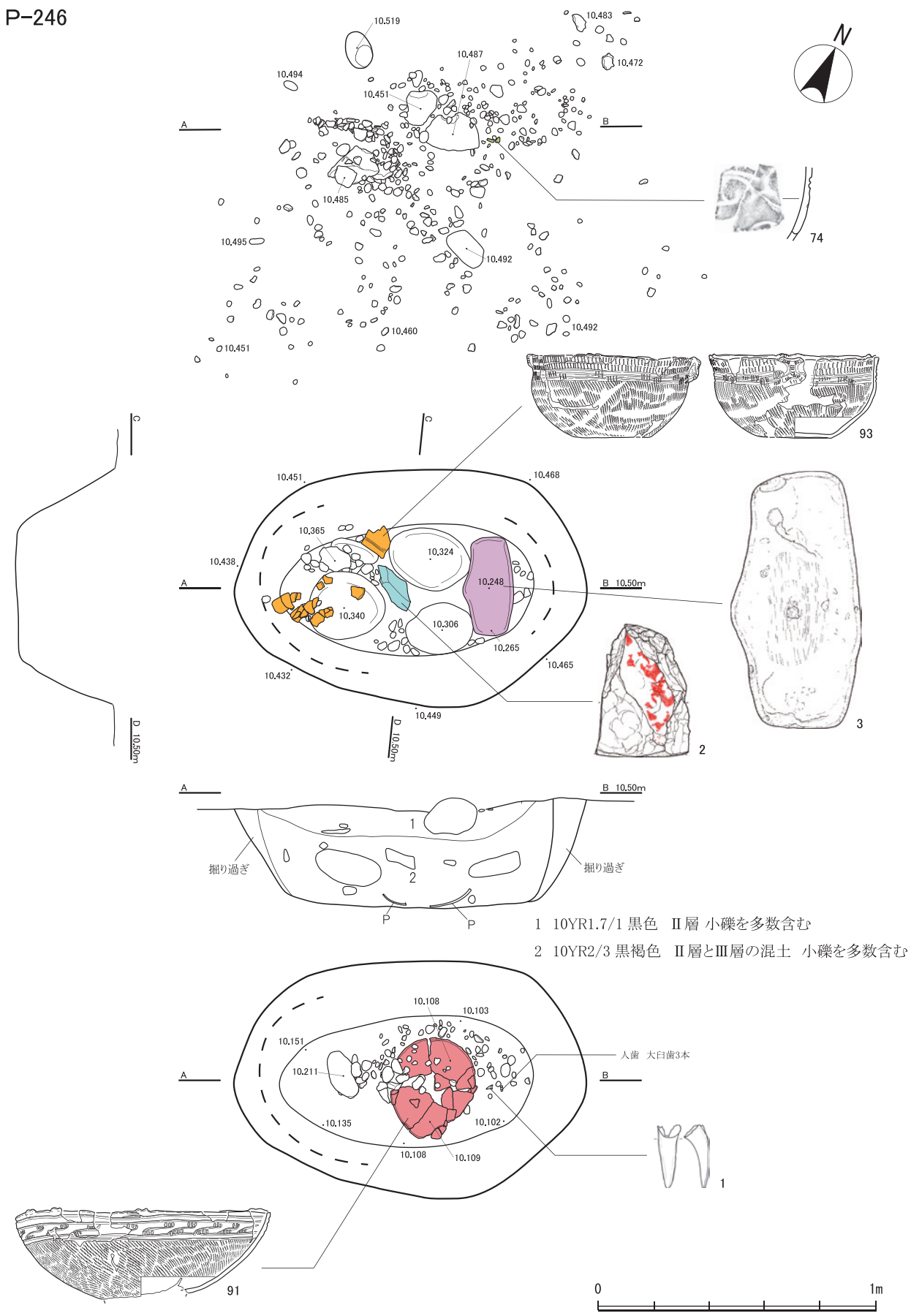
図Ⅲ-3　P-243 平面図・断面図

P-243 出土遺物



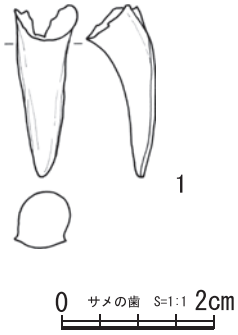
図Ⅲ-4　P-243 出土遺物

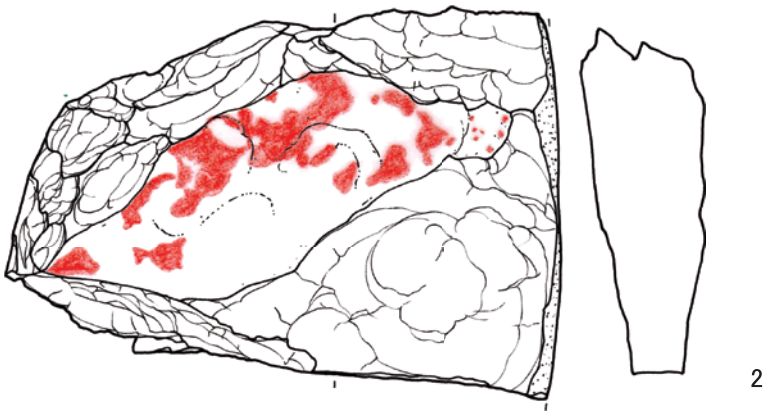
P－246（図Ⅲ－５・図Ⅲ－６・図Ⅳ－10－132・図Ⅳ－８－91・93・口絵３・図版２・８・12）
位置　ｂ０
規模　周囲を掘りすぎている。推定される規模は106.8×56×36.6㎝である。
平面形　小判形
確認・調査：縄文時代晩期前葉の墓P－241の東側の包含層調査で１m×1.5mほどの範囲に散らばる大小の円礫が出土しはじめた。墓があるとみて検出を進めると、礫の分布範囲の中に割れた大型円礫が深く落ち込む状況で検出された。この礫は墓に入っているものと推測されることと、付近の墓の長軸は２基とも東西方向であったため、この礫を通る東西方向のセクションラインを決め、礫の周囲を中心にライン南側の掘削を進めた。覆土にも小礫が多数含まれたが、測量は検出面と途中の遺物検出の際に出土したものにとどめた。墓の形状を探りながら調査を進めていると、大型の円礫が出土しはじめ、掘削の妨げになってきた。これらの礫を取り上げなければ断面の観察ができないため、セクションラインの調整や、礫の輪郭を出すよう掘り広げたが、結果的には土坑の壁面を掘りすぎることとなった。出土した大型礫の位置を重ねると、土坑の平面形と、ほぼ重なるとみられ、覆土中位に礫をはめ込むように入れ、被葬者の上を覆っていたものとみられる。これは、ほかの２基の墓に比べ、深さが浅く、動物に掘り起こされるのを防ぐための策だった可能性もある。断面図には現れなかったが、大型礫間から坑底面まで小礫を含む層で埋められており、その層中から副葬された土器も出土した。坑底面は平らで、坑底面東側の石皿下からは人の大臼歯２本とサメ歯が出土した。
遺物出土状況：出土した長径30㎝をこえる大型の円礫３点と長方形に近い形状の石皿１点は、覆土の中央にあり、被葬者を埋めたのち上部を覆うように敷き詰めたとみられる。石皿は被葬者の頭上におかれ、円礫が土坑中央に２列、土坑西側に最も大きい礫１点が置かれ、これらの大型礫間の隙間を埋めるように長径20㎝ほどの礫５点が西側や中央付近に配置されていた。石皿以外の大型円礫は被熱のためか、色調が赤みを帯びる安山岩で、供給元は不明だが、持ちこんだものである。これと似た砕石が工事現場で使われていたため、どこの砕石か聞いたところ七飯町の鳴川と教えてくれた。
小礫は、検出面から坑底面までの覆土全般に混じる粒径３～４㎝前後の頁岩や珪岩質の円礫が主体で、付近の海岸や河川から持ち込んだものとみられる。P－246から回収した礫の総数は2,631点、総重量83,498gであった。大型の礫が多い分、総数は他の墓より少ないが、総重量は倍近くある。
　副葬された土器は２点あり、土器91は大型礫より下から底部を打ち欠かれて出土した。出土状況から、ある程度形状を保った状態で被葬者の上に置かれていたとみられる。土器93の破片は、西側覆土中位の大型礫の間や上から土した。２点とも破片のほとんどがそろっていることから、副葬する際に割ったとみられる。また、土器91の口縁部片１片と土器93の口縁部から胴下部の破片10片がP－243の坑底面の副葬土器片のそばから出土ており、P－243・246は同時期につくられた墓である可能性がある。土器74は大洞BC式の搬入品の破片で、検出面付近の小礫層の間からみつかった。副葬品ではなく、同時期の包含層の遺物が紛れたものとみられる。墓坑の中央付近から、被熱した安山岩坑製の台石片が出土、底面東側からは、小礫が散らばる間から、人の大臼歯が２本、その４センチ離れた同レベルからアオザメの歯が１点出土した。
時期：副葬された土器から縄文時代晩期前葉の墓とみられる。
掲載遺物：土器91は縄文時代晩期前葉の上ノ国式相当の浅鉢で、口縁部～胴下部がほぼそろっているが底部を欠く。土器93も縄文時代晩期前葉の上ノ国式相当の浅鉢で、底部は無文で平らに調整され、胴下部の地紋の上には指先ほどの幅のある凹帯で文様が付され、一部交差する。口縁部にはヘラ状の工具による刺突列が２段付され、その下位に太い沈線と刺突で羊歯状文が施される。土器74は覆土に

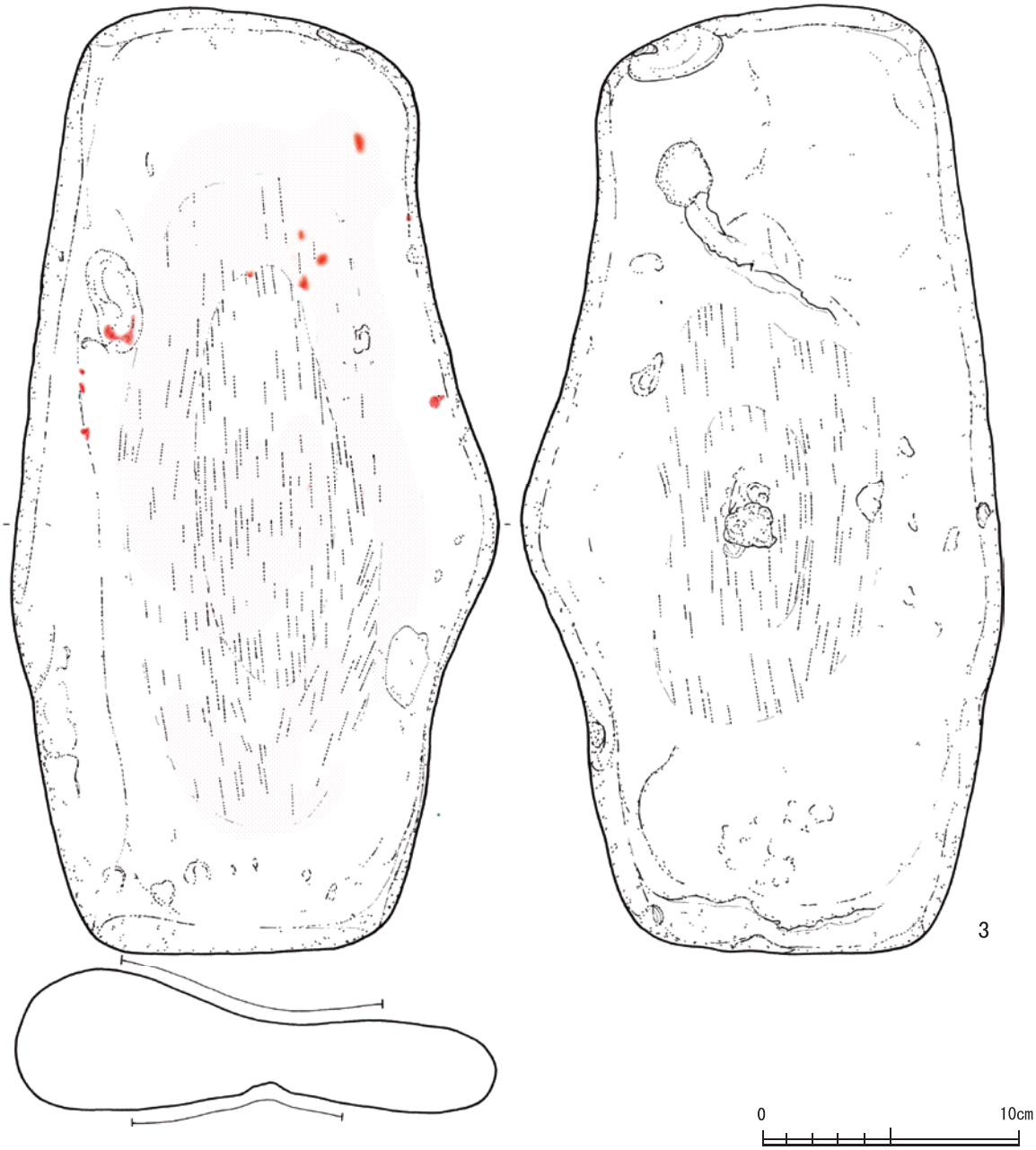


図Ⅲ-5　P-246 平面図・断面図

P-246　出土遺物







図Ⅲ-6　P-246 出土遺物

紛れて出土したとみられる大洞BC式相当の破片で、器面には漆が塗布された痕跡がのこる。

サメ歯１は坑底面の人歯付近から１点出土した。アオザメの下顎歯であるが、P－243から出土しているサメ歯より小さい個体である。２は墓坑中央から出土した台石片で、被熱している。周囲に故意に割った痕跡があり、表面にベンガラが付着する。３は遺体の頭上から出土した安山岩製の石皿である。両面が使用され、出土時の下面側にはベンガラが付着する。２、３の石器に付着するベンガラは石皿で精製されたというよりは、坑底付近の覆土にベンガラが混じっており、それが付着したものとみられる。

P－242（図Ⅲ－７・図版３）

位置　a96　**規模**　72.0×66.0×8.8　**平面形**　円形

確認・調査：海岸段丘上のa列は１m前後の幅しかないため、包含層のⅡ層の残りが悪く遺物の出土しない０ラインより西側では、スコップでⅢ層を掘り下げⅣ層面まで一気に包含層を掘り下げる調査をすすめていた。そのおり、Ⅳ層上面に円形のプランが現れ遺構を確認した。

遺構の一部は調査区外に出ていたため、壁面に対し垂直方向の断面を設定し半截した。残りの覆土は浅く、10㎝も掘ると坑底面に達した。完掘すると、調査区境に残る断面が観察でき、本遺構上でⅢ層が水平体積し、それより下から掘り込まれている状況が観察できた。覆土下位には黒色土層が堆積しているが、埋め戻されない土坑の中に腐植土層がたまったものとみられる。

遺物出土状況：上部はスコップで掘り進めていたためか遺物は１点も出土していない。

時期：Ⅲ層より下から掘り込まれているため、縄文時代後期後葉以前の土坑とみられる。

P－244（図Ⅲ－７・図Ⅳ－８－81・図Ⅳ－67－307・図版３・12・61）

位置　ｂ３　**規模**　101.2×68.8×7.2　**平面形**　楕円形

確認・調査：ｂ３地区の包含層調査が進み、遺物が出土しなくなるⅢ層に達した時点で、Ⅲ層中にⅡ層が円礫や土器片と一緒に楕円形に落ち込むことから確認した。礫に混じる土器片は同一個体とみられ、被熱し細かく割れている状態であった。長軸でセクションラインを設定し、その東側を掘削したところ、すぐに底が出た。皿状の浅い土坑で、覆土にはⅡ層が落ち込み、坑底はⅢ層中である。坑底面中央はやや平らだが坑底面縁は緩やかに立ち上がる。掘り込み面は、より上層のⅡ層中だが、せいぜい20㎝前後の深さしかなかったと推測される。

遺物出土状況：検出面から坑底面まで、覆土中には円礫や被熱した土器片が入っていた。礫の一部も被熱しているのか、割れている状況がみられた。

出土した土器片は613点で、ほとんど同一の縄文時代晩期前葉の壺形土器の破片で、接合の結果ようやく全体像がわかる程度の復元に至った。出土している円礫は65点、最大のもので長径15㎝前後である。礫の中に凹み石が１点含まれていた。

時期：出土した土器から縄文時代晩期前葉の土坑とみられる。

掲載遺物：土器81は上ノ国式相当の壺形土器で、口径10.5㎝、器高26.4㎝ある。破片は多数あったがほとんど接合せず残片となってしまった。底部は上げ底で、胴部は縦長に緩やかに膨らみ高さの半分ほどにピークがくる。口唇は丸みをおび、口縁部は無文である。

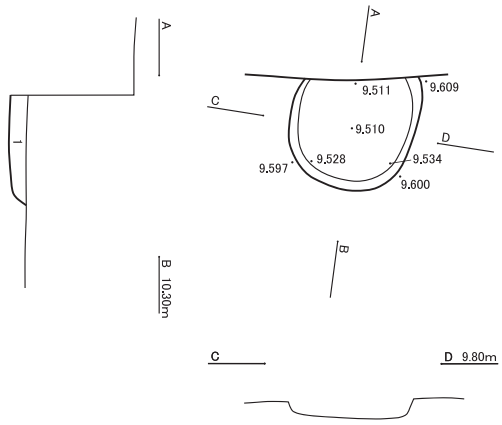
石器40は両面が使用された頁岩製の凹み石である。

P－245（図Ⅲ－７・図Ⅳ－９－90・図Ⅳ－９－96・図Ⅳ－10－124・図版３・13・14・37）

位置　ａ４　**規模**　（88.0）×64.0×12.0　**平面形**　楕円形

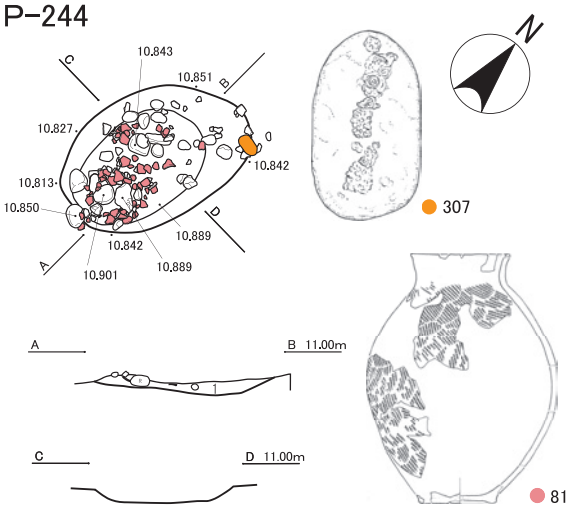
確認・調査：ａ４、ｂ４区境にトレンチを入れたところ、断面のⅢ層中に円礫や土器片と一緒に落ち込むⅡ層の窪みがみつかり、遺構と気づく。セクションはトレンチと並行に10㎝ほど奥まった位置で設

P-242



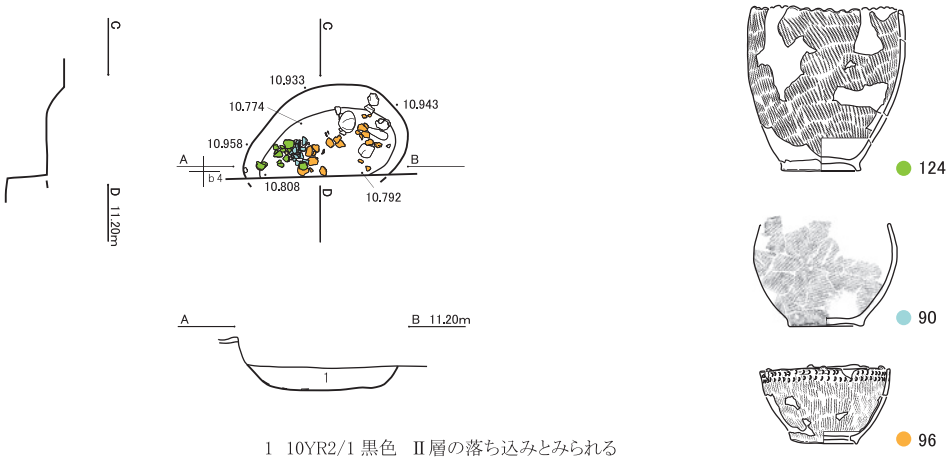
1　10YR2/1 黒色　黒色の腐植土がたまったものとみられる

P-244



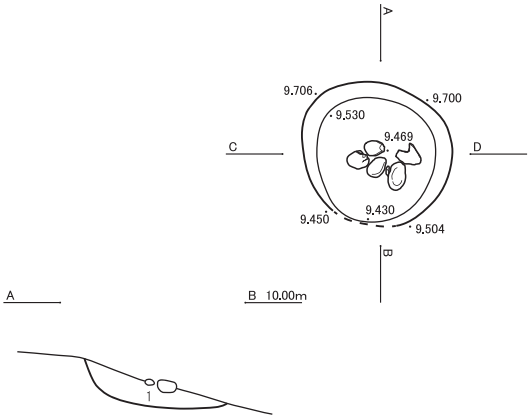
1　10YR2/1 黒色　Ⅱ層の落ち込みとみられる

P-245



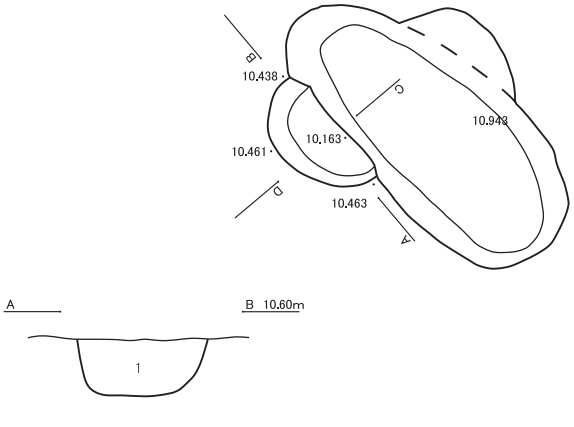
1　10YR2/1 黒色　Ⅱ層の落ち込みとみられる

P-247

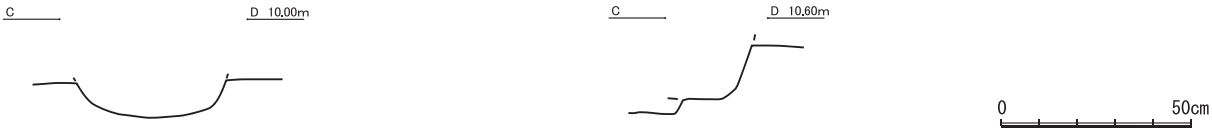


1　10YR2/3 黒褐色　Ⅱ層とⅢ層の混土

P-248



1　10YR2/2 黒褐色　Ⅱ層とⅢ層の混土



図Ⅲ-7　P-242・244・245・247・248 平面図・断面図

定した。トレンチにより、土坑の４分の１、南側の壁の立ち上がり部分が失われている。深さは12㎝ほどで、掘り込み面が多少上面からだとしても、深くて20㎝前後しかなかったと推測される。坑底面は比較的平らだが、壁の立ち上がりは緩やかである。覆土中にも遺物は入るが、土器、礫などの多くは坑底面から集中して出土し、３個体の土器が復元された。

遺物出土状況：本土坑からは118点の土器片が検出され、坑底面から出土した破片から３個体が復元された。土器90は坑底面西側から出土した細かい破片37点が接合したも。土器96は坑底面に広く散らばる15点の破片から、底部のから口縁部の半分までが接合し、ａ３区から口縁部の半分の破片が接合した。土器124は坑底面西側の土器90上に重なる破片32点が接合したもの。坑底面東側では円礫が３点出土している。

時期：出土した土器から縄文時代晩期前葉の土坑とみられる。

掲載遺物：復元された３点はすべて縄文時代晩期前葉の上ノ国式相当の土器である。土器90はキャリパー形の口縁部を持つ鉢で、僅かに残る口唇には刻みが付される。胴部は地文のみで、底部は上げ底である。土器96は小形の鉢形土器で、地文は縦に施文され、口縁部には半截竹管工具による刺突列が２段付される。口唇部は平らに調整され、６ヵ所突起があったとみられる。底部は上げ底である。土器124は小型の深鉢で、器面には地文のみが施される。口唇部は小波状に刻まれる。

Ｐ－247（図Ⅲ－７・図版３）

位置　b98　**規模**　81.5×76.8×24.4　**平面形**　円形

確認・調査：b98区の包含層調査をⅣ層まで下げた時点で、礫が集まっていることから確認された。包含層の残りが悪い、斜面落ち際にある土坑で、検出面上に長径15㎝前後の礫５点がみつかった。検出面も傾斜しているが、深さは約24㎝残る。

遺物出土状況：検出面上から長径15㎝前後の礫５点、礫片１点が出土。本来は土坑覆土中にあったものとみられる。

時期：後期後葉以前の土坑とみられる。

Ｐ－248（図Ⅲ－７・図版３）

位置　ｂ０　**規模**　69.6×－×29.6　**平面形**　円形

確認・調査：縄文時代晩期前葉の墓Ｐ－241の完掘ご、壁面に現れた土坑である。壁面に現れた土坑面を垂直になおし、断面測量した。半分は失われているが、直径70㎝前後の円形土坑だったと考えられる。深さは約30㎝残る。

遺物出土状況：遺物は覆土から礫が１点だけ出土した。

時期：晩期前葉の墓に切られることから、後期後葉以前の土坑とみられる。

Ｆ－101（図Ⅲ－８）

位置　ｂ３　**規模**　51.2×52.0㎝　**平面形**　円形

確認・調査：ｂ３区のⅡ層から検出された焼土である。斜面落ち際で検出したため上面は傾斜している。焼土層は厚いところで約９㎝である。**遺物出土状況**：遺物は出土していない。

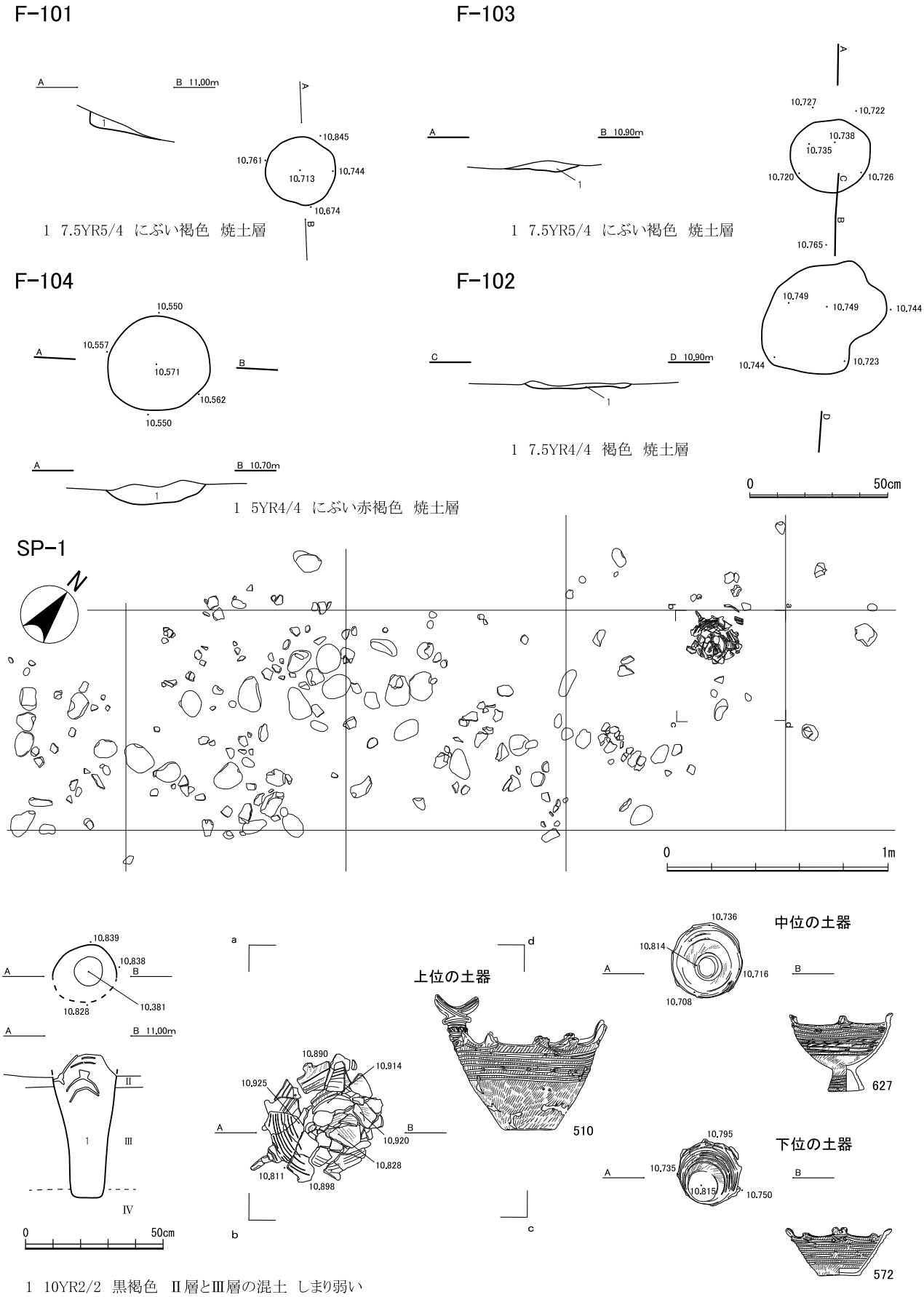
時期：縄文時代晩期前葉の焼土とみられる。

Ｆ－102（図Ⅲ－８・図版４）

位置　ｂ２　**規模**　95.2×75.6㎝　**平面形**　不整形

確認・調査：ｂ２区Ⅱ層の晩期後葉の遺物層より下位からＦ－103と並んで検出された焼土。焼土層は厚いところで5.2㎝である。**遺物出土状況**：遺物は出土していない。

時期：縄文時代晩期前葉の焼土とみられる。



図Ⅲ-8　F-101 ～ 104・SP-1 平面図・断面図

F－103（図Ⅲ－８・図版４）

位置　ｂ２　**規模**　52.8×59.2㎝　**平面形**　円形

確認・調査：ｂ２区Ⅱ層の晩期後葉の遺物層より下位からF－102と並んで検出された焼土。F－102よりやや低い面で検出している。焼土層は厚いところで7.6㎝である。

遺物出土状況：土器３点、フレイク２点が見つかっている。

時期：縄文時代晩期前葉の焼土とみられる。

F－104（図Ⅲ－８・図版４）

位置　ａ１・ｂ１　**規模**　75.6×67.6㎝　**平面形**　円形

確認・調査：ａ１区、ｂ１区の境Ⅱ層から検出された直径約70㎝の円形の焼土である。焼土層の厚さは最大で14㎝である。**遺物出土状況**：土器１点、フレイク１点が見つかっている。

時期：縄文時代晩期前葉の焼土とみられる。

SP－１（図Ⅲ－８・図Ⅳ－40－510・図Ⅳ－45－572・図Ⅳ－47－627・口絵５・図版３・29・30・32）

位置　ｂ２　**規模**　25.0×25.0×44.0㎝　**平面形**　円形

確認・調査・遺物出土状況：ｂ２区の斜面縁Ⅱ層から、およそ１m×３mの範囲で、長径10～15㎝の円礫を中心とした縄文時代晩期後葉の遺物が集中して検出された。出土している土器には変形工字文の付される破片が含まれていたため（図Ⅳ－72参照）、晩期後葉の遺物中でも新しい時期のものと推測された。この遺物集中の東端から、１個体の鉢形土器が底部を上面に潰れた状態で検出された。周囲の遺物の出土レベルは標高10.9～10.85m前後で、鉢の検出レベルとほぼ同じであったが、周囲の遺物が地面から浮いて検出されるのに対し、この鉢は底部を頂部に口縁部はさらに掘り下げて検出する状況だった。鉢の取り上げ作業を進めていたとき、大きな装飾の付く口縁部片が動かなかったため、断面を残し下げてみると、口唇に付く装飾の先端にさらに大きな三日月形の装飾が付いていることと、別個体が下に重なっていることが判明した。そこで、土器を残しながら、西側を大きく広げてみると、下に重なる土器が台付鉢であることと、さらに鉢形土器が下に重なることがわかった。土器の周囲の土が柔らかいことが気になったが、断面には特に周囲と変わった様子がなかったため、土器の重なる状況を記録し取り上げた。その後、広げた穴をⅣ層まで下げると、黒色土中に掘り込まれた小ピットであることが判明した。覆土は単調でⅡ層とⅢ層の混土層で坑底面は直径約10㎝の円形で、平らに調整されⅣ層上位に達していた。最上部の鉢も口縁部片を検出するため周りを掘り窪めたが、底部はあまり風化していないことから、本来は埋まっていたものとみられる。

時期：縄文時代晩期後葉

掲載遺物：土器510は、最上部に置かれていた鉢形土器で、口縁部に６ヵ所の突起を有する。端部に三日月形の装飾を有する最大の突起の対面に２番目に大きい突起が付き、その左右に同じ形状の突起が並ぶ。見方によっては３個一組の突起の大小が対で口縁部に付されているようにもみえる。口縁部には、突起の中心の位置に貼瘤文が付され、４条の沈線の下に等間隔で貼瘤文が付される短刻沈線が施され、その下位に２条の沈線が付される。胴部には３対の補修孔が付される。

土器572は最下位から出土した。口唇部には４単位の大きな突起間に小さい突起が付される合計８単位の突起を有する鉢である。口縁部の文様は、上から突起下にA状の貼瘤文が付される短刻線文、３条の沈線、短刻線文、２条の沈線の順に施文される。大きな突起の１ヵ所には２つの貫通穴が空けられ、沈線間にはベンガラが付着する。底部は無文である。土器627は中位から出土した台付鉢である。口唇の突起は４単位。口縁部には上から突起下と突起間に沈線を施された横幅１㎝前後の貼瘤文８個が付され、貼瘤文間に短刻線、その下に４条の沈線、貼瘤文と短刻線、３条の沈線が施される。

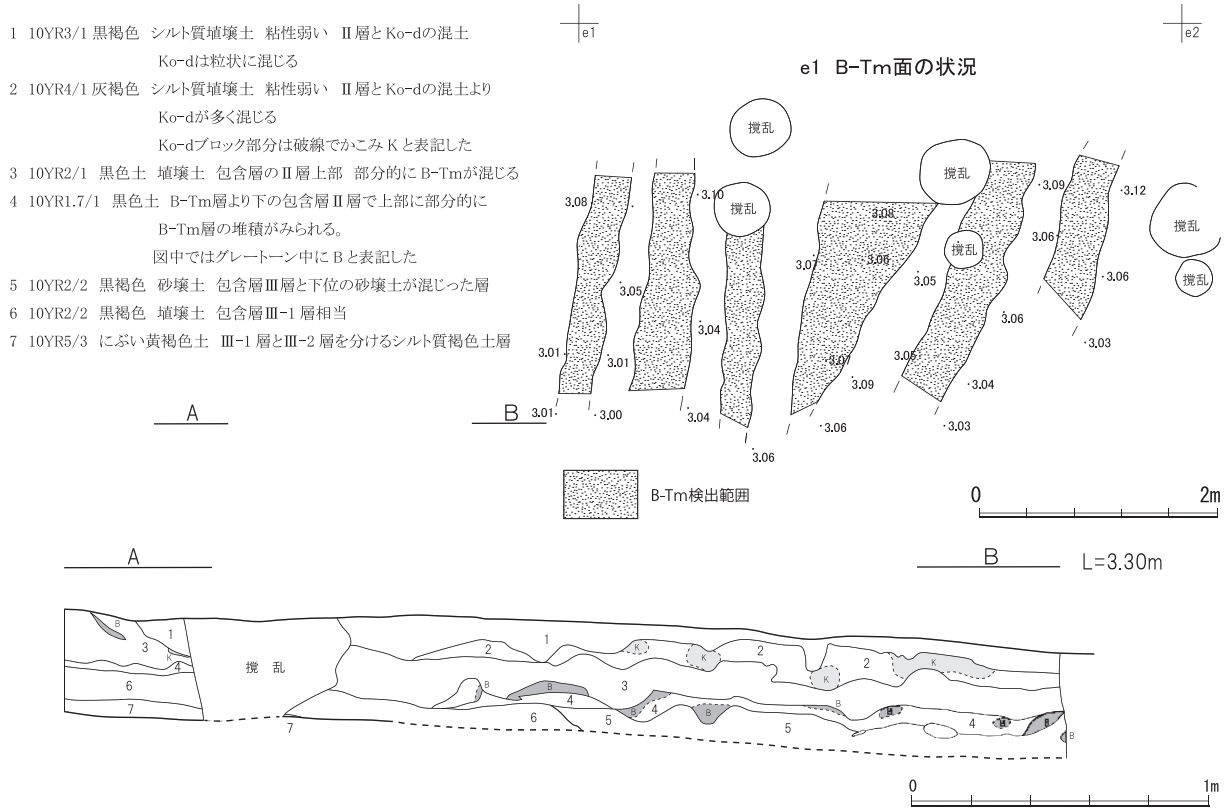
畝状遺構（図Ⅲ－９・口絵３・図版４）**位置**　ｅ１区　**規模**　400×200㎝　約８㎡

確認・調査：調査範囲の拡張で低位段丘面の調査に入ると、海岸段丘裾に融雪期などに水が流れた跡と考えられる、黒色土層に褐色の完層が挟まる低地性の土層の落ち込む堆積がみつかった。この低地上部のⅡ層中にはKo－d層（1640年降下）やB-Tm層（10世紀降下）の堆積がみられた。調査は縄文時代が主であったため、これらの火山灰層までは荒く掘り下げ、B-Tm層より下からは丁寧な掘削を行っていた。そのなか、ｅ１地区掘削の際、検出したB-Tm層面が規則的に途切れる状態が現れ、畑跡（畝状遺構）の存在に気付いた。それまでの掘削でもB-Tm層を見失うことたびたびあり、畝は西側にも広がっていた可能性はある。断面は、検出された畝では上部堆積が失われているため、隣接するｅ０区の、掘削していない壁面で行った。

検出された畝状遺構は約0.7m間隔に並行した溝状の畝間が３本と、畝の方向がが異なる約0.7m間隔に並行した溝状の畝間が２本の合計５本である。畝間の幅は24～30㎝、B-Tmからの深さ2.5～4.8㎝、確認された最長の畝間は、低地堆積と重なった範囲に限られるため、約２ｍであった。

畑跡は河川堆積物により栄養が良いのだが、海岸に近く、冬の時化などでは海水を含む風が崖に当たる所であることから、地味豊であるが、塩分も多い土地であることが想定される。

畑跡は畝間が約70㎝で間隔は、森町の森川３・森川４・上台２遺跡などで検出された畑跡より狭く、規模も小さい。前記、調査の時、農業指導員であった方からお聞きした話で、松前町など海岸に近い畑では、通常より高さを盛り上げた高畝で畑が営まれているとのことである。この畑跡も高畝で作られた畑であった可能性があるが、この畑跡は、立地から狭い範囲に営まれた畑で、家庭菜園程度と推定される。また作物は、塩分に強いものが栽培されていたものではないだろうか。残された痕跡では、B-Tmの掘り込みは森町で検出された畑跡とさほど違いがないが、上部のKo－d層畝間と重なって乱れている様子もあり、10世紀以降の耕作である可能性も否めない。　（谷島・土肥）



図Ⅲ-9　畝状遺構　平面図・断面図

Ⅳ　遺　　物

１　土　器

土器は63,777点出土した。内訳は縄文時代前期の円筒下層式相当が44点、縄文時代後期前葉28点、後期後葉2,987点、晩期前葉14,371点、晩期後葉46,130点、続縄文時代72点、擦文文化期128点、陶磁器類17点である。包含層の調査は、大きい遺物や、まとまった破片については出土状況を記録し、番号を付して取り上げたが、細かい遺物などは、層位ごとに日々取り上げる方針で進めた。

図Ⅳ－71には、遺構も含め、出土記録を残した遺物をまとめた。実際には記録を残した遺物の数倍が取り去られているわけだが、出土した遺物の多くが、低位の段丘面に集中している状況がみてとれる。掲載土器の詳細については表Ⅳ－１にまとめた。

図Ⅳ－５－１～３は円筒下層式相当の破片である。小さな破片だが、調査区から出土した同時期の破片では大きいもので、他の多くの破片は２に近い円筒下層b式併行とみられる繊維を多く含んだ土器の細片で、おもに段丘上の包含層から出土した。

図Ⅳ－５－４～６は口縄文時代後期前葉の破片である。土器６は、斜面裾の流路跡から外れたd94区のⅢ層から出土している。土器４、５は斜面裾から縄文時代晩期の破片に混じって出土している。

図Ⅳ－５－７～図Ⅳ－７－59は、縄文時代後期後葉である。出土状況は、図Ⅳ－83～85に示した。全般に堂林式の新段階のもので、貼瘤文などが付される個体が混じる。掲載した後期後葉の土器はすべて低位の段丘や斜面から出土したものである。流路跡では、Ⅲ層が３層に分かれるが、後期後葉の破片はその最下層であるⅢ－３層から出土した。接合結果は必ずしもきれいに分かれなかったが、流路跡から出土した復元個体は、ｅ０区から出土した、土器33・35・40・53で、それより西側では流路からの出土例はなかった。最も多く出土しているのは、斜面裾の堆積層で、図Ⅳ－84・85中のd区とe区の境付近から出土しているものが該当する。海岸段丘上ではb98区Ⅲ層から唯一まとまった鉢の破片が出土したが、脆弱な破片なため復元には至らなかった。出土量は後期後葉の１割に満たない。土器７は、遺物はほとんどないとみていたd93区のⅢ層から形を保った状態で出土した。頸部から上の破片は発見時の排土から回収し、同時に土器36の破片もみつかった。後期後葉の土器は、器壁が比較的厚く、胎土に町内で産する頁岩系の細礫が混じる傾向があった。

図Ⅳ－８－60～図Ⅳ－14－220は、縄文時代晩期前葉で上ノ国式併行の土器である。この時期の遺物は、段丘上から斜面裾まで広く出土した。流路跡では、３つに分かれるⅢ層の中間であるⅢ－２層から出土した。段丘上では、遺構から出土し復元された土器81、90、91、93、96、124、132のほか、ある程度の形状を保った状態で、土器75、76、112が出土した（図Ⅳ－72参照）。段丘上面の包含層から出土する土器は割れが細かく、接合作業で復元できた個体は前記以外に土器95だけである。

斜面裾からは、段丘上の２倍の土器片が出土した。出土状況図は図Ⅳ－80～82に示した。流路跡のⅢ－２層から出土した復元個体は、e97区出土の土器126、e99区出土の土器114、ｅ０区出土の土器128である。土器60～74は大洞BC式併行の搬入品で、出土状況は段丘上から斜面裾までとほかの晩期前葉の破片と違いはない。復元された鉢、土器60と壺２点、土器63・64は斜面裾から比較的まとまって出土した。d97区の斜面裾からは土器77・80・85の壺形土器がまとまって出土し、ｄ０区の斜面裾からは、土器127・129・の深鉢や、土器219・220の鉢類がまとまって出土した。219、220は晩期中葉の可能性があるかと考えたが、出土状況から晩期前葉とした。晩期前葉の土器では、斜面裾山寄りから出土する破片が復元される傾向にある。晩期前葉の破片も、胎土に町内で産する頁岩系の細礫が混じる

ものが多かった。

図Ⅳ－14－221～図Ⅳ－47－647は縄文時代晩期後葉の土器である。本調査では、この時期の遺物が最も多く、段丘上から斜面裾まで広く出土した。時期幅は狭く、大洞A式の範疇に収まるものとみられる。個々の掲載遺物の詳細については表Ⅳ－１に記載するが、この時期の土器の器形や施文が一定の規則に基づいており、同じ説明の繰り返しを避けるため、次のように記号化し、掲載土器一覧に記した。

器種区分：器種の区分を図Ⅳ－１に示した。基本は壺形土器をⅠ類、深鉢形土器をⅡ類、鉢形土器をⅢ類、台付鉢をⅣ類としている。これらの分類をさらに次の観点から細分した。

壺形土器：搬入品とみられるものをⅠ－１類、在地の土器をⅠ－２類、在地の土器のうち口縁部に１対の貫通穴を空けるものをⅠ－３類とした。

深鉢形土器：口唇部に突起を有するものをⅡ－１類、突起のないものをⅡ－２類、突起の有無ではなく、底部が上げ底のものをⅡ－３類とした。

鉢形土器：（浅鉢も鉢形に含む）は、口縁部に６ヵ所の突起を有し、そのうちの一対が、高さのある最大の突起と次いで大きな突起になるものをⅢ－１類。口唇部に４単位（大小の突起８単位も含む）の突起を有し、そのうちの一つの口縁部に２つの穴が穿孔されるものをⅢ－２類、口唇部に突起を有するものをⅢ－３類、口唇に突起のないものをⅢ－４類とした。Ⅲ－１類では、時期差で突起が大型化する傾向があり、その古手に対しⅢ－１－１類、新手に対しⅢ－１－２類とし、Ⅲ－１類に付される６ヵ所の突起の各名称を土器の上面観から最大なものを前突起、その対になる突起を後突起、前後の突起の左右に位置する突起をそれぞれ、左前、右前、左後、右後とした。左右前後の突起は、一見同じ形状に見えても、前側を大きく作ったり、形状を変えるなど、作り分けをしている例がしばしばある。Ⅲ－２類では、４単位の突起のうち、口縁部に２ヵ所の穿孔が施される位置の突起が、ほかの３ヵ所の突起と異なった装飾有するものをⅢ－２－１類、口縁部に２ヵ所の穿孔が施される位置の突起が、３ヵ所の突起と同じつくりであるものをⅢ－２－２類とした。

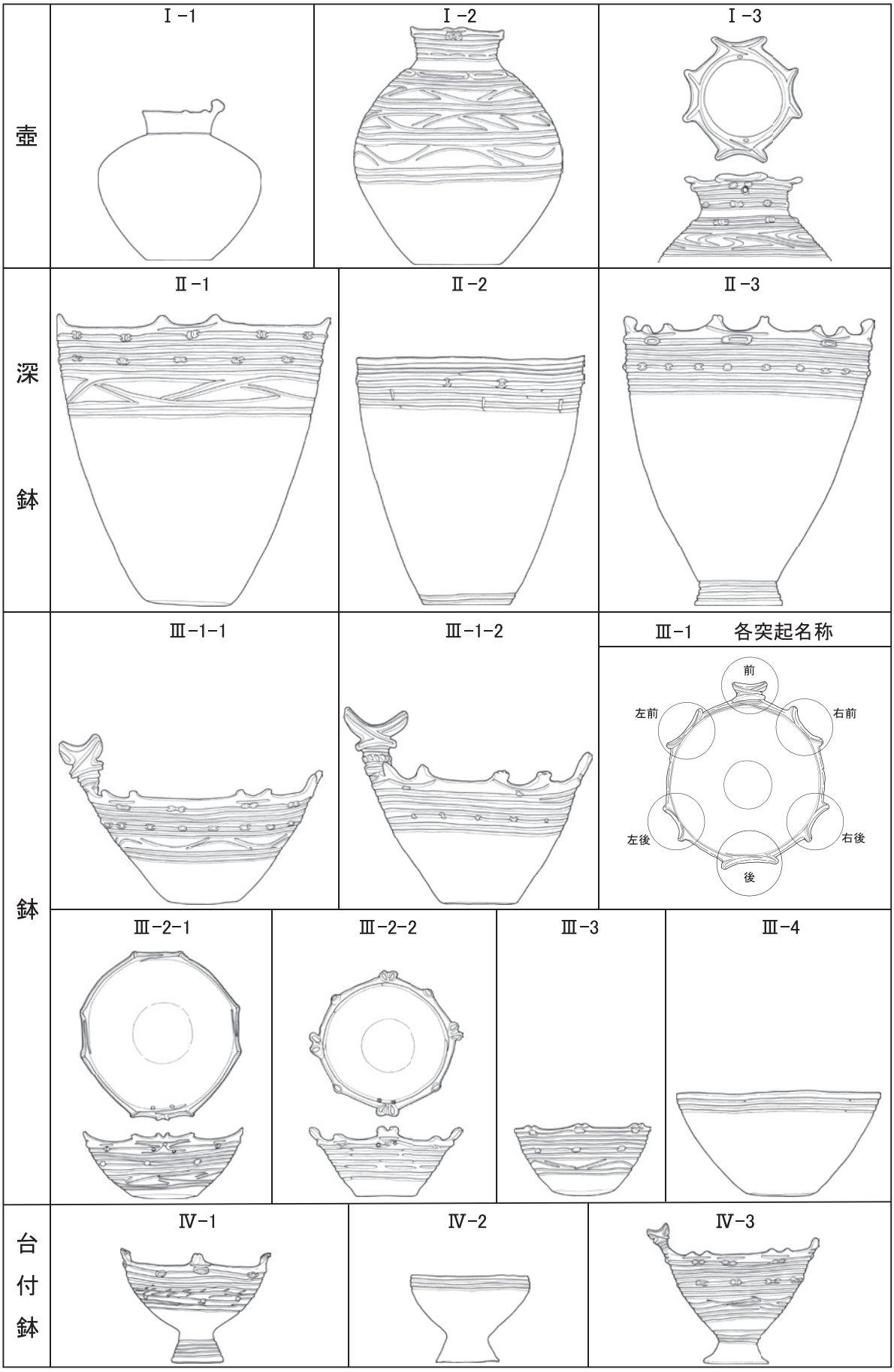
台付鉢：（台付浅鉢も含む）は口唇部に突起を有するものをⅣ－１類、突起のないものをⅣ－２類、口唇の突起の形態が鉢形土器のⅢ－１類と同じつくりになるものをⅡ－３類とした。

これらの分類は、掲載土器一覧の器種２の項目に記載し、晩期後葉以外の分類ではーを記入した。器種分類は、口唇部や口縁部の形状を基準にしており、破片では判断できない場合があり、その場合は判るところまでを記号化した。また、壺以外の器種の搬入品の場合は当てはまらない。

突起の形：状図Ⅳ－２には、突起の形状分類を示した。a～d形は、Ⅲ－１類の前突起にみられる形状の分類で、e～mにはその他、深鉢や後突起、左右の突起などにみられる主な形状を示した。

ａ形：突起端部に三日月形の装飾が器の前後の方向に付くもの。装飾の左右には三叉文が点対象の位置関係で配置された文様が付される。この文様は、入組文様の副要素から変化したものと考えられるが、ここでは「たすき状文」あるいは「たすき状」と称することとする。a形の突起は最も多く出土した形状で、時期が下るにつれ突起頂部が前後に拡がり、たすき状文の沈線化も進む。また、突起の軸部に刻みが施された粘土紐が付される傾向が生じる。この形状の変化からa形の突起古手をａ１形、新手をａ２形する。前突起は、他の突起より飛びぬけて大きいものを付けるため、それだけが破損して破片がない個体や、補修孔が空けられている例が多い。前突起のない個体の実測図では、突起位置を示すのに最も多いa形の輪郭を用いている。前突起下の口縁部内側の沈線文様には、たすき状、上下対向三叉文、山形状などの文様が付される。

ｂ形：鉢形土器Ⅲ－１類の前突起に比較的多くみられる形状である。a形の突起を中央切り左右に拡



図Ⅳ-１　晩期後葉の器形区分

げた形状で、突起の軸は横幅のあるものになる。上面の左右端部にたすき状文が施される。中心部に沈線が付され、粘土を外側に張り出させるものをb２形に、ないものをb１形にしたが、これは時期的な変化ではないとみられる。下面には施文はなく左右からみると無文である。

c形：側面が逆への字で、外側に大きく内側は比較的小さく張り出す突起で、文様は上面から側面にかけて付される。c１形の施文は、外側にたすき状文、内側にはハの字の刻みなどが付される。表示例（土器396）では、内側にもたすき状文が付されるが、このような例は本調査唯一である。c２形は、突起のc１を簡略化したような形状で、上面に沈線、側面に沈線を施すなどしたもの。

d形：その他の形状のもの。表示例は側面観がC字形のもの（土器465）で、このほかには幅広の突起を貼り合せ、それぞれの上面にたすき状文を施したもの（土器507）や、顔を模したような装飾が付されるもの（土器566）、などがある。突起の形状が異なっても、時期が新しい突起の軸部に、刻みが施された粘土紐が付されるのは変わらない。

e形：対の突起で、突起頂部を平らに調整し刻みを施すもので、土器302、303、510、577にみられる。全般に少数例である。土器510は鉢形土器のⅢ－１類で、左右後突起に頂部に３ヵ所の刻みが施されたものが付される。

f形：対の山形突起で、内側にたすき状文が施されたもの。壺～鉢までのすべての器種に見られる突起の形状である。時期が新しく、文様の沈線化が進んだものをf２形とした。壺形土器292や土器486の突起頂部には刻みが施されている。

g形：対の山形突起で、内側に連なる三叉文状の文様が施されたもの。壺～鉢までのすべての器種に見られる突起の形状である。壺や深鉢では、この形状の突起が４単位付されているものが多く、起鉢形土器Ⅲ－１類では、左右前後の突起にしばしば付される。

h形：対の山形突起で、内側に弧線文が施されたもの。壺～鉢までのすべての器種に見られる突起の形状で、g形の沈線化が進んだ状態のものである。時期が下るにつれg形からh形に変化すると考えられるが、中間的なものも多く、g形とh形をの区分は曖昧である。壺形土器286の突起頂部には刻みが施される。

i形：対の山形突起で、口縁内側の沈線とは別にそれぞれの突起に刻みを付すもの。対の突起の幅が狭いものがある。土器443、449、499にみられる。

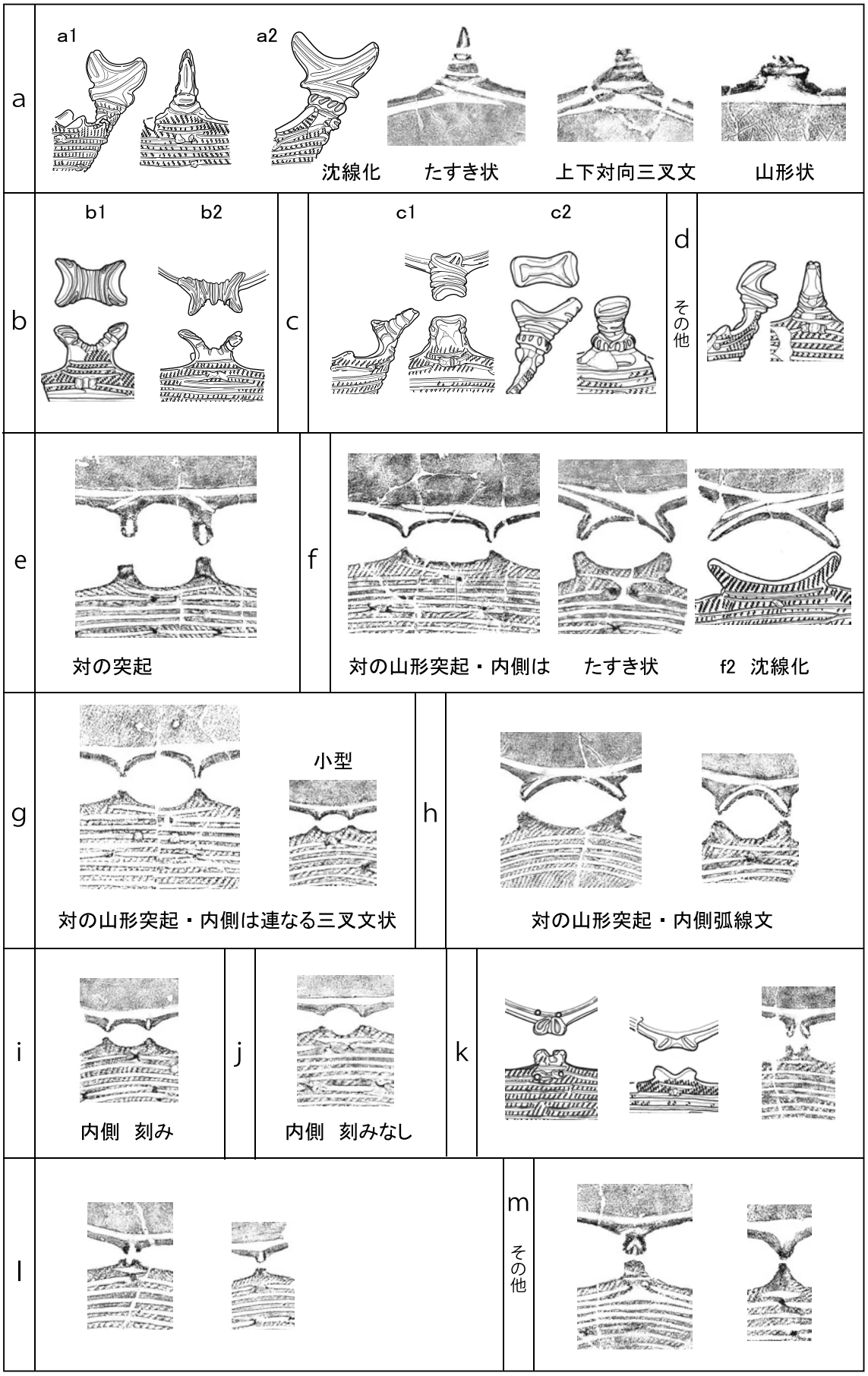
j形：対の山形突起で、口縁内側は沈線のみで、突起には文様を付さないもの。土器307、313にみられるが、全般には少数例である。

k形：単体の突起で、突起中央に刻みや凹帯で頂部を分け、それぞれに刻みを加えたもの。表示例中央には、やや幅のある凹帯で頂部を分ける例を示したが、i形との形状の境が曖昧である。土器494、573にみられる。

l形：単体の突起で、突起中央に刻みや凹帯で頂部を分たもの。大小の突起が８単位付されるものの、小さな突起や小型の鉢にしばしばみられる。

m形：その他の形状である。単体の突起では、複数の刻みが施されるもの、口縁部と並行に刻むもの、山形突起で内側に三叉文の文様が施されたもの、四角い突起（土器589）などがあり、対の突起では、幅のある四角い突起が並ぶもの（土器578、579）や、Ⅲ－２類ではf形の突起中央にl形の突起を加えたもの（土器571）やf形の突起のそれぞれの端部にk形の突起が付くもの（土器570）、などがある。

これらの分類は一覧表の「前突起」、「突起」の項目にアルファベットの記号で記入した。前突起の項目には、鉢形土器Ⅲ－１類の突起が残る土器にのみ記号を記入している。１個体に複数の形状の突起がある場合は、該当する形状のすべての記号を記入している。


a
a1
a2
沈線化
たすき状
上下対向三叉文
山形状
b
b1
b2
c
c1
c2
d
その他
e
対の突起
f
対の山形突起・内側は
たすき状
f2　沈線化
g
小型
対の山形突起・内側は連なる三叉文状
h
対の山形突起・内側弧線文
i
内側　刻み
j
内側　刻みなし
k
l
m
その他

図Ⅳ－２　突起の形状分類

文様帯の区分

図Ⅳ－３の上半には文様帯区分模式図を示した。文様の区分の目安として、器面に付される貼瘤文をや文様の区切りに付される沈線を用いている。aとしているのは口縁部直下（突起がない場合）あるいは突起下に付される貼瘤文の位置で、突起のない鉢ではしばしば貼瘤文が省略されるが、その場合は一番上位の沈線文の位置をaとした。bは頸部の屈曲点にあたる位置に付される貼瘤文である。

晩期後葉の在地の土器には頸部の屈曲がほとんどなくなるが、貼瘤文bは伝統的に残り文様帯の区画位置にしている。貼瘤bが省略されている例もしばしばみられるが、その場合で、下部に異なる文様が付される場合はその直上の沈線をbの位置とし、横走沈線のみで施文が終わる場合は最下部の沈線をbの位置とする。貼瘤だけが省略され、短刻線を巡らすものは、その位置をbとする。cは壺形土器にのみに使用した。壺形土器には頸部に無文帯が付されるため、頸部と胴上部との境に貼瘤文や工字文が施文される。その位置をcとし、他の器形では用いなかった。壺形土器にも貼瘤文が省略ることもあるのだが、その場合は無文や胴部に地文のみが施される壺にかぎられた。dは文様帯の終点である。ほとんどの土器が文様帯の上下に沈線を施すため、dは口縁部最下部の沈線文になる。eは底部をさし、fは台付鉢の台端部をさす。文様帯の区分としては、a～bを口縁部、b～cを頸部、b～dを鉢、深鉢形土器の口縁下部、c～dを壺形土器の体部、eを底部、e～fを台付鉢の台部とした。掲載土器一覧では、文様の出現頻度の高い、a～b間の口縁部とb～d間の口縁下部、c～d間の壺形土器の体部にしぼり、文様a－bの項目に横走沈線の数を数字で記入した。文様b－d（壺c－d）には図Ⅳ－４に示した文様の分類で記号化した文様番号を記入した。壺形土器の文様帯は多段になるが、その場合上位から順に記し、同じ文様帯の場合はあえて重複した記入はしていない。

貼瘤文の分類

図Ⅳ－３の下半には貼瘤文の模式図を示した。貼瘤文aは、突起が４や８単位のものでは突起下のほか突起間に規則的に付される。鉢形土器のⅢ－１類の突起間では、左右前後の突起間にもっとも付される例が多く、前突起とその左右の突起間に貼瘤文が付されるのは土器396、442の２例、後突起とその左右の突起間に貼瘤文が付されるのは土器409、411、437、485の４例がある。突起のない鉢などでは等間隔で付しているとみられる。貼瘤文bは、口縁部の貼瘤文の位置や突起の位置に関係なく、等間隔で付している。模式図では、１～９形までを貼瘤文a、10～12形を貼瘤文bの類型に当てた。

１形：対の貼瘤文間を丁寧に調整し、突起前面に付される沈線と口縁部の横走沈線の上位に短沈線を繋ぎ工字文とするもので、大きな突起であるⅢ－１類の前後の突起下などに施される。実例には土器402後突起、420後突起、436前突起、571、581などがある。模式図では上下対向する三叉文状の沈線で調整している表現だが、ここまで丁寧な調整のものはほとんどない。

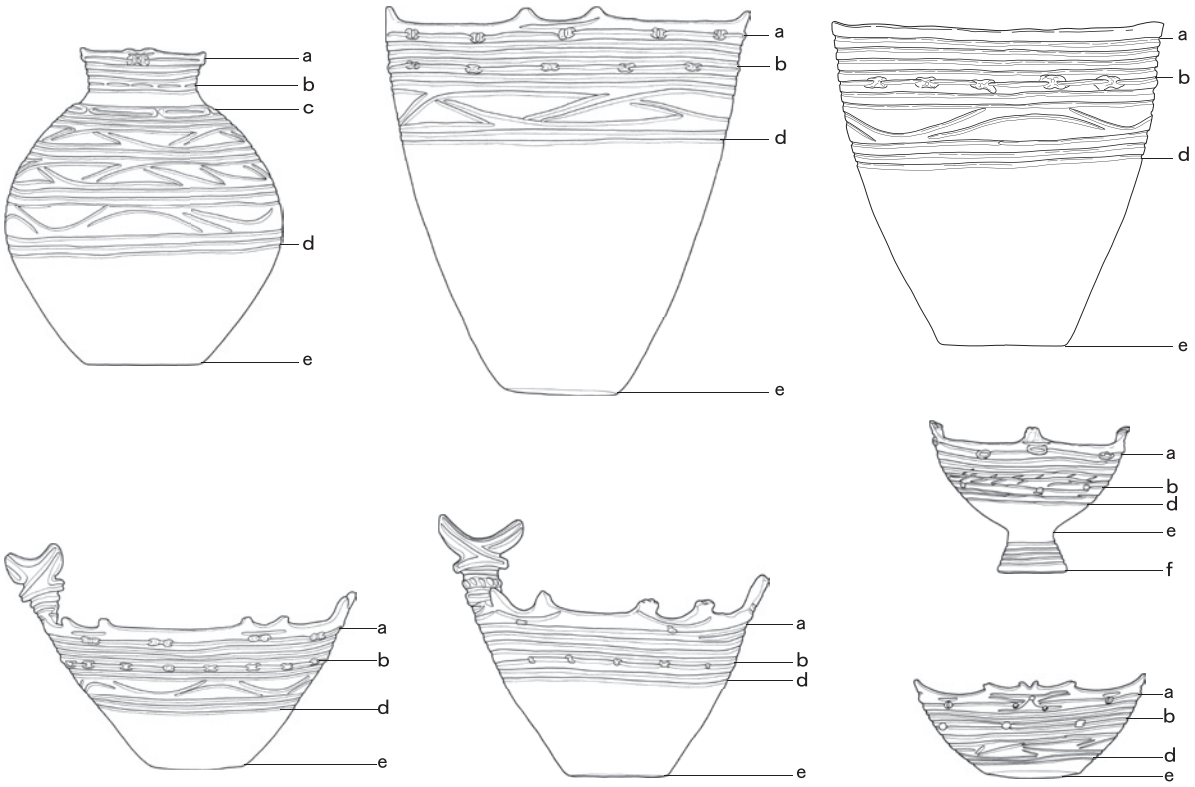
２形：１形を簡略化したものと考えられる。貼瘤文は単体の貼り付けで、その中央を刻むか凹せるかして、突起前部の沈線と口縁部の横走沈線の上位に短沈線間に縦方向の要素を加え工字文状としているもの。実例には土器395前突起、399前突起、429前突起、432前突起、438後突起などがある。

１形、２形のような口縁部の貼瘤文に工字状の文様を施すことができるのは、鉢形土器Ⅲ－１類のような大型突起が付されるものに多くみられる。

３形：対の貼瘤文間に横方向の沈線を付すもの。または、単体の貼瘤文に横方向の沈線を加え、対の貼瘤文状としているもの。実例には土器303、347、362、380後突起などがあるが、類例は少ない。

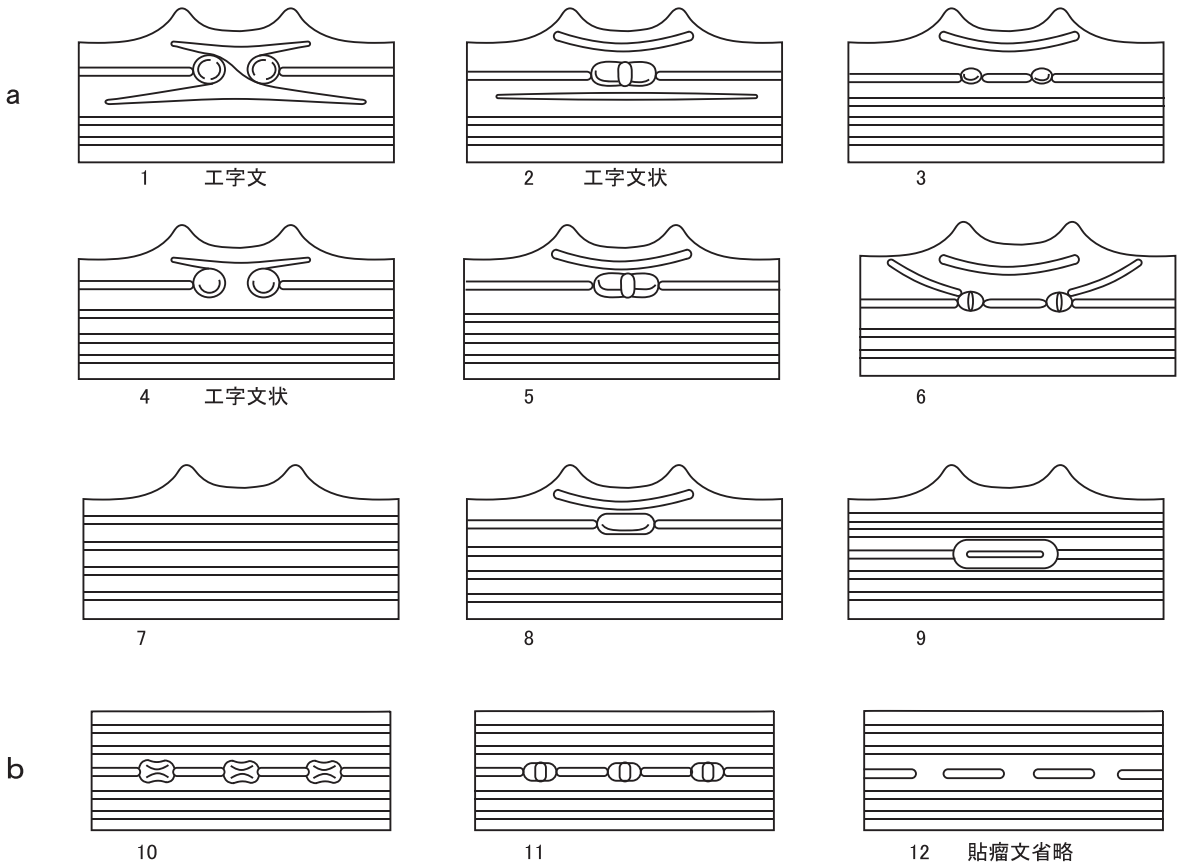
４形：対の貼瘤文間を丁寧に調整し、突起前面に付されると口縁に付される横走沈線を繋ぎ、工字状とするもの。実例には土器377、387後突起、392、397、406後突起、570などがある。

５形：貼瘤文の中央に刻みや凹みを加えたもの。多くの土器にみられる。



a　突起下・突起間や口唇直下の貼瘤文　　b　文様帯中の貼瘤文　　c　壺形土器頸部下の貼瘤文　　d　文様帯の終点

a～b　口縁部　　b～c　頸部　　b～d　口縁下部　　c～d　体部　　e　底部　　e～f　台部



図Ⅳ-３　文様帯の区分と貼瘤文の分類

６形：対の貼瘤文に刻みを加え、貼瘤間に横方向の沈線を加えたもの。土器428にみられる。
７形：貼瘤文を省略したもの。実例には土器318、331、349、392、404、471、504などがある。
８形：貼瘤を付すもの。瘤の形状には、尖ったものや丸いものがあるが、ここでは区別しない。
９形：横長に粘土を貼り付け、横の沈線を加えたもの。土器302、505、514の新しい時期にある。
10形：貼瘤を等間隔に付したもの。瘤の形状は、区別しない。
11形：貼瘤に刻みを加え、等間隔に付したもの。
12形：貼瘤は省略するが、短刻線が施されるもの。

以上に示した貼瘤文の分類を数字化し、表Ⅳ－１の貼瘤a、貼瘤bの項目に記載した。鉢形土器Ⅲ－１類では、貼瘤aに複数の類形が施されることがたびたびあり、その場合は、該当する数字すべてを記入している。土器287、458では、貼瘤aに短刻線のみを付し、瘤を省略している。この２例については貼瘤bに相当する12番を当てた。貼瘤bで貼瘤文が省略されるものには「省」の字を記入した。

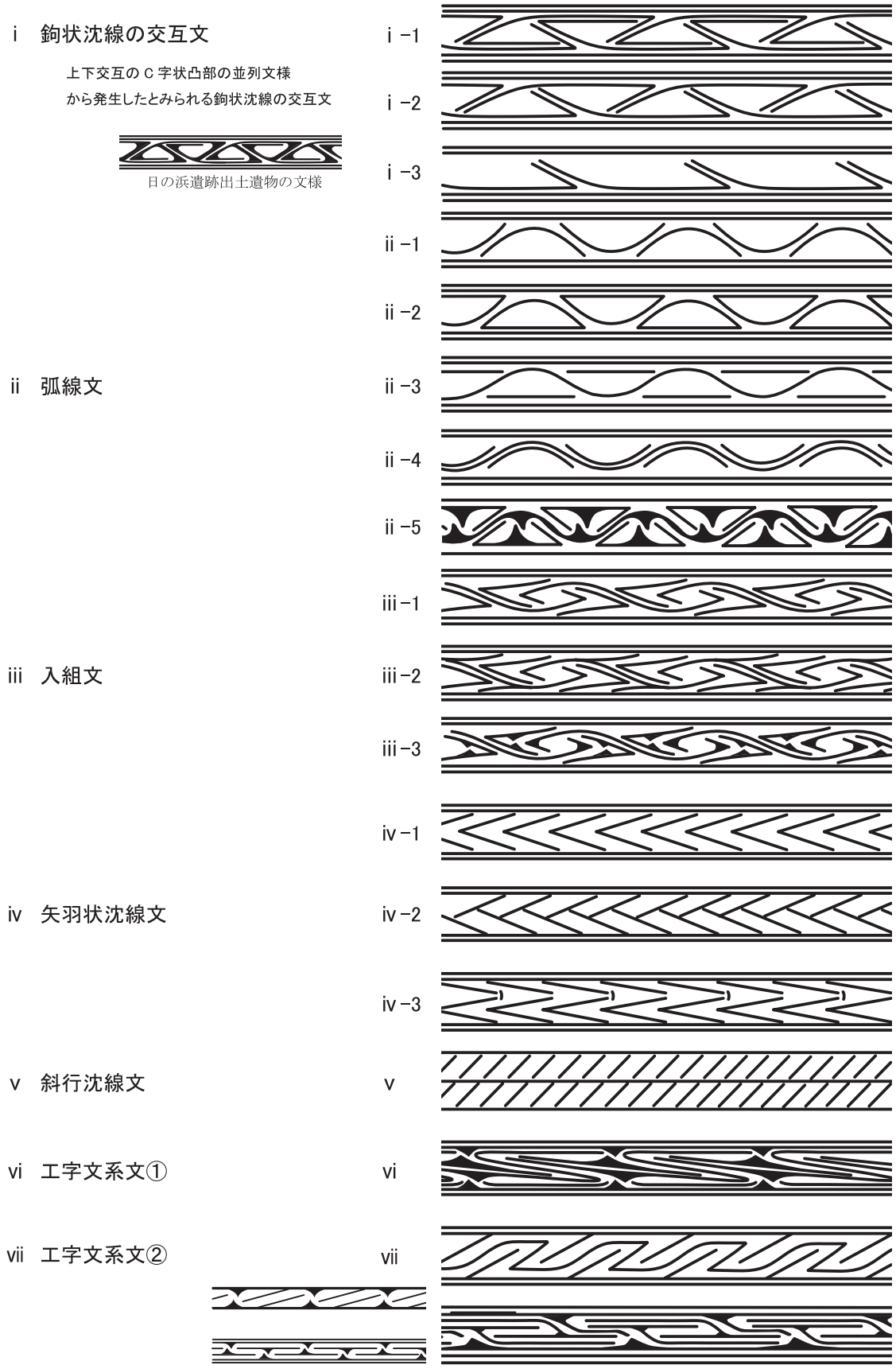
突起の装飾：前突起の付け根には、突起下の貼瘤文とは違う、突起自体の装飾が、時期を下るにつれ口縁部に下がってくる傾向がある。ある段階では、丸く大きめの対の貼瘤文となり、区別がつきにくい。しかし、突起の装飾には、口縁部の内外面に付される特徴があり、正面観だと突起下の貼瘤文にみえるが、断面や側面観の図でみると、内外面に付されているので判断しやすい。土器457、479、512、522、528、530、537、539、540、541、565にそのような例がみられ、475では前突起下の貼瘤文と供用し、530では突起の装飾下に、別に貼瘤文を付している。

文様の分類

晩期後葉の在地の土器の、壺形土器の体部（c－d間）や、深鉢・鉢形土器の口縁下部（b－d間）には、先の文様変遷の流れを汲みながらも、簡略化・沈線化の進んだ文様が施されていた。

これらの文様は、上下を横走沈線に挟まれた一定の幅に収まる文様帯となっており、横位に連続する文様が施される。一つの文様帯を１段と数えると、壺形土器の体部では１～３段、鉢・深鉢形土器の口縁下部には１段の文様帯が施される。文様の施文方法は、文様割付をしている様子はなく、端から順に施文しているようで、しばしば施文にミスがみられ、つじつま合わせが行われている。破片資料で、このような部分にあたると、文様そのものに誤解が生ずる可能性がある。また、壺形土器では明らかではないが、鉢形土器では、時期が下るにつれ口縁下部の文様帯はなくなり、数条の沈線になっていく傾向がある。

ｉ形：鉤状の沈線を上下対向で交互に施文し、三角形が交互に連なるような文様を施文したもので、鉤状沈線の交互文とした。聖山式にみられる、上下から交互にCあるいはＶ字状の凸部が同一方向を向いて並列する文様から変化したものと考えられる。この文様は入組文の変遷から生じたという考え方や、横位連続工字文の変形という考えがあるが、結論はさておき、本遺跡出土の土器群よりやや古手とみられる、函館市日ノ浜遺跡出土の壺形土器や七飯町武佐川遺跡出の鉢に、ｉ形の原形がある。ｉ形文様には、施文の始点が異なるｉ－１形、出現頻度の高いｉ－２形、鉤状沈線が下側のが施されるｉ－３形がみられた。ｉ－１形は、土器610、611だけにみられる小数例で、この文様の祖形に近いとみられる。いずれもc94区から出土した。ｉ－２形は壺形、深鉢形、鉢形のすべての器種にみられる。壺形土器では土器247・252の下段、土器276の上中段、土器277の上下段にみられ、深鉢では、突起のある個体で２例（土器309、314）、突起のない個体で５例（土器344～348）がみられる。復元に至ったものはすべてc94・95区からの出土である。鉢形土器では多くの個体にみられる。ｉ－３形は土器308のみでみられる。幅10㎝前後の深鉢口縁部片のため、施文ミスの部分であった可能性はある。壺形土器276の二段目右側に、施文のつじつま合わせで、似た処理を行っている箇所が観察できる。



図Ⅳ−４　縄文時代晩期後葉に見られる文様の分類

ⅱ形：弧線を上下交互に施文し、波状の文様としたもので、交互弧線文とした。この文様はⅰ形の簡略化から生じたもの考えているが、ⅰ・ⅱ形の文様を有する土器が数多くみつかったc94・95区では、出土状況に時間差なく、同時に存在している。施文の誤りは土器276下段、424、439、583の４例と少なく、ⅰ形に比べれば簡単な文様である。ⅱ形の文様を細かく観察すると次のような細分が出来る。

ⅱ－１形は弧線を上下交互に施文した、ⅱ形の基本形ともいえる文様で、出現頻度が最も多く、すべての器種で施文される。ⅱ－２形は、弧線の裾を閉じ、弓形文様が交互に施文されるもので、土器428、447のみに見られる少数例である。ⅱ－３形は文様帯中央に緩やかな波状沈線を１条施し、上下の波頂部間に沈線を付したもの。弧線の裾を閉じるⅱ－２形に近い文様にみえる。土器275だけに見られる少数例である。ⅱ－４形は文様帯中央に緩やかな波状沈線を１条施し、各波頂部に並行に弧線を施したもので、土器421だけにみられる少数例である。ⅱ－５形はⅱ－３形に工字文様の加飾をしたもの。波状沈線の波頂部と裾に位置する沈線間に工字文様の調整を加え、沈線両端から波線に並行する線を追加したもので、土器588のみにみられる少数例である。

ⅲ形：入組文で壺形土器にのみみられた。S字文を入組ませながら横位に連続施文し、入組部の左右に文様を充填したものである。ⅲ－１形は、入組部の左右にⅤ字の沈線を充填したもので、土器249、250、252、254などにみられる。ⅲ－２形は、ⅲ－１形の施文が乱れたものとみられ、入組部の左右のⅤ字の一部がS字文や上下の文様帯区画の沈線と結合したり、沈線を追加するなどの施文があるもの。土器251、258にみられる。ⅲ－３形は、ⅲ－１・２形の入組部の左右のⅤ字の充填文に、上下対向する三叉文を追加するもの。土器255、256、264、265にみられる。入組文にはC字文を主要素とした系統もあるが、本調査区では確認できていない。

ⅳ形：矢羽状沈線文である。壺、深鉢、鉢形にみられるが、個体数の多いⅢ－１形に施文例はなく、全般に少数例といえる。矢羽状沈線文は、連続して施文されるⅤ字の尖頭が丁寧に調整されるⅳ－１形、Ⅴ字の尖頭が乱れるⅳ－２形、Ⅴ字を越えてZ字あるいは多段に施文されるものをⅳ－３形とした。ⅳ－１形は壺形土器268のほか、深鉢・鉢では、土器313、361、362、577にみられ、ⅳ－２形は土器360に、ⅳ－３形は土器312、592にみられる。文様の半分が失われているが、台付鉢の629も、矢羽状沈線が施されている可能性がある。

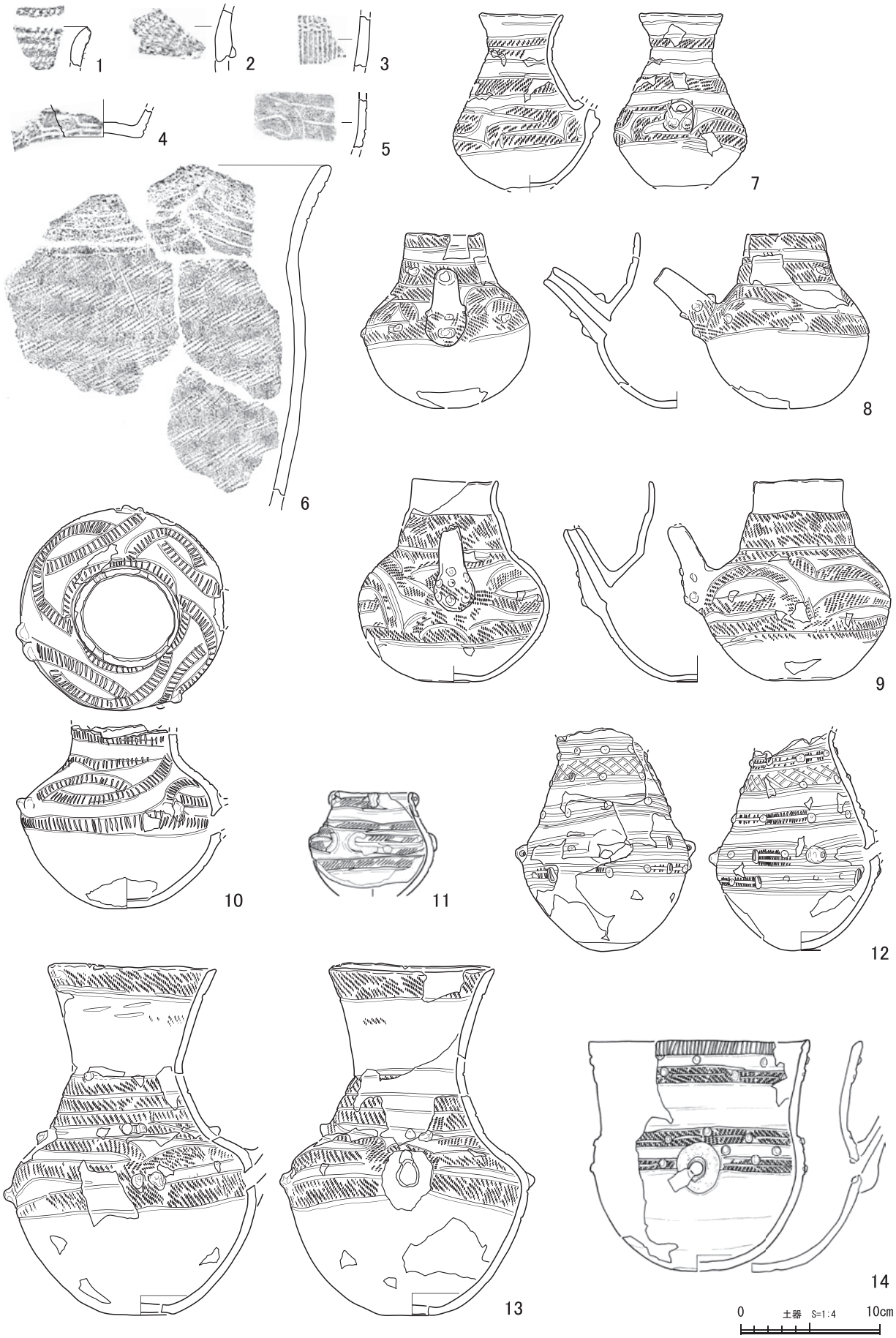
ⅴ形：斜行沈線文である。横走沈線の下地に施された例が土器362と台付鉢627にみられるが、後者は実測図では解りにくいが一度消しかけた下の文様が残ったものとみられる。

ⅵ形：入組文系文様としたもので、横位の入組み型の変形したものと考えた文様である。残りの良い個体を観察すると、それぞれ施文が異なっており、入組文系の文様か工字文系の文様かは不明である。模式図は土器376の文様を使用した。土器377、379、381、570などに類例がある。

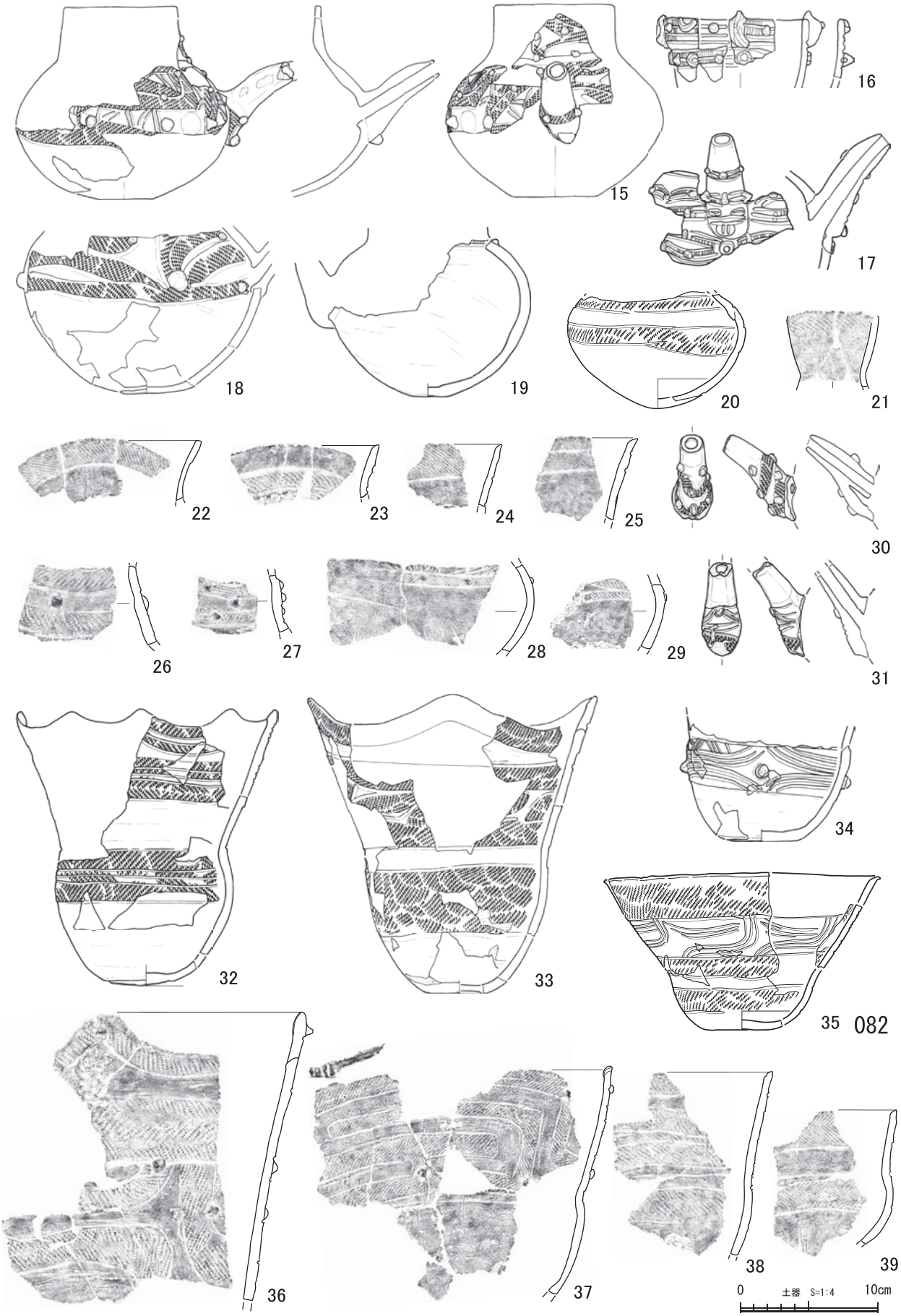
ⅶ形：工字文系文様としたもので、横位連続工字文の変形したものと考えた文様である。壺形土器の頸部と体部境の施文で多段になるものも工字文系とした。土器246、253、264、321、374、378、387、393、630、633などにみられる。

ⅰ～ⅶに示した文様の分類は、掲載土器一覧の文様b－d（壺c－d）の項目に記した。壺形土器など文様が複数段施文されるものについては、該当する文様すべてを記載した。ただし、同じ文様が繰り返し施文される場合は、番号は１つだけ記載した。

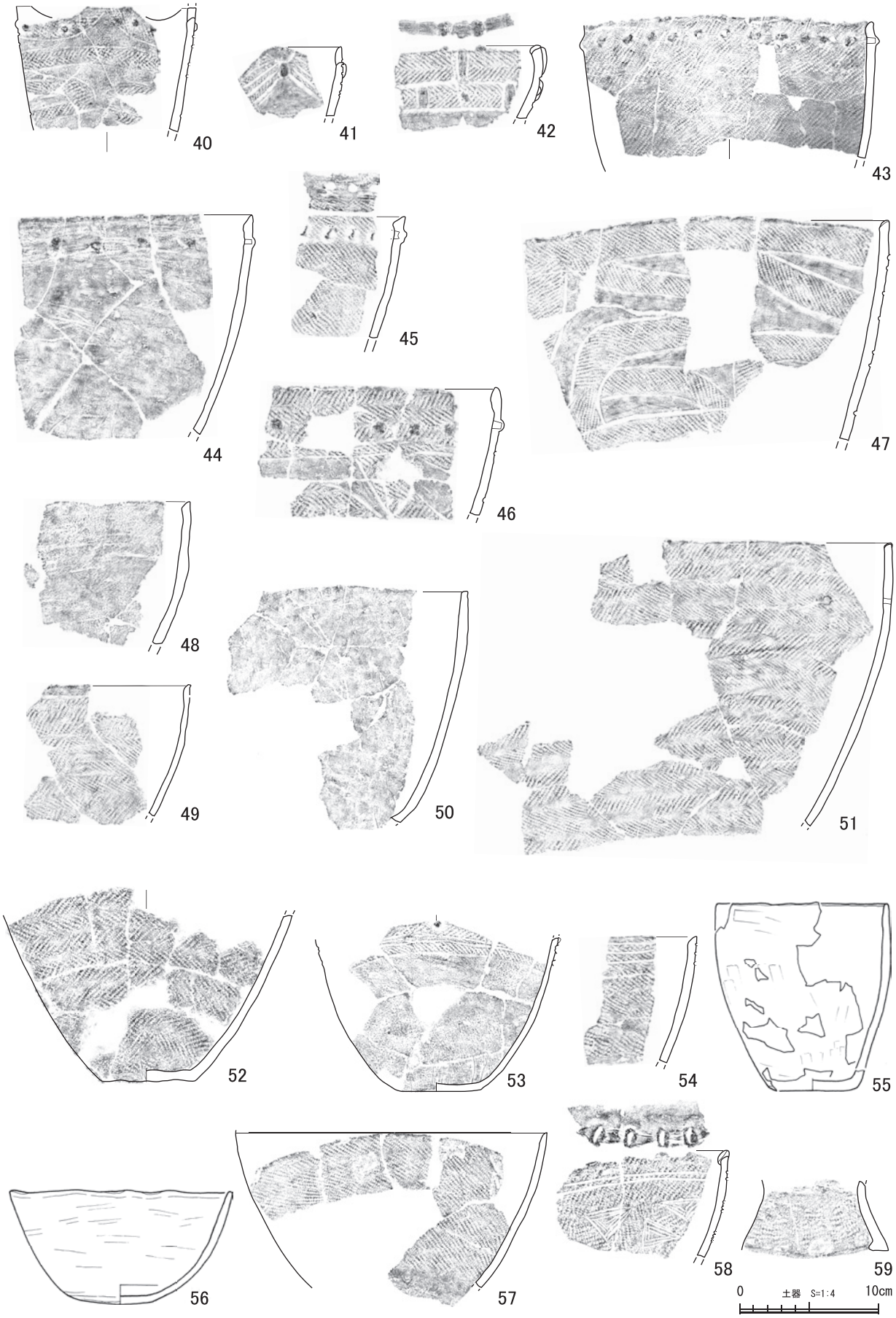
図Ⅳ－48には続縄文時代、擦文文化期、近現代の遺物を掲載した。土器648～654は恵山式土器土器である。復元された土器648、649は低位の段丘の標高290㎝前後で２個体が近い位置で一括出土したもの。655～658は擦文文化期の遺物である。土器655は台地上からC94区までの破片が接合したもの。658は北大式とみられる。土器659、660は陶製の鉢形の焜炉の破片である。



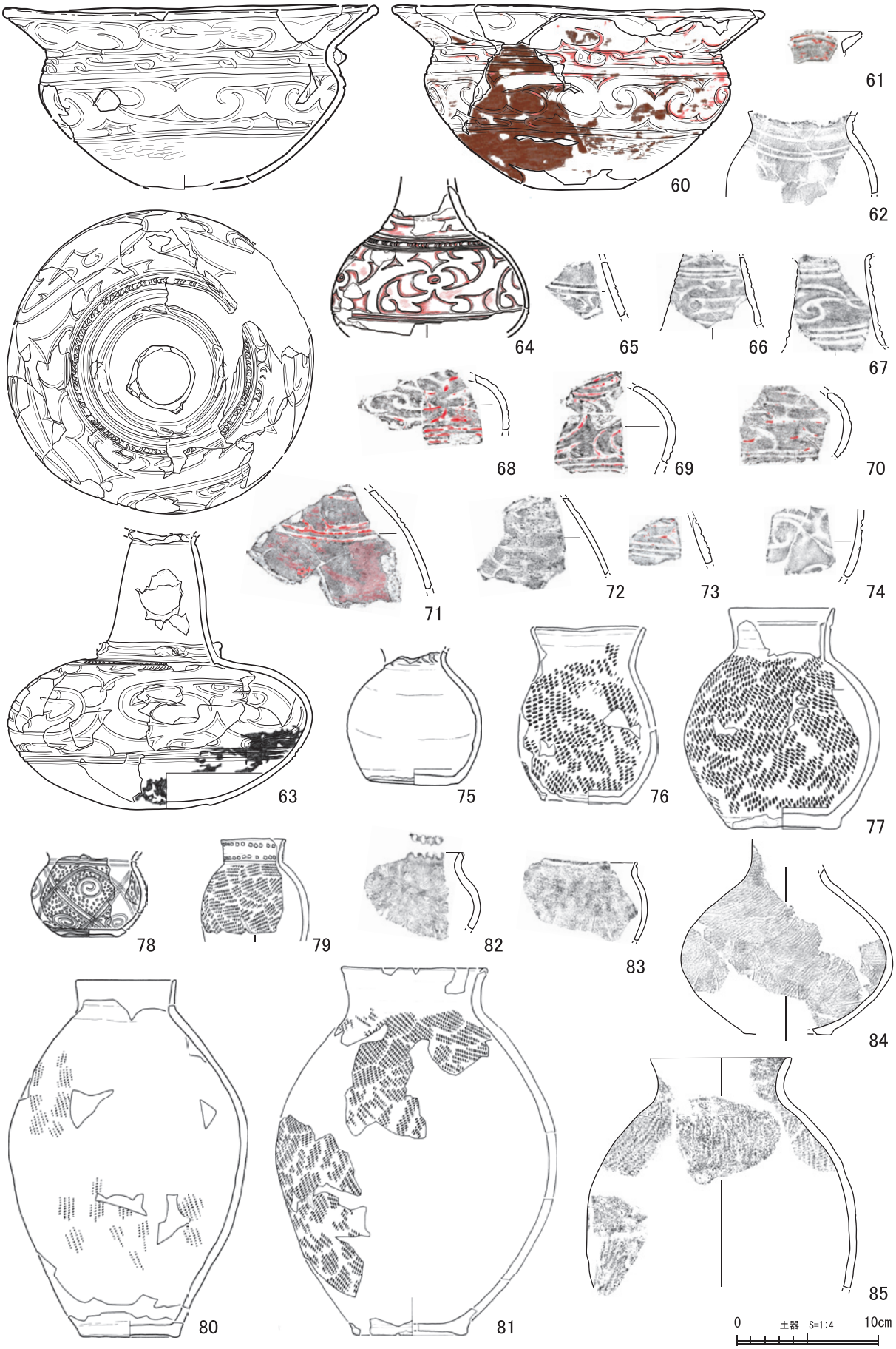
図Ⅳ-５　土器実測図１


15
16
17
18
19
20
21
22
23
24
25
26
27
28
29
30
31
32
33
34
35
082
36
37
38
39
0
土器 S=1:4
10cm

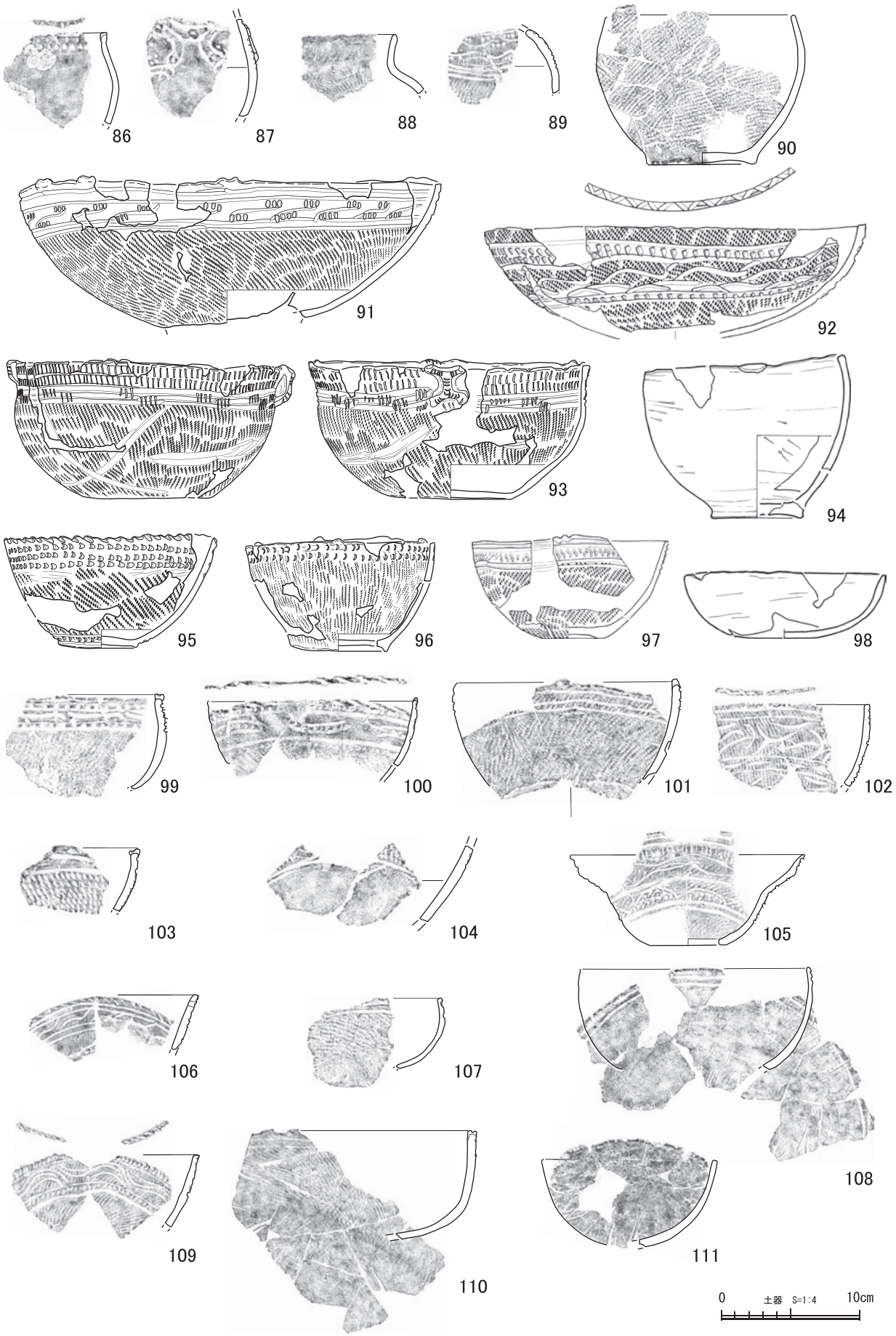
図Ⅳ-６　土器実測図２


40
41
42
43
44
45
46
47
48
49
50
51
52
53
54
55
56
57
58
59
0
土器　S=1:4
10cm

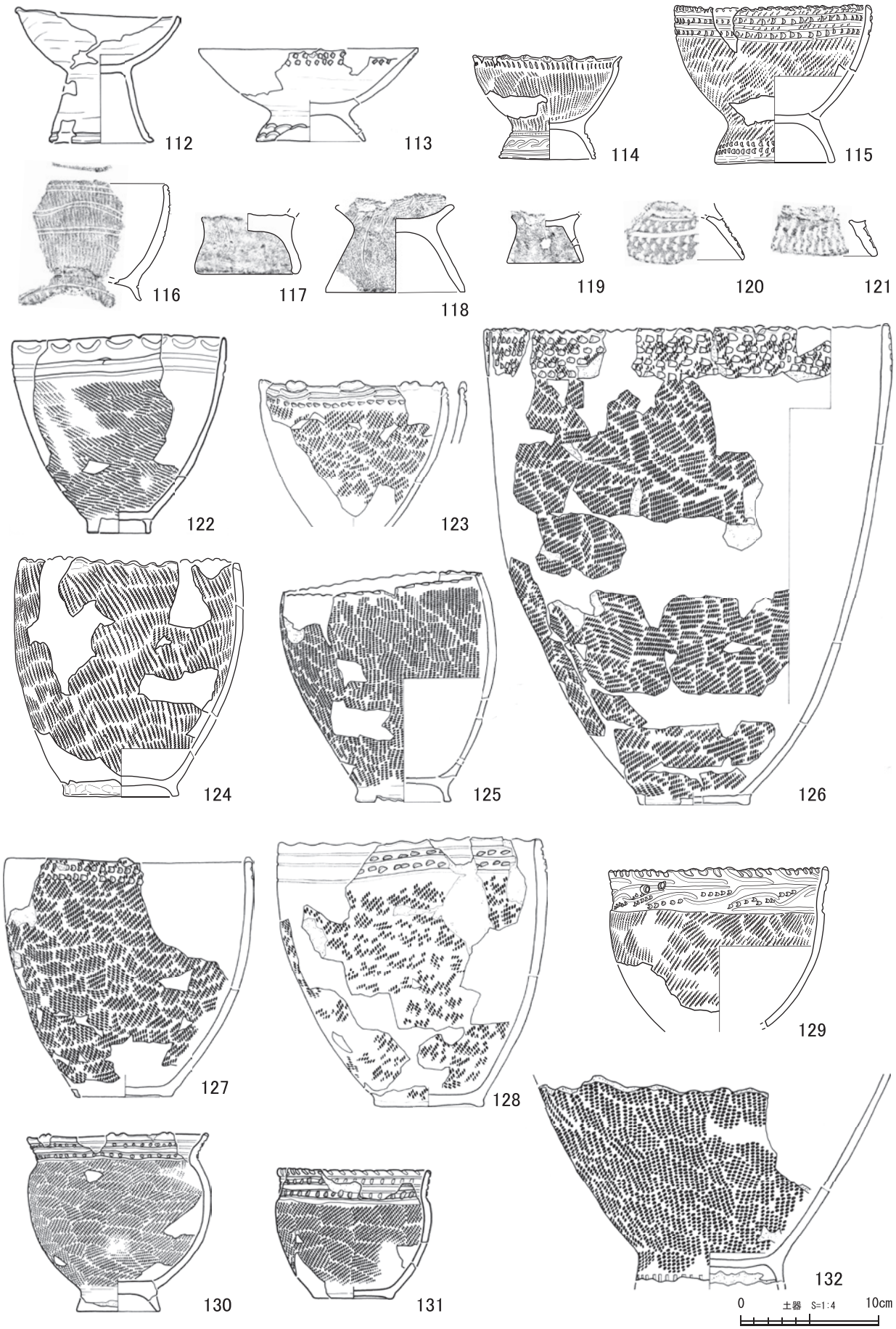
図Ⅳ-７　土器実測図３


60
61
62
63
64
65
66
67
68
69
70
71
72
73
74
75
76
77
78
79
80
81
82
83
84
85
0
土器 S=1:4
10cm

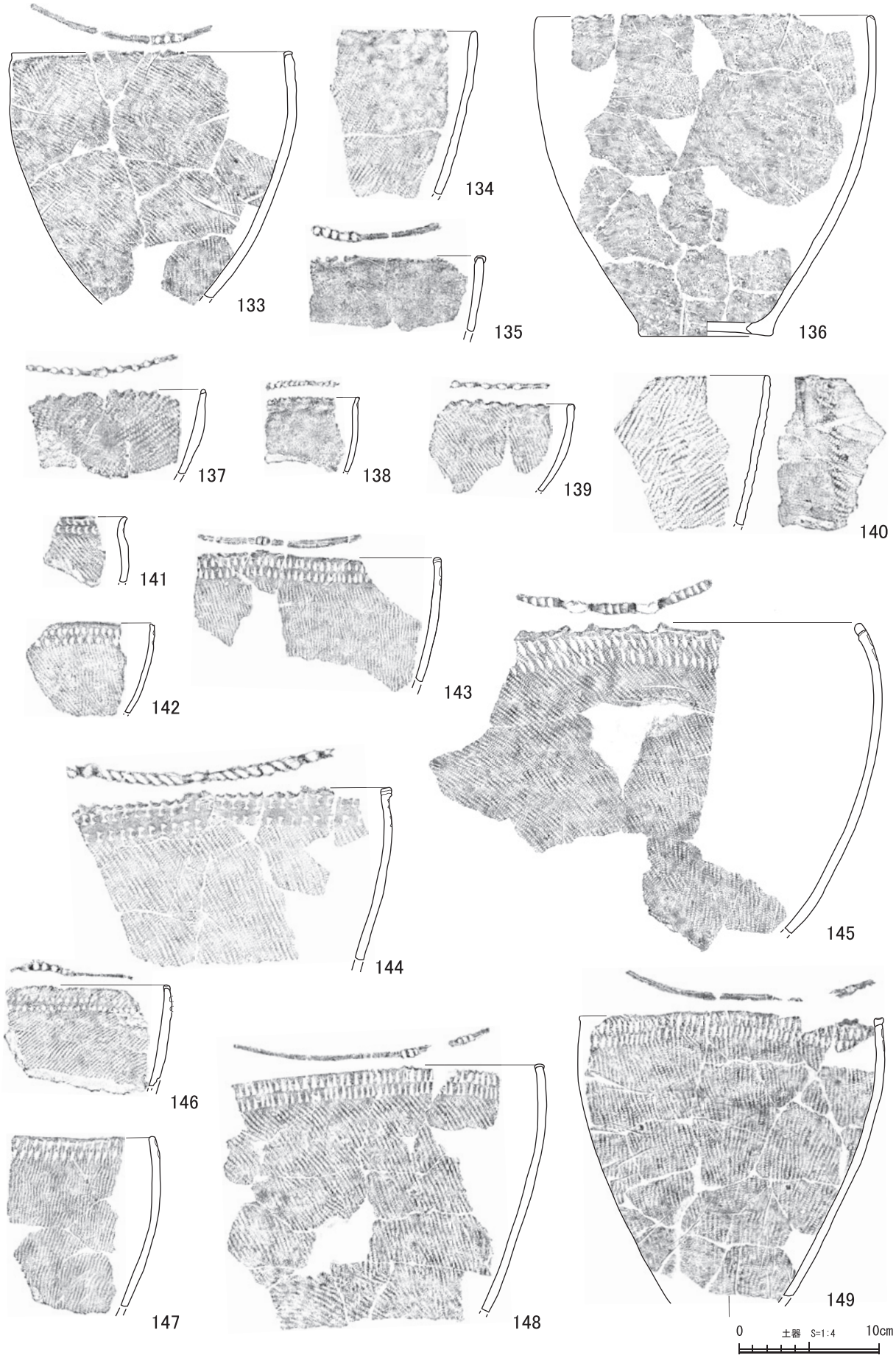
図Ⅳ-８　土器実測図４


86
87
88
89
90
91
92
93
94
95
96
97
98
99
100
101
102
103
104
105
106
107
108
109
110
111
0
土器　S=1:4
10cm

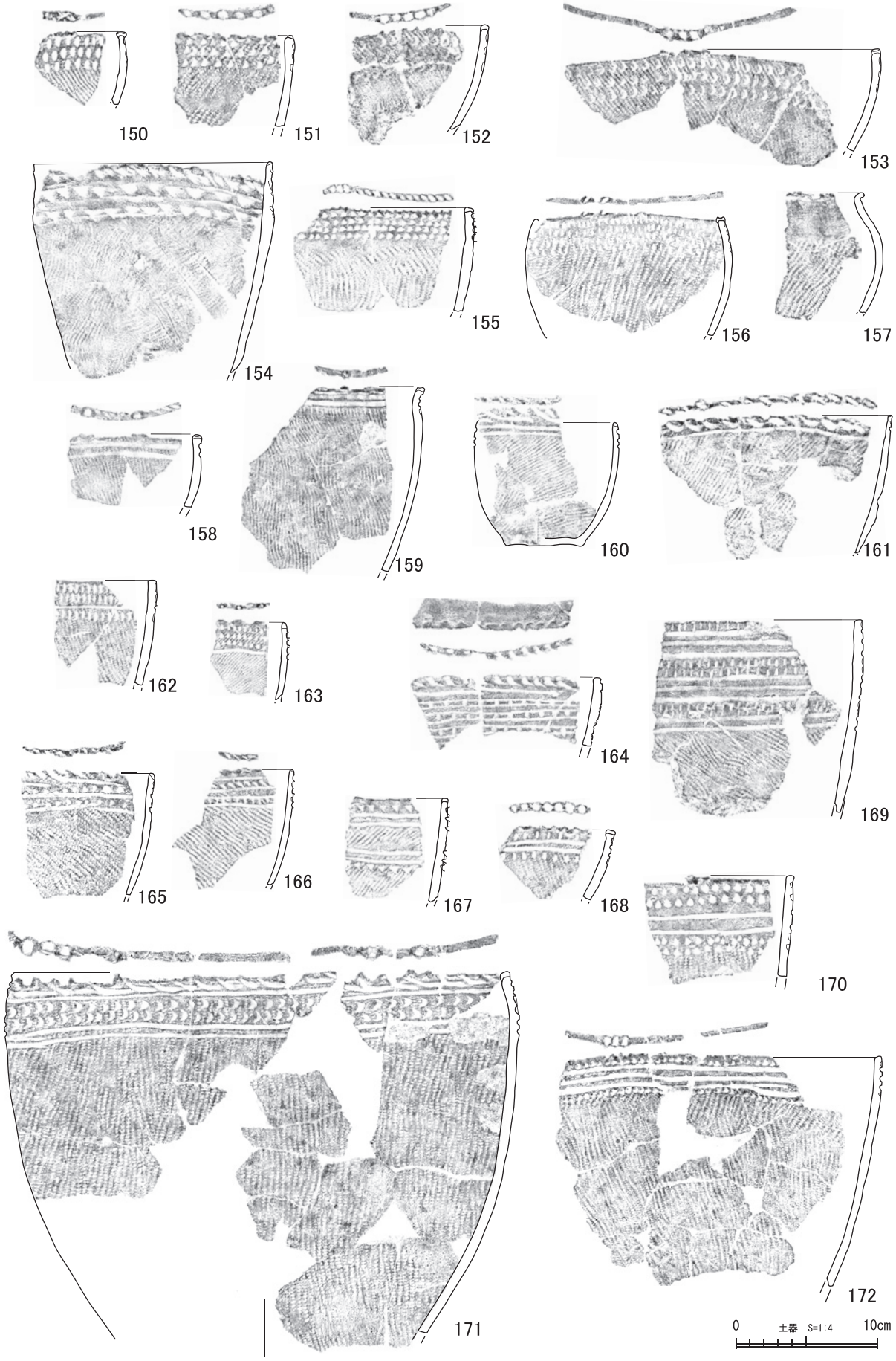
図Ⅳ-９　土器実測図５


112
113
114
115
116
117
118
119
120
121
122
123
124
125
126
127
128
129
130
131
132
0
土器 S=1:4
10cm

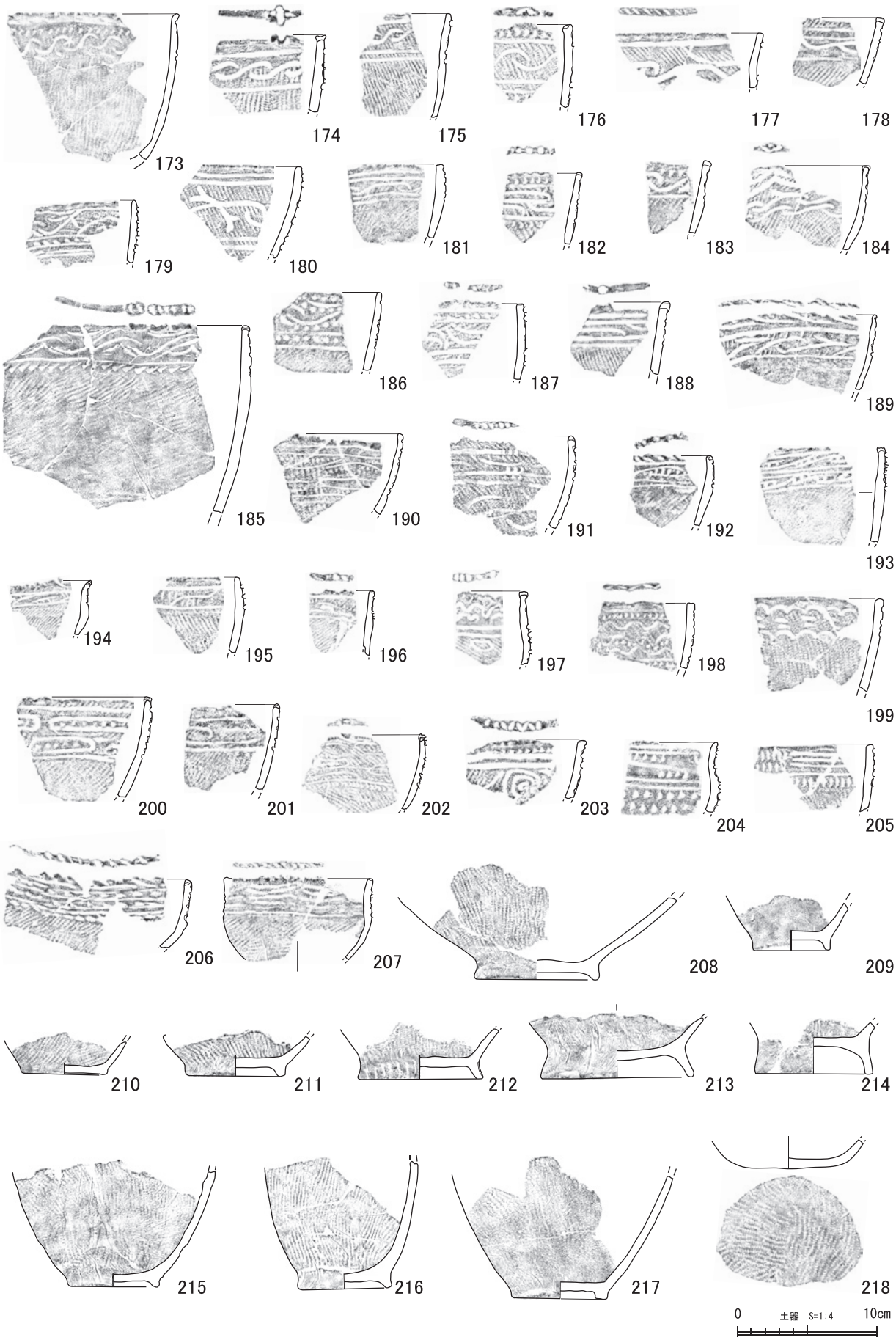
図Ⅳ-10　土器実測図６


133
134
135
136
137
138
139
140
141
142
143
144
145
146
147
148
149
0
土器 S=1:4
10cm

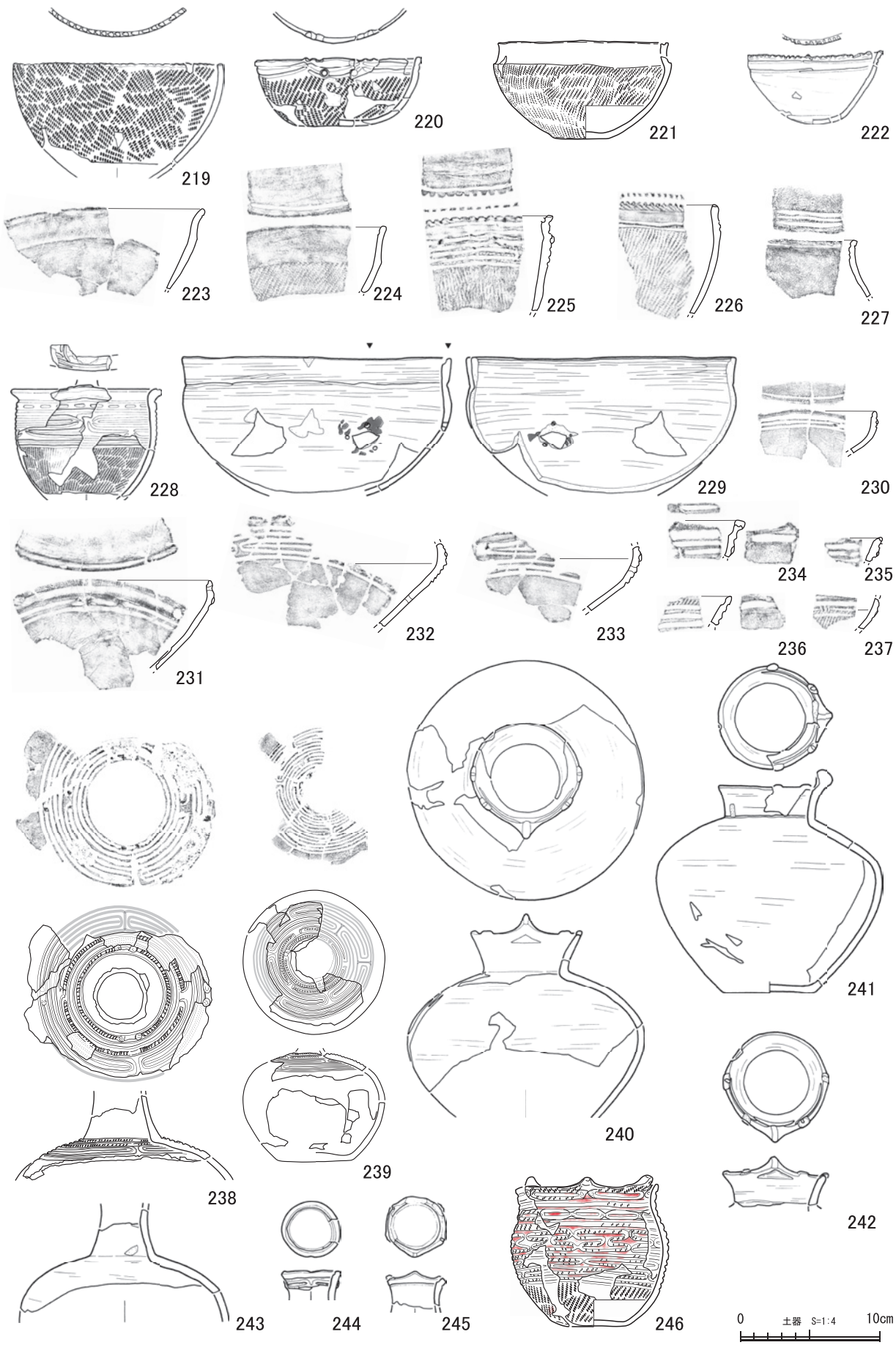
図Ⅳ-11　土器実測図７


150
151
152
153
154
155
156
157
158
159
160
161
162
163
164
165
166
167
168
169
170
171
172
0
土器 S=1:4
10cm

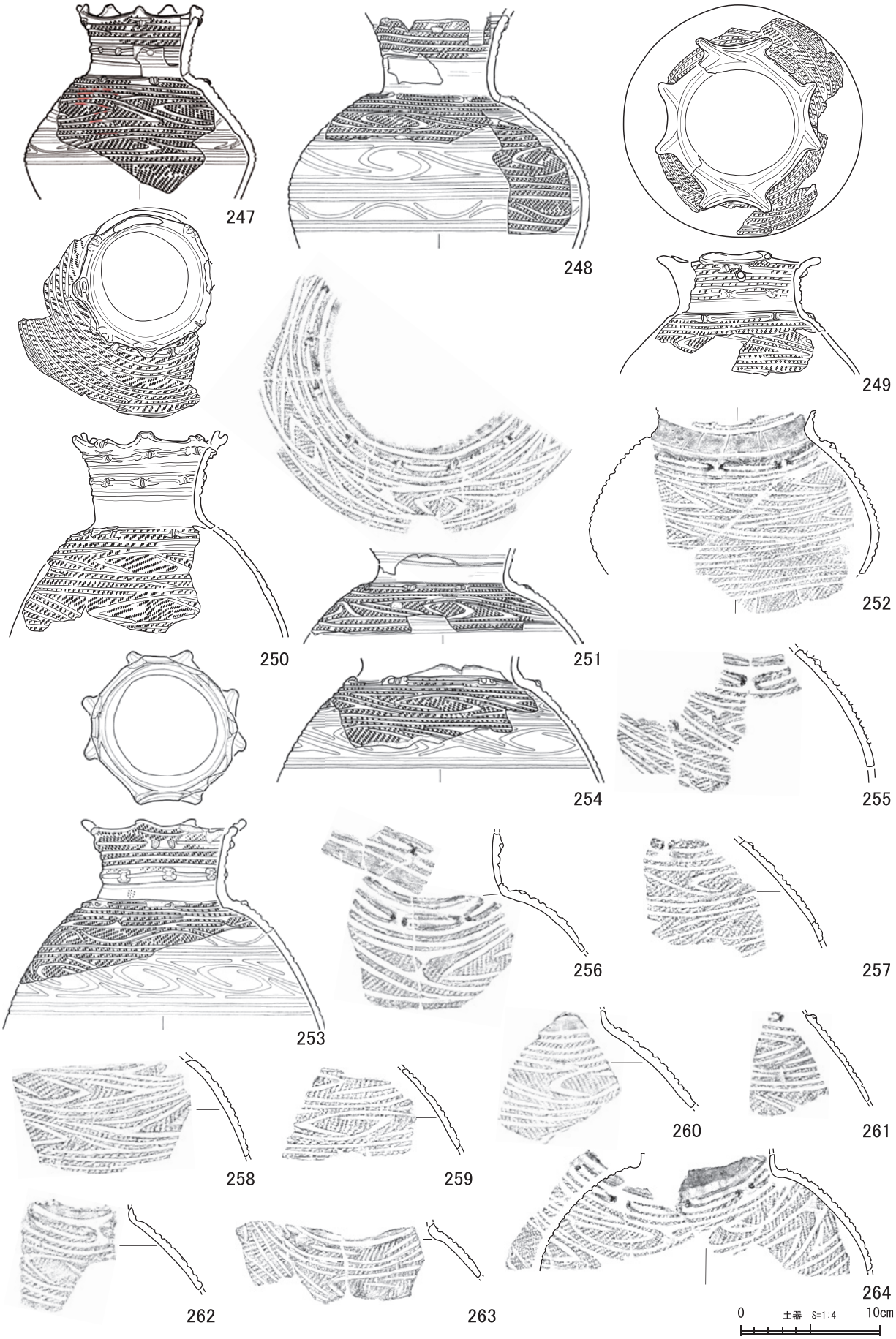
図Ⅳ-12　土器実測図８


173
174
175
176
177
178
179
180
181
182
183
184
185
186
187
188
189
190
191
192
193
194
195
196
197
198
199
200
201
202
203
204
205
206
207
208
209
210
211
212
213
214
215
216
217
218
0
土器 S=1:4
10cm

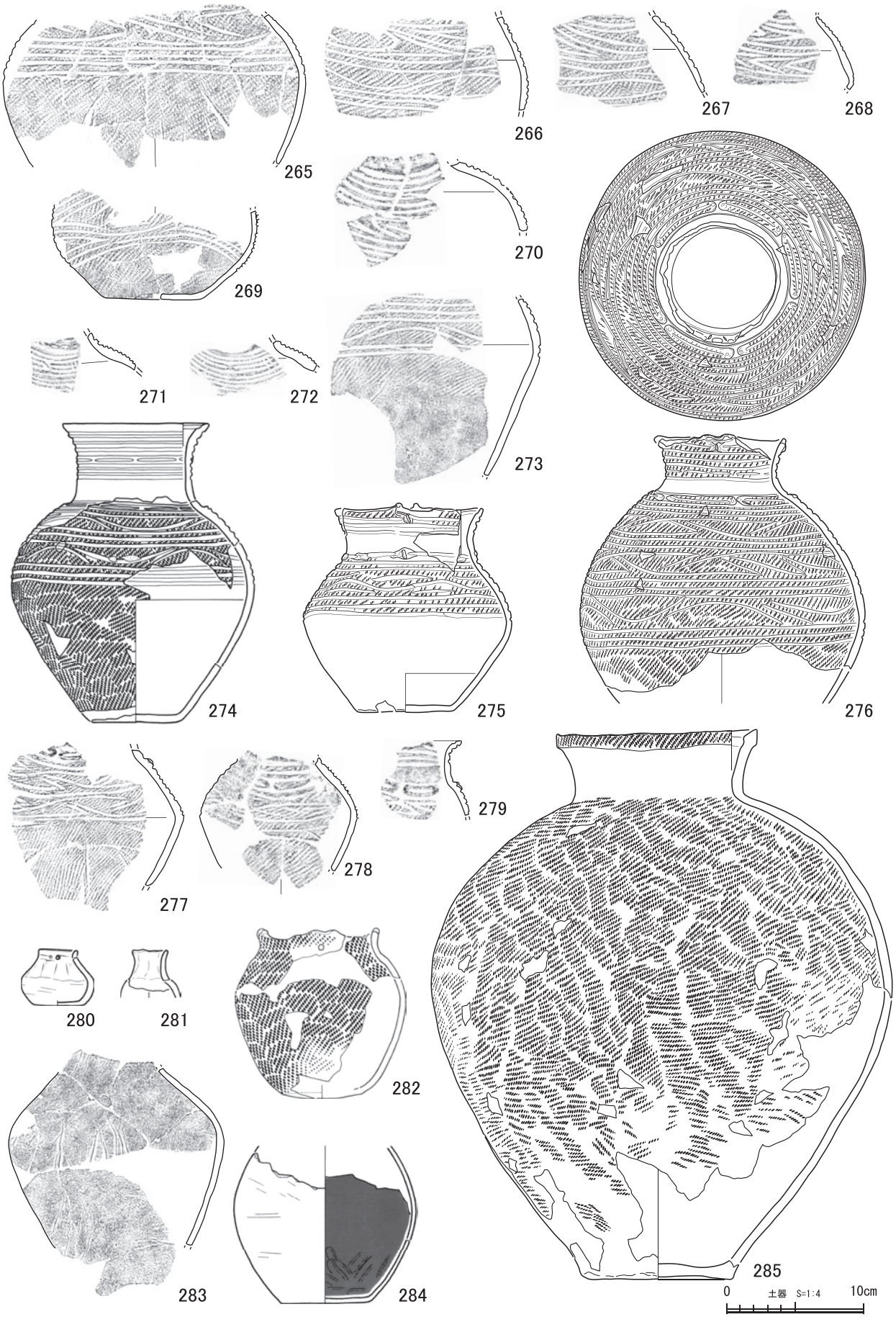
図Ⅳ-13　土器実測図９



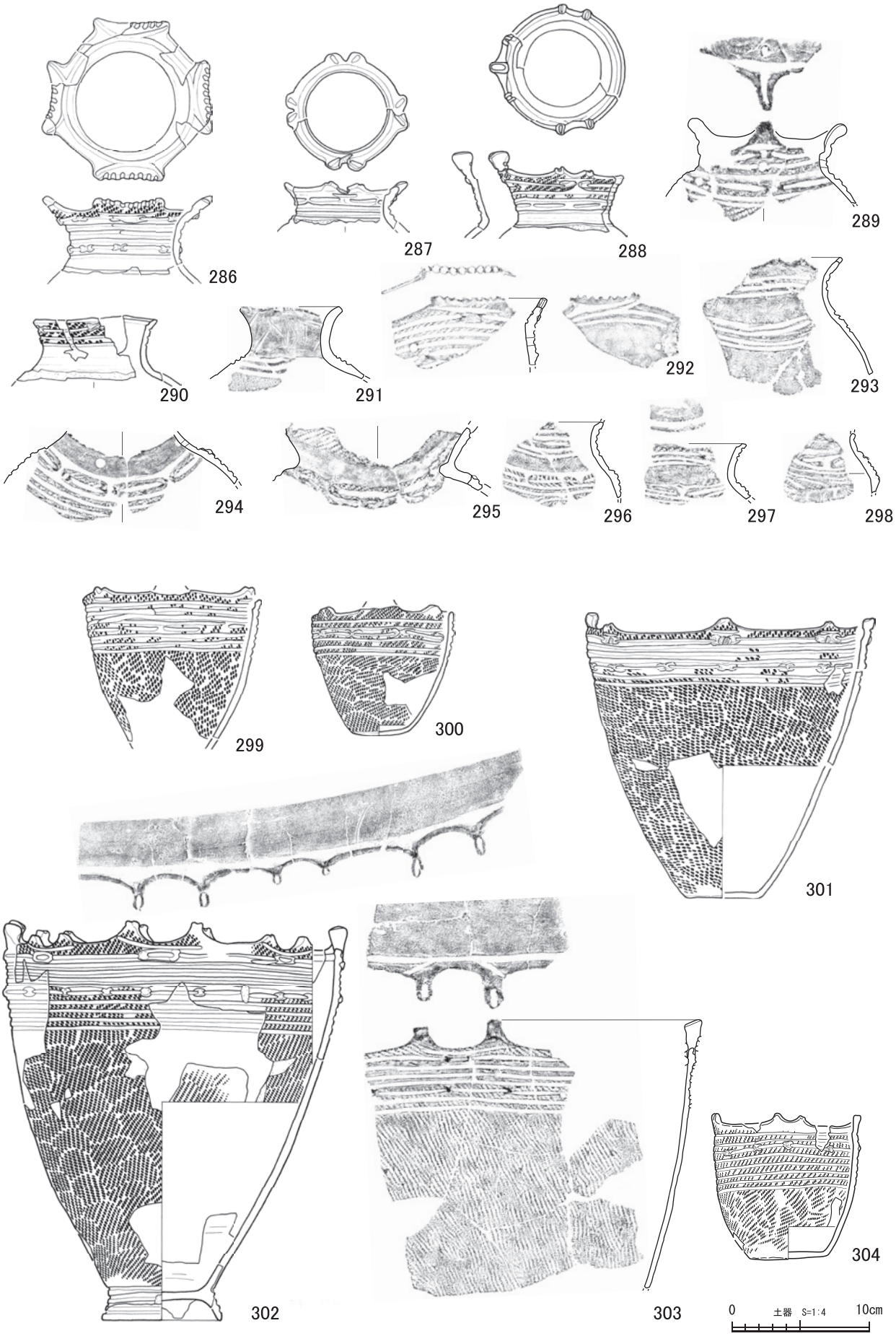
図Ⅳ-14　土器実測図 10



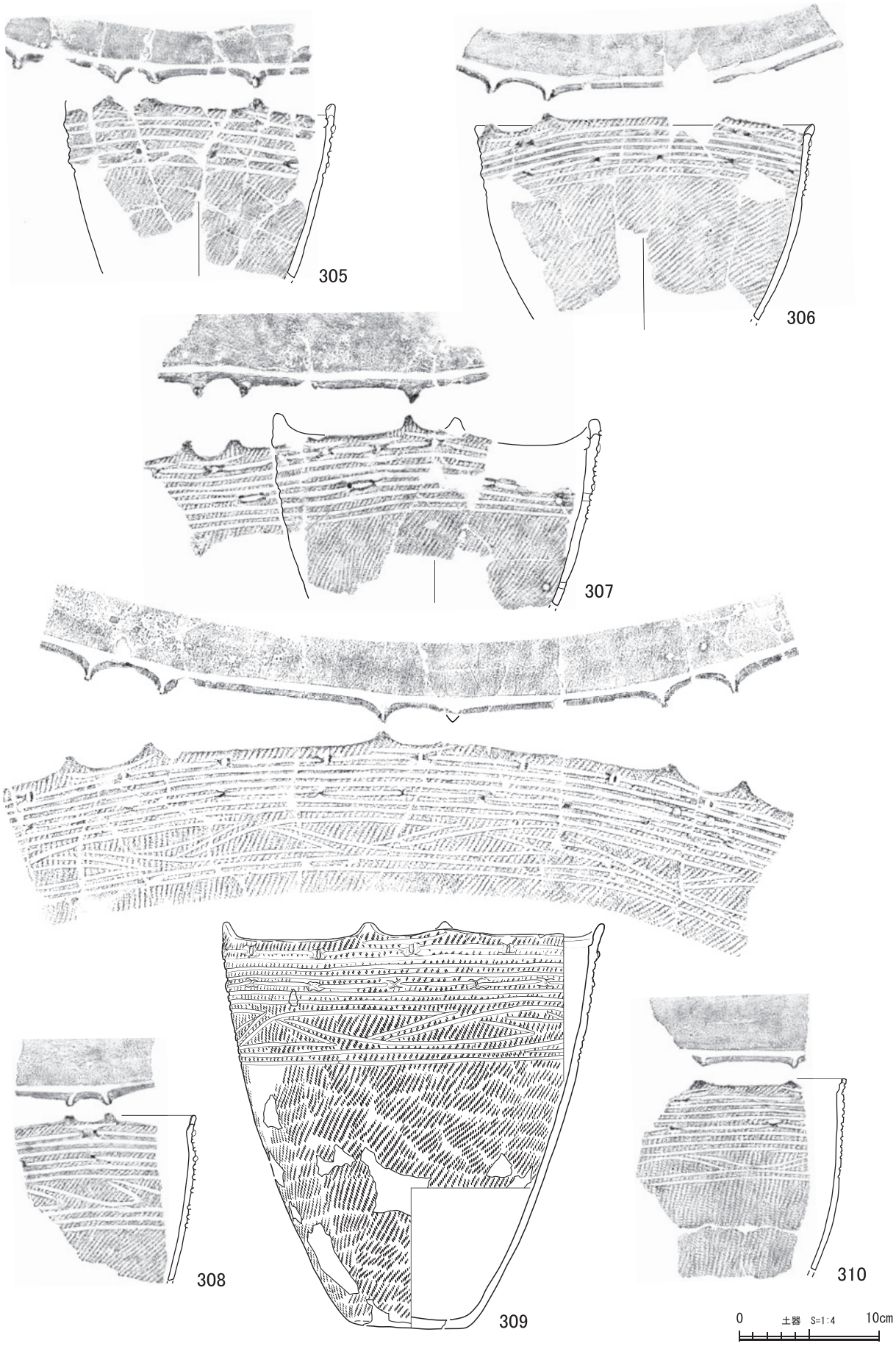
図Ⅳ-15　土器実測図 11



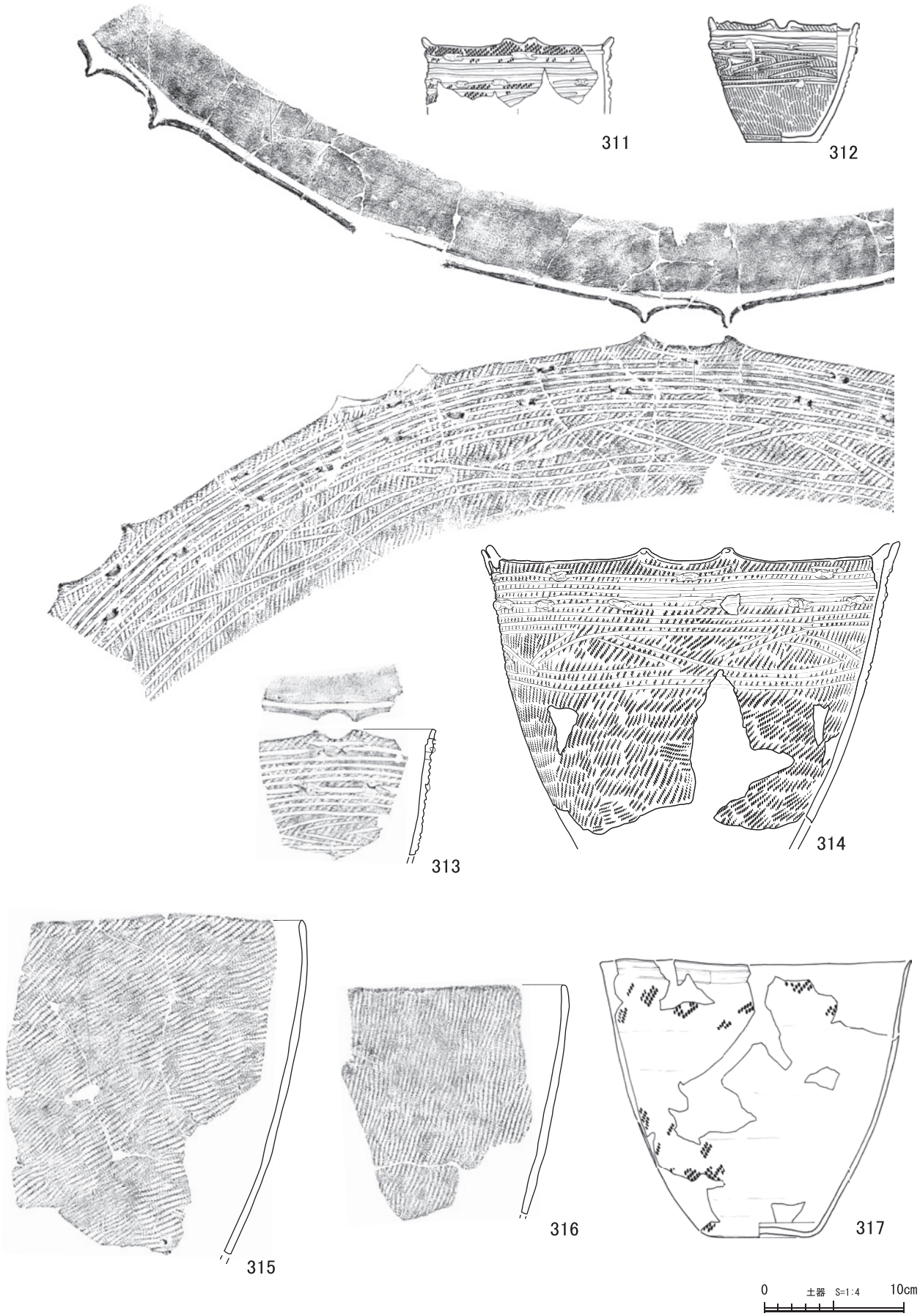
図Ⅳ-16　土器実測図 12



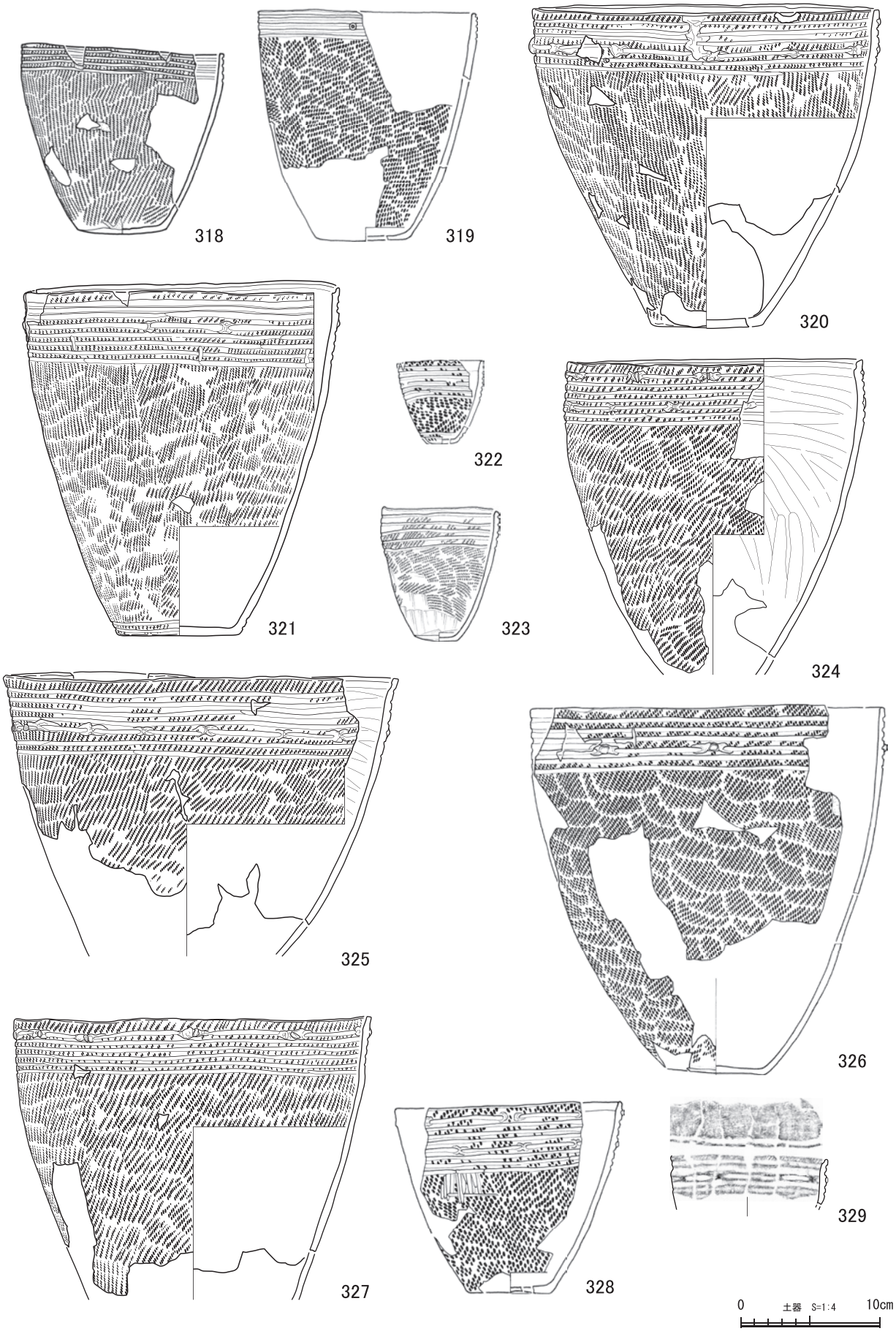
図Ⅳ-17　土器実測図 13



図Ⅳ-18　土器実測図 14

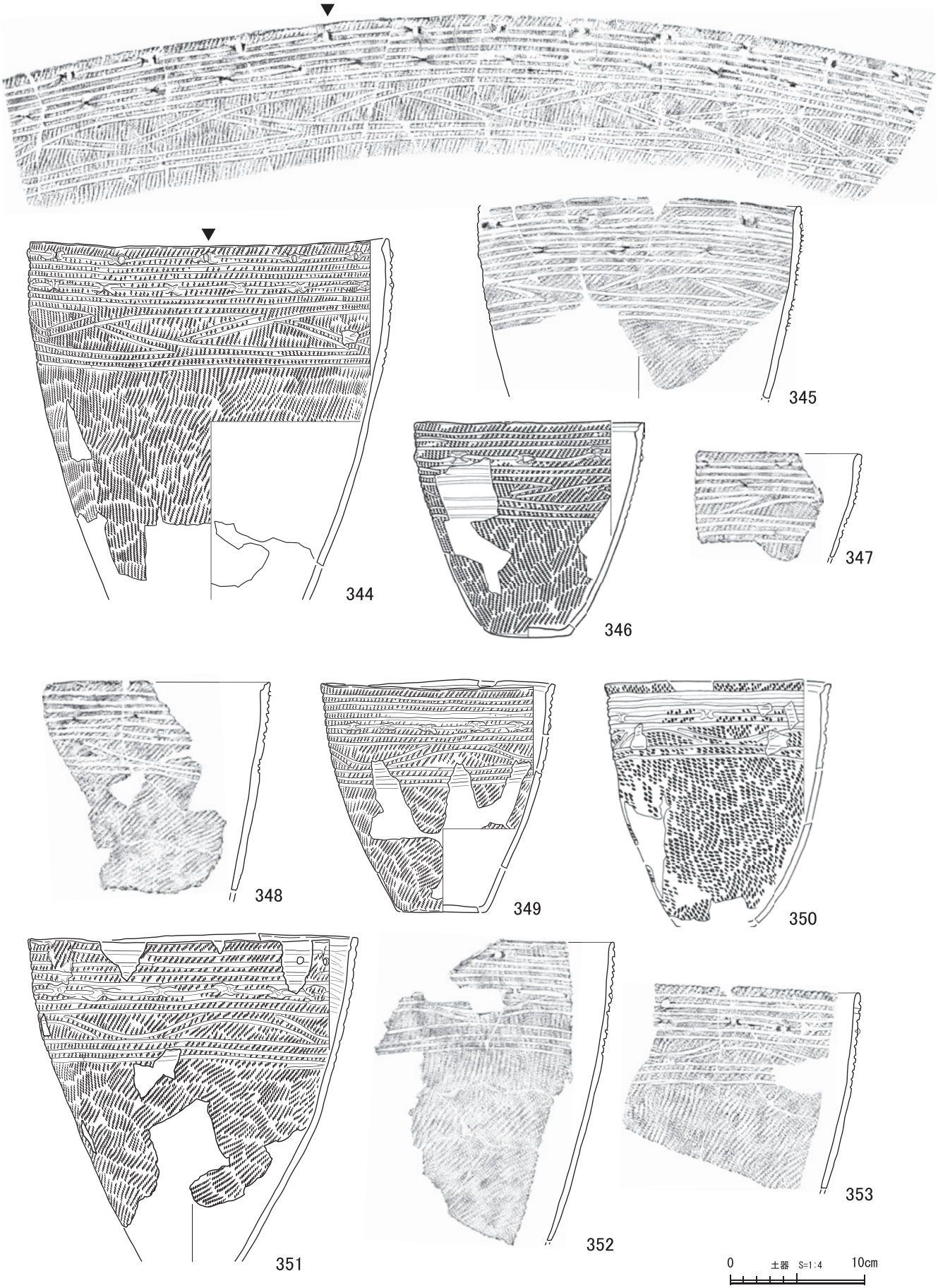


図Ⅳ-19　土器実測図 15

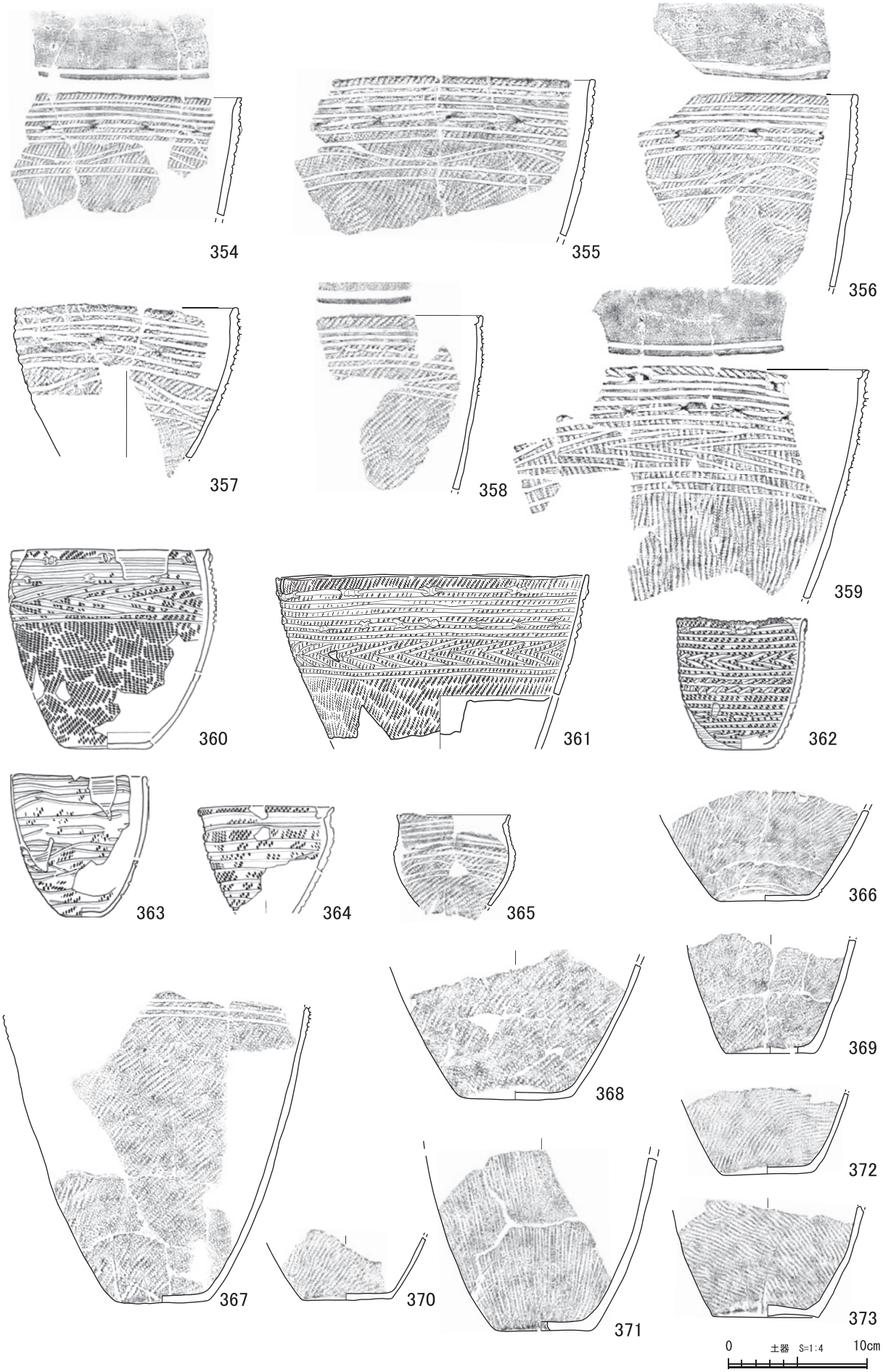


図Ⅳ-20　土器実測図 16

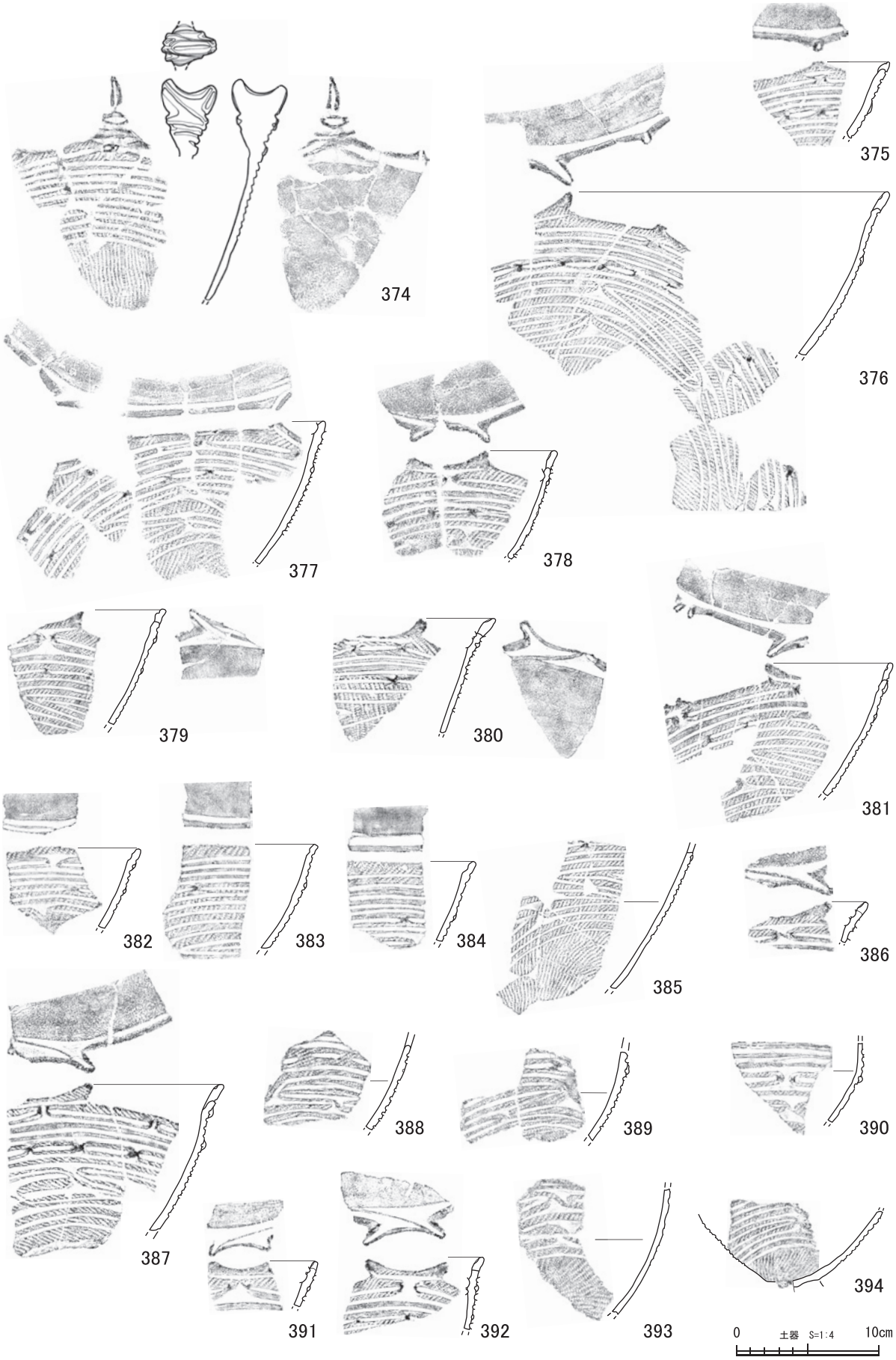
図Ⅳ-21　土器実測図 17



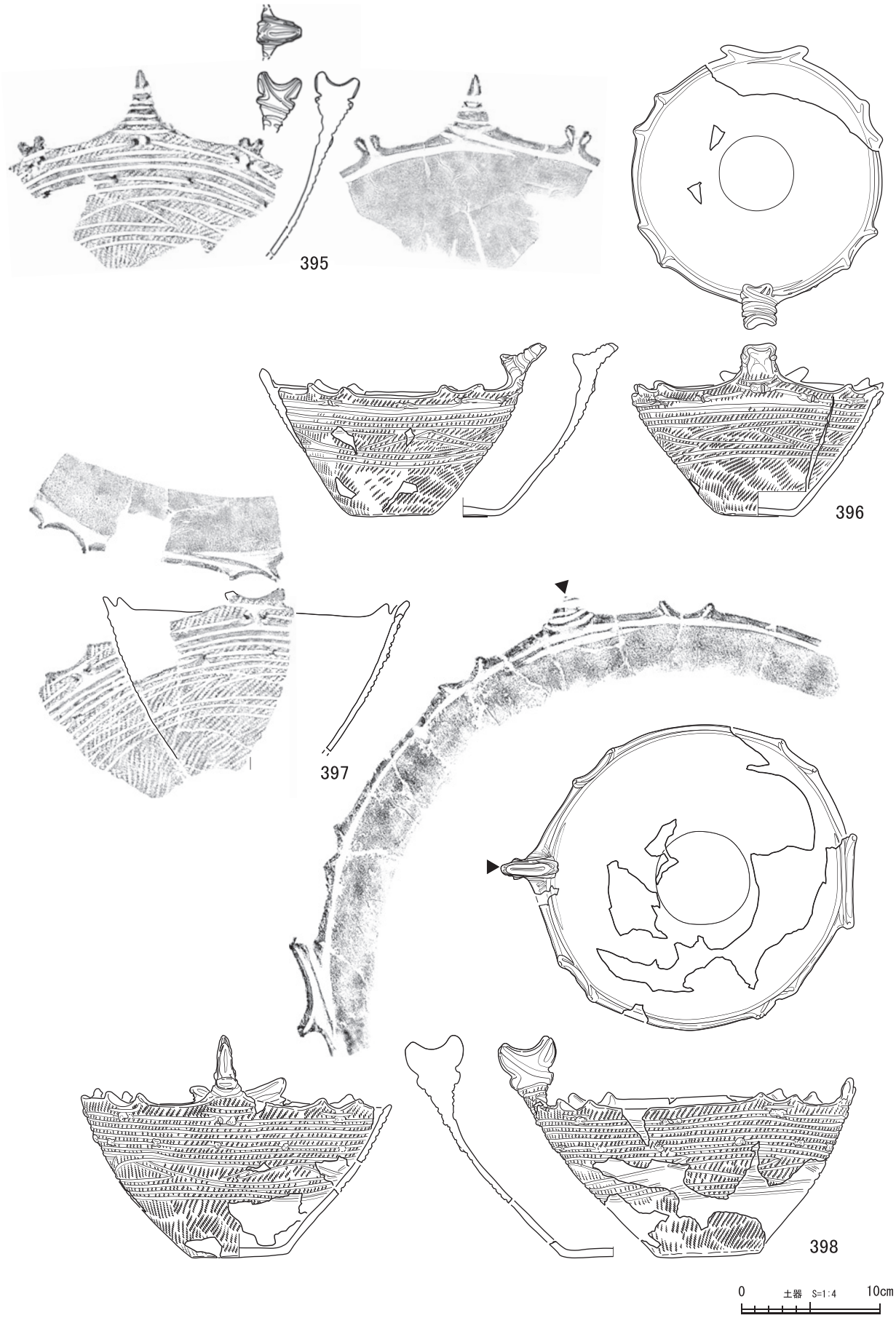
図Ⅳ-22　土器実測図 18



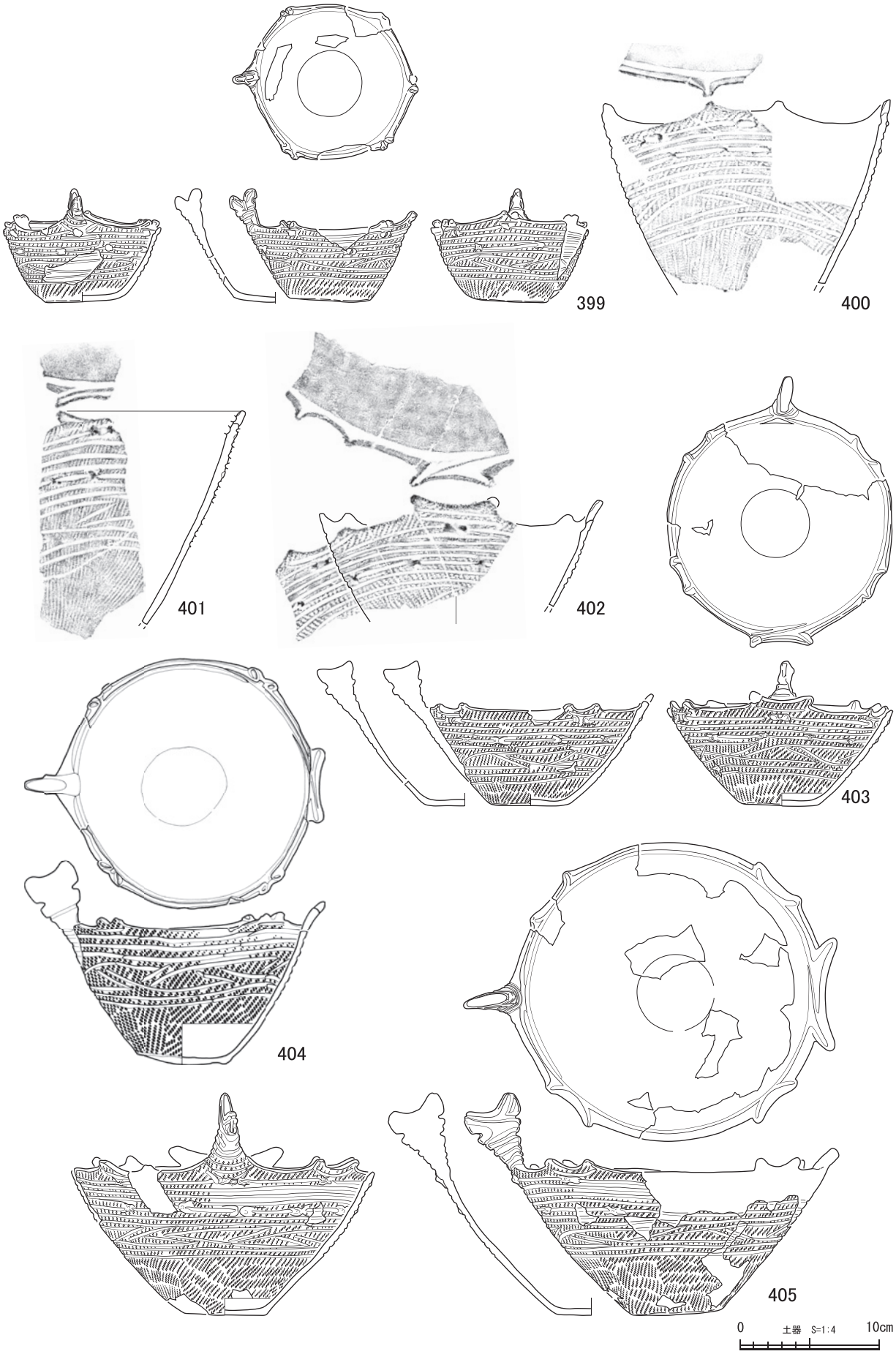
図Ⅳ-23　土器実測図 19



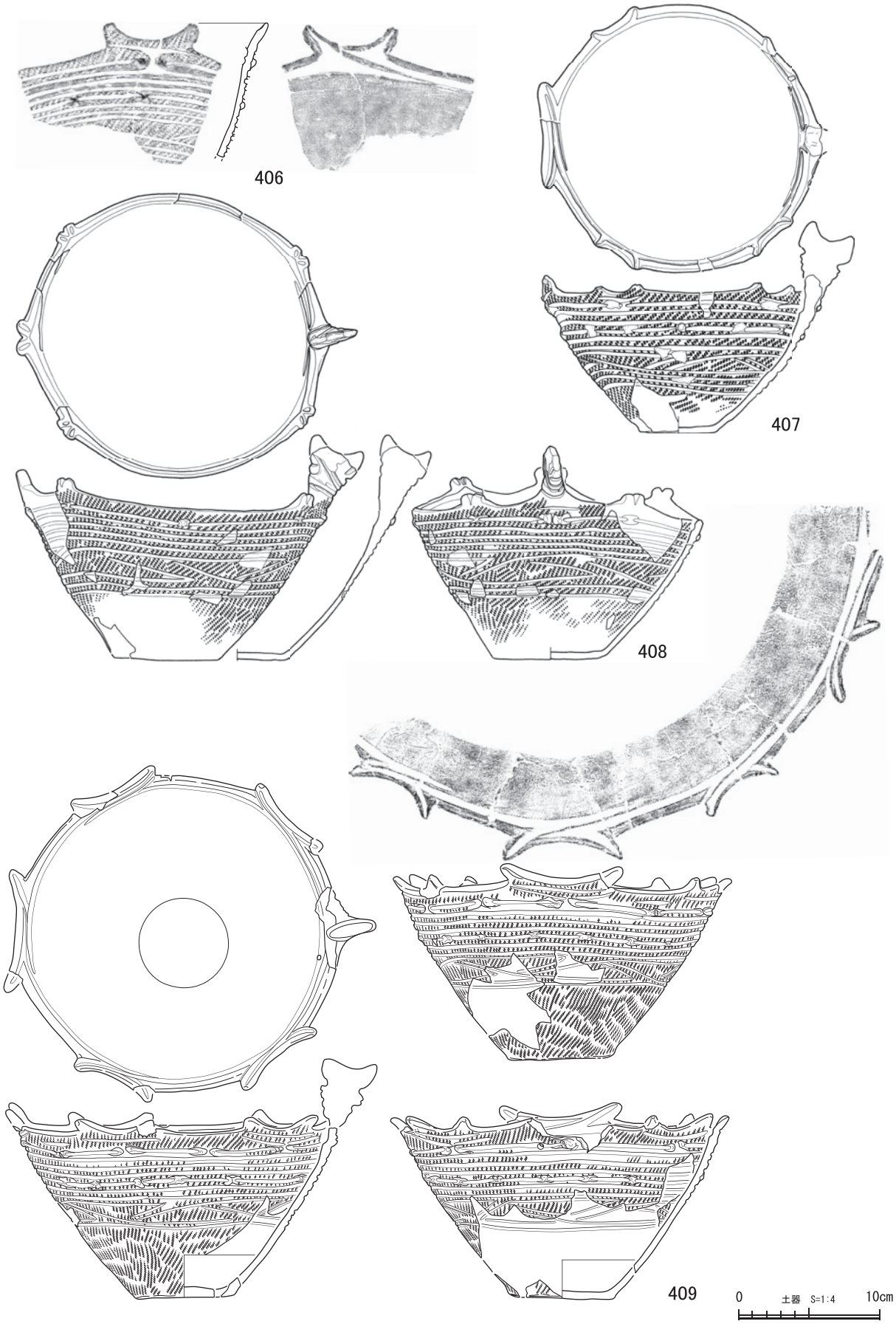
図Ⅳ-24　土器実測図 20



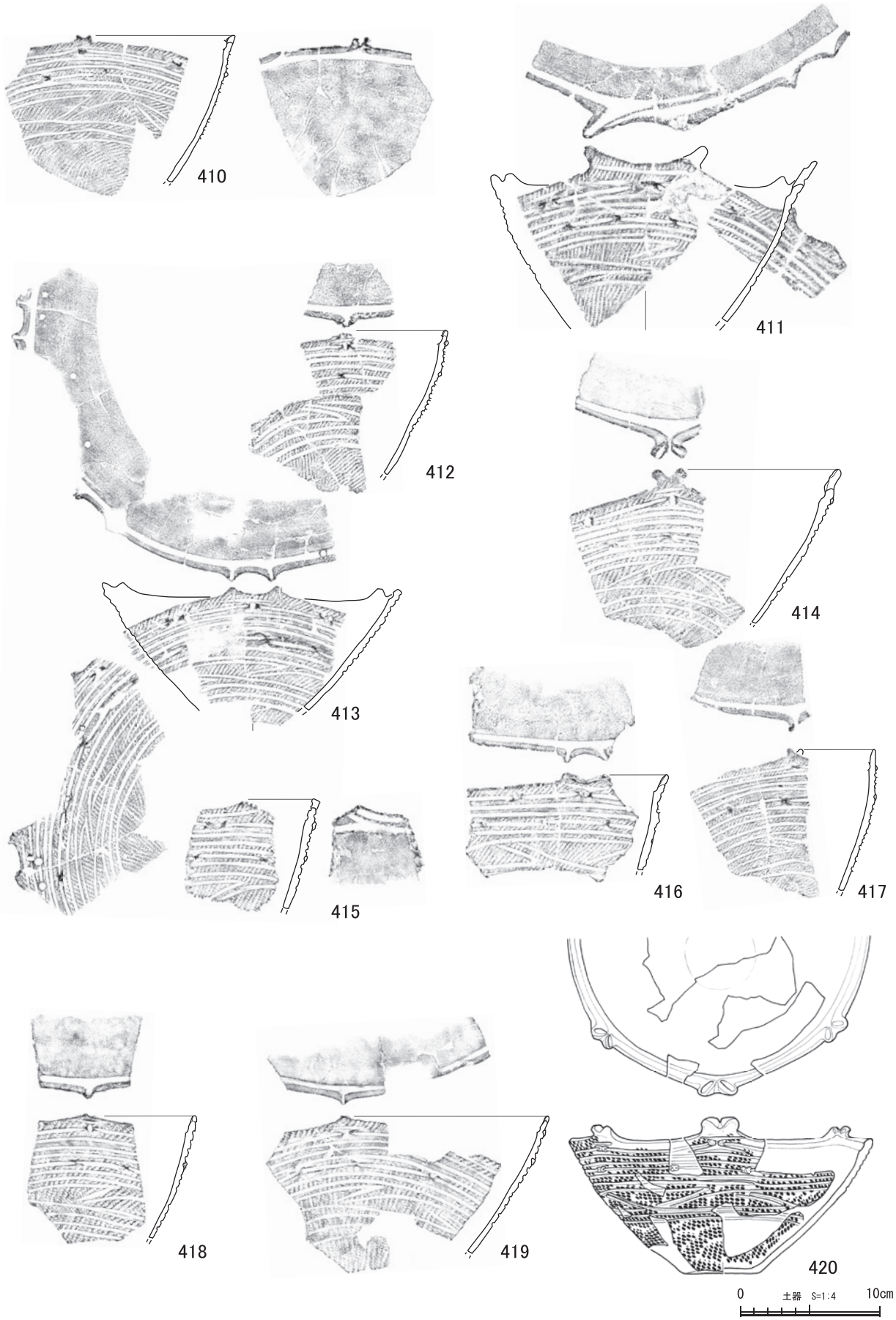
図Ⅳ-25 土器実測図 21



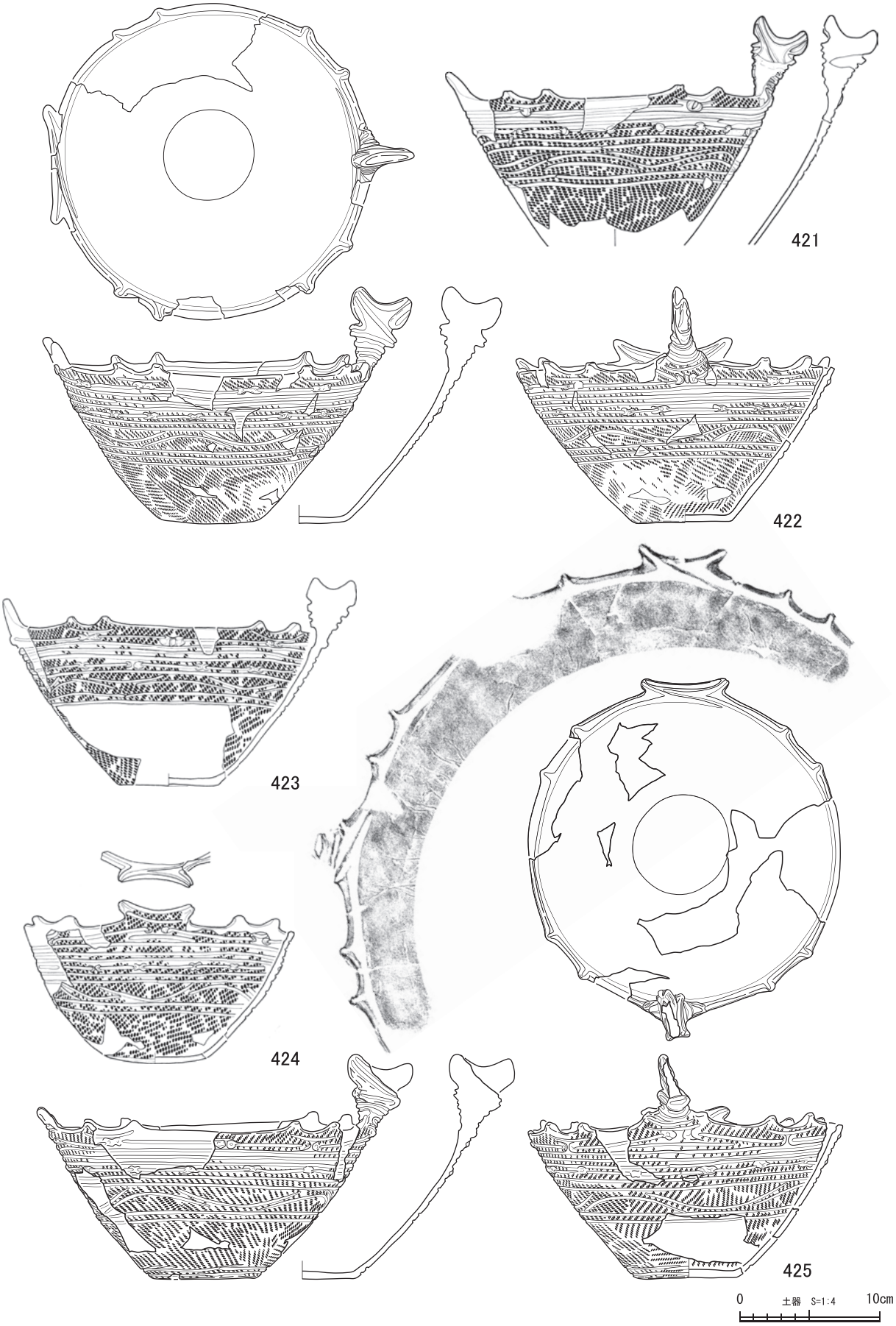
図Ⅳ-26　土器実測図 22



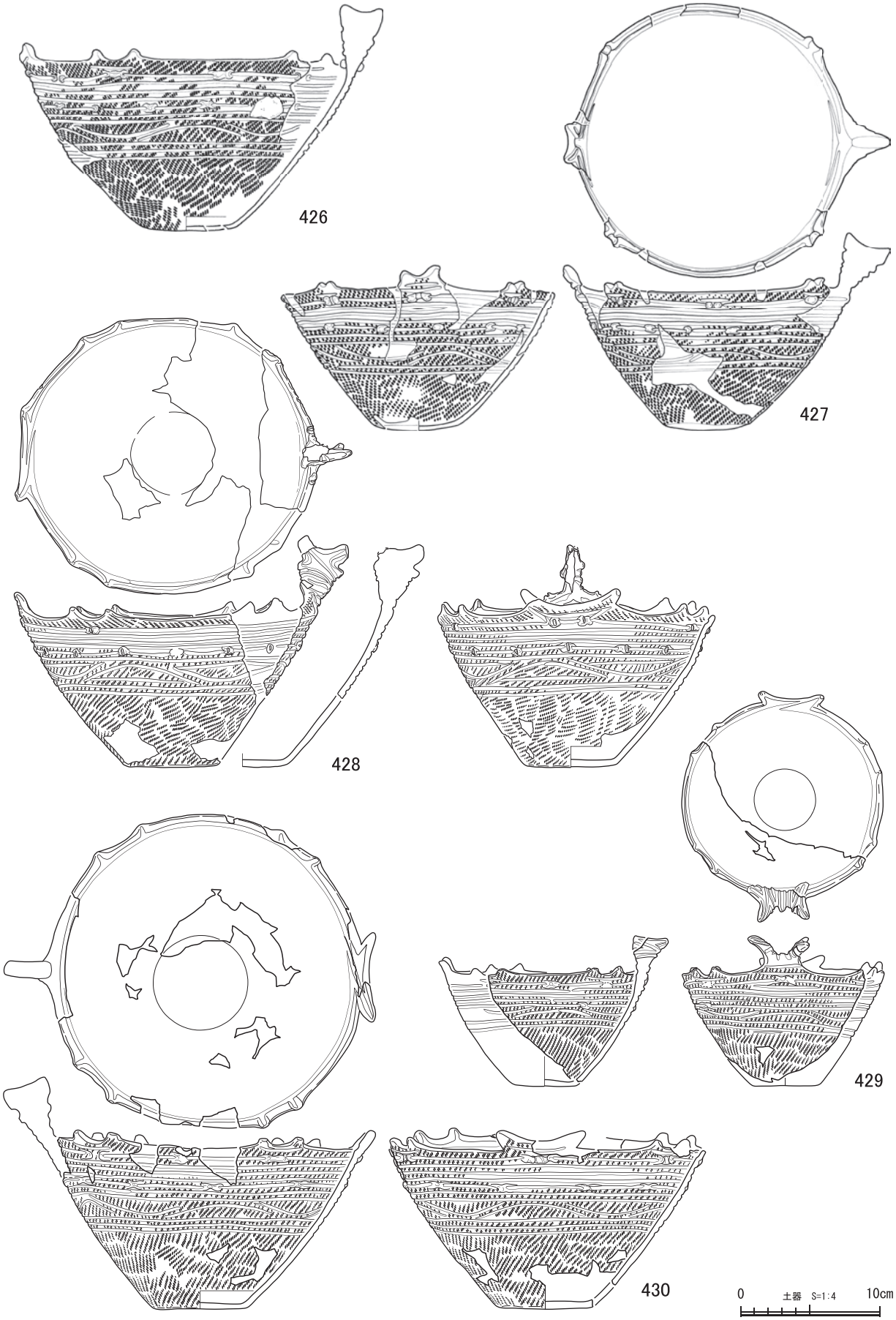
図Ⅳ-27　土器実測図 23



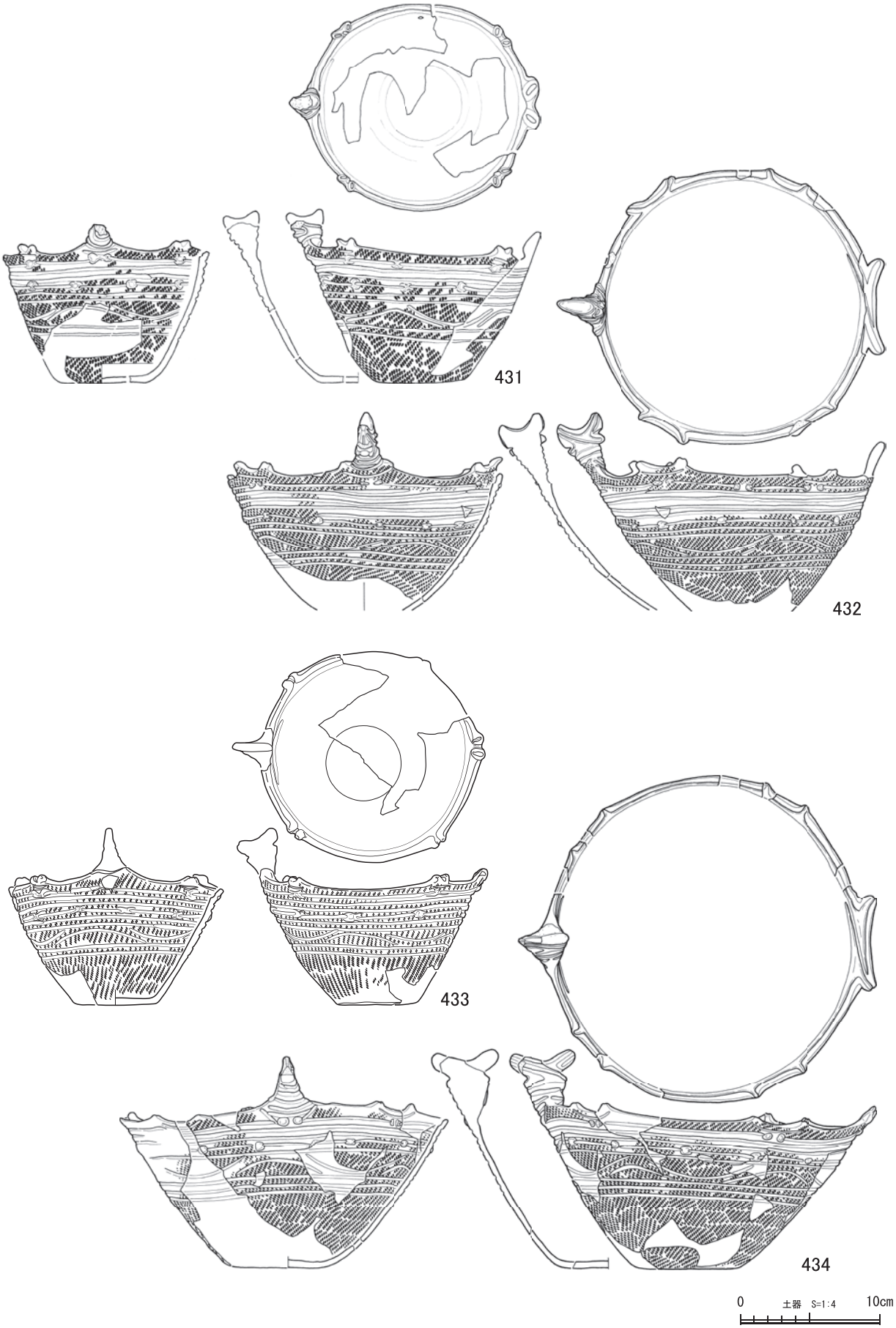
図Ⅳ-28　土器実測図 24



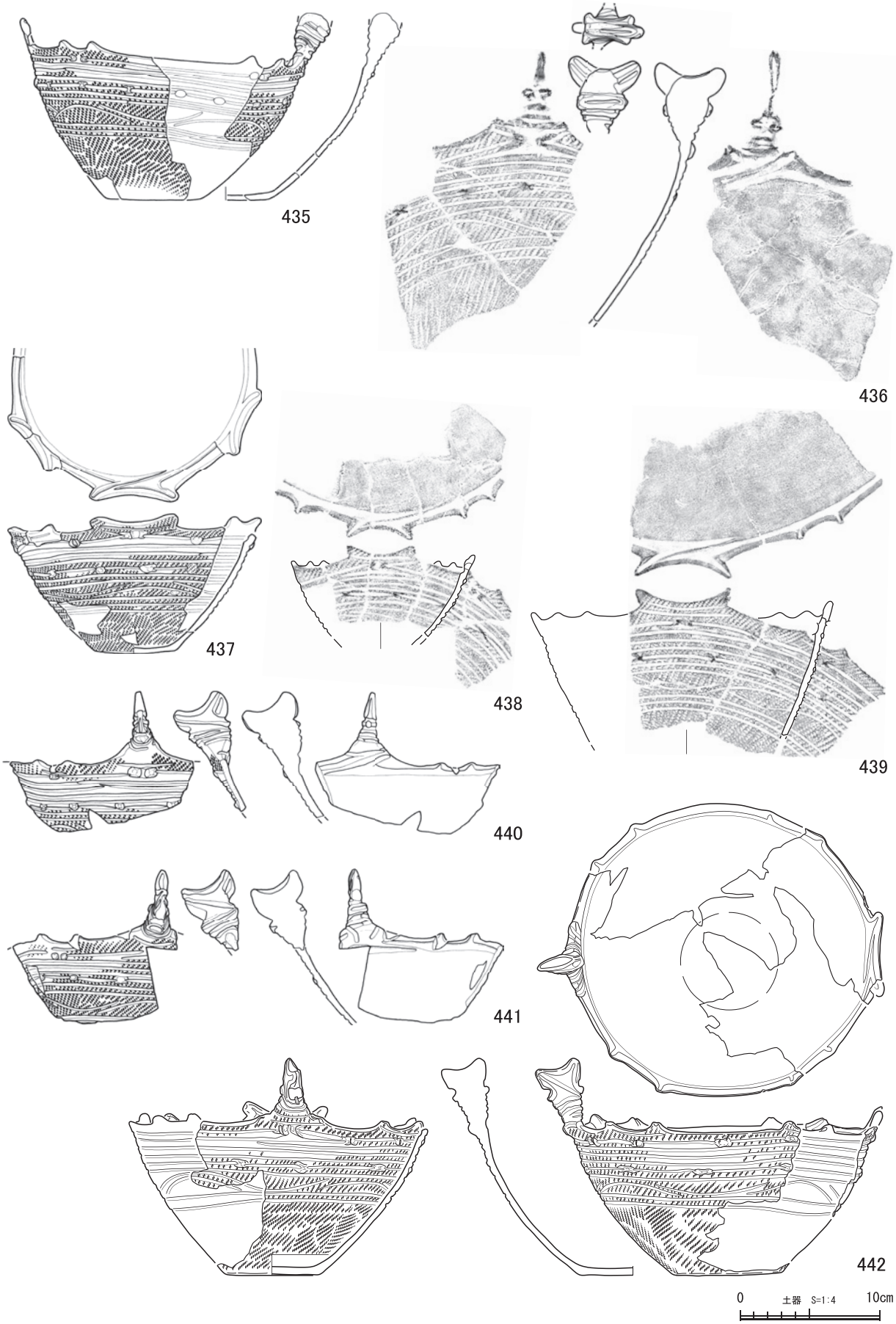
図Ⅳ-29 土器実測図 25



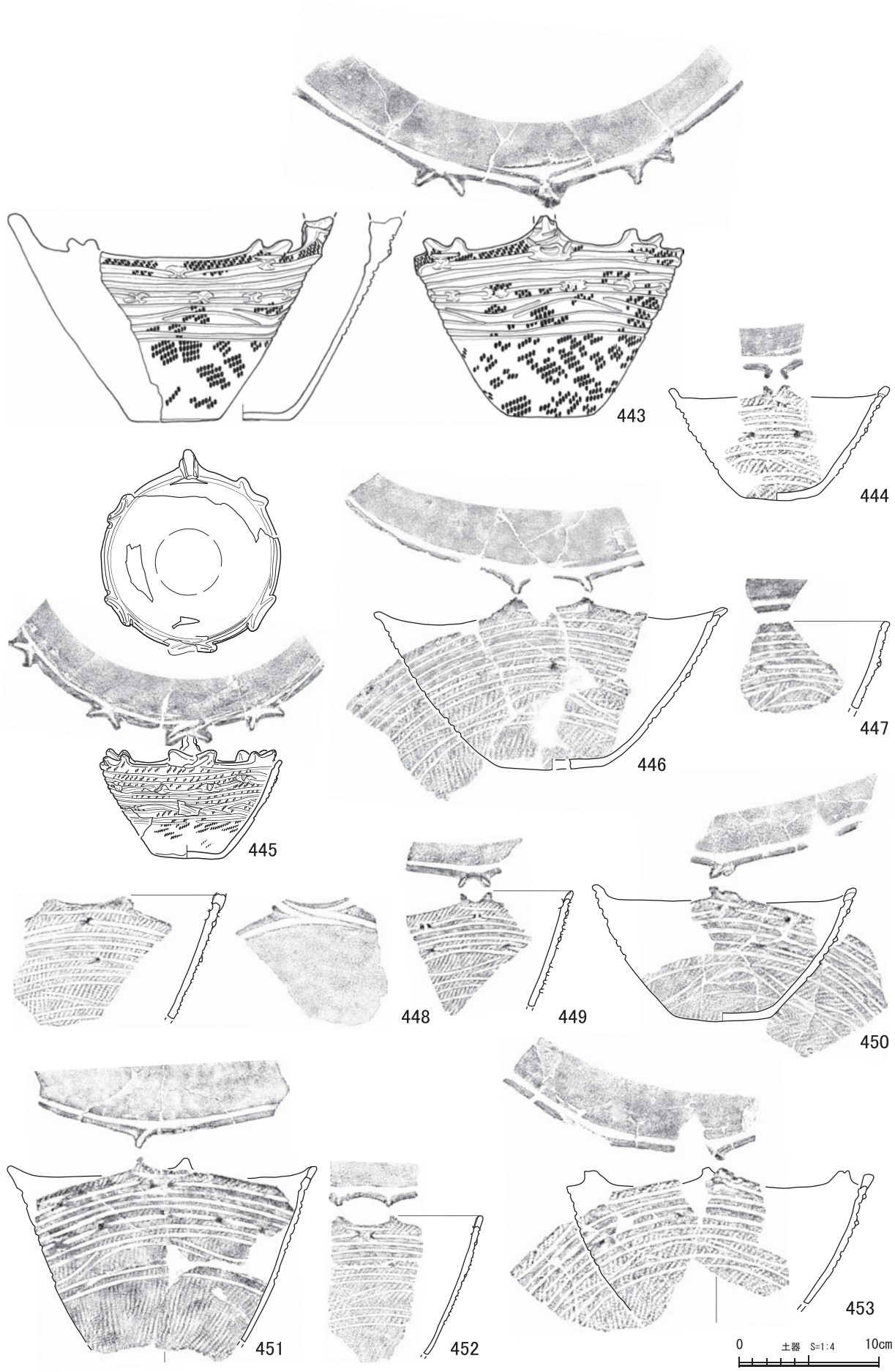
図Ⅳ-30　土器実測図 26



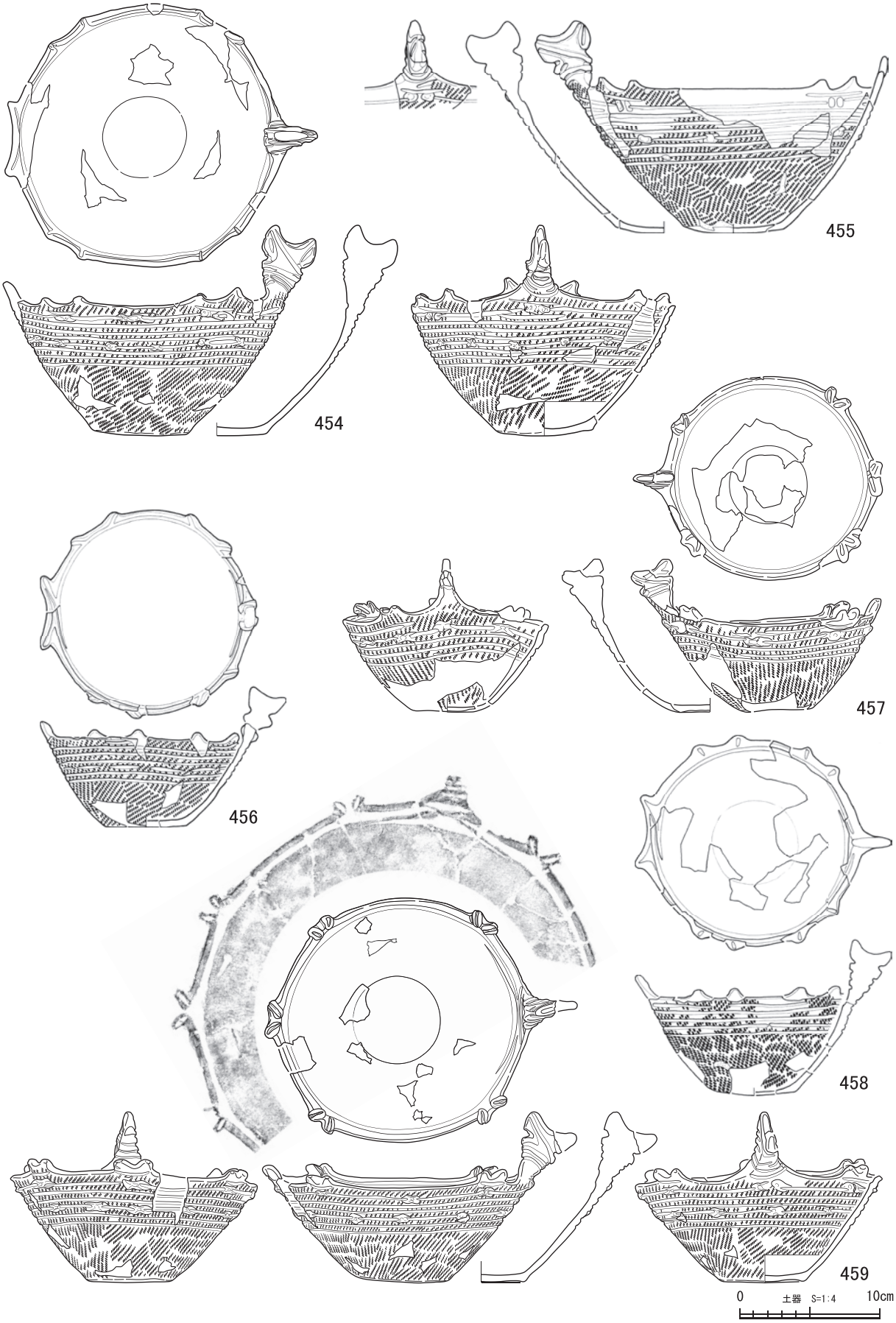
図Ⅳ-31　土器実測図 27



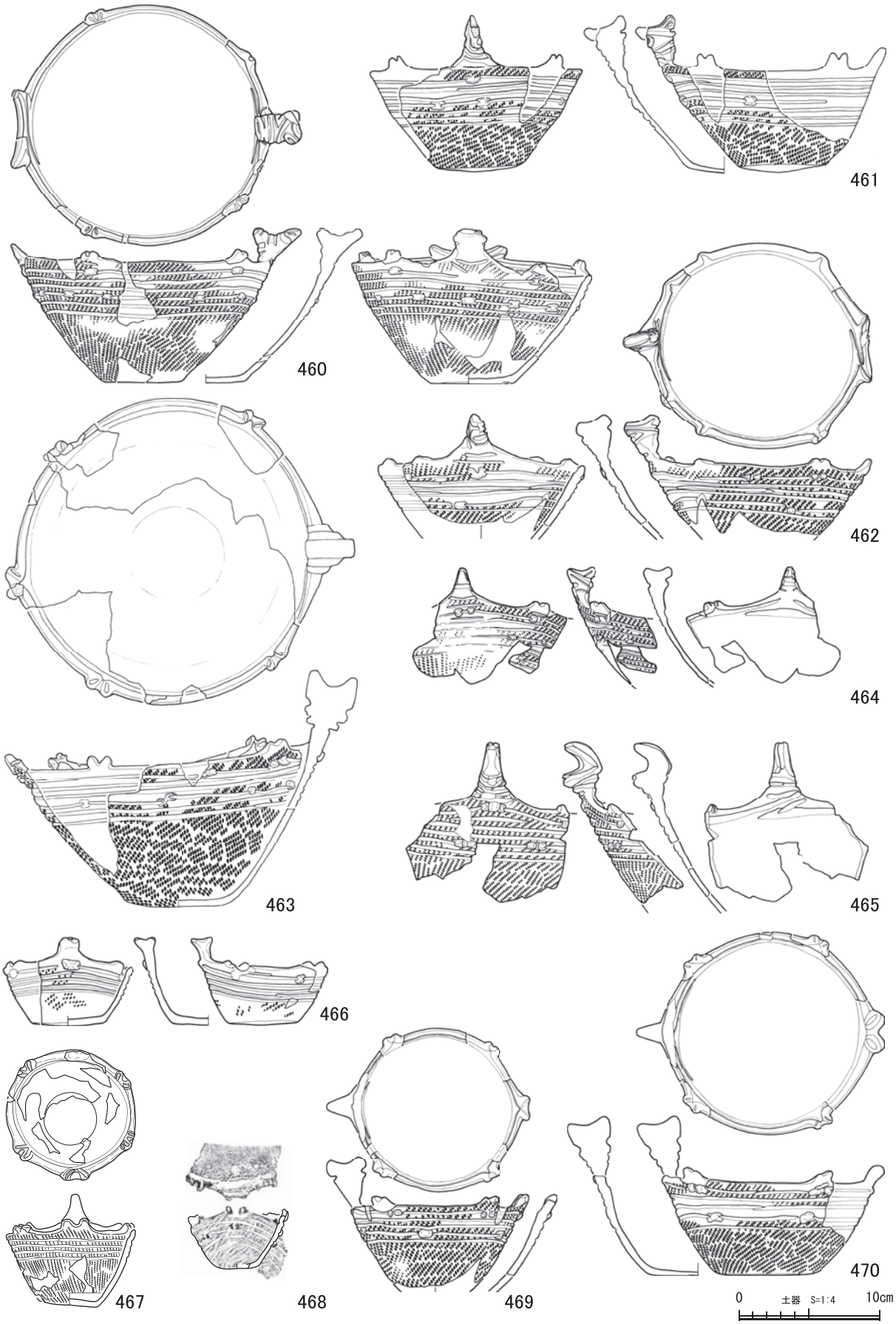
図Ⅳ-32　土器実測図 28



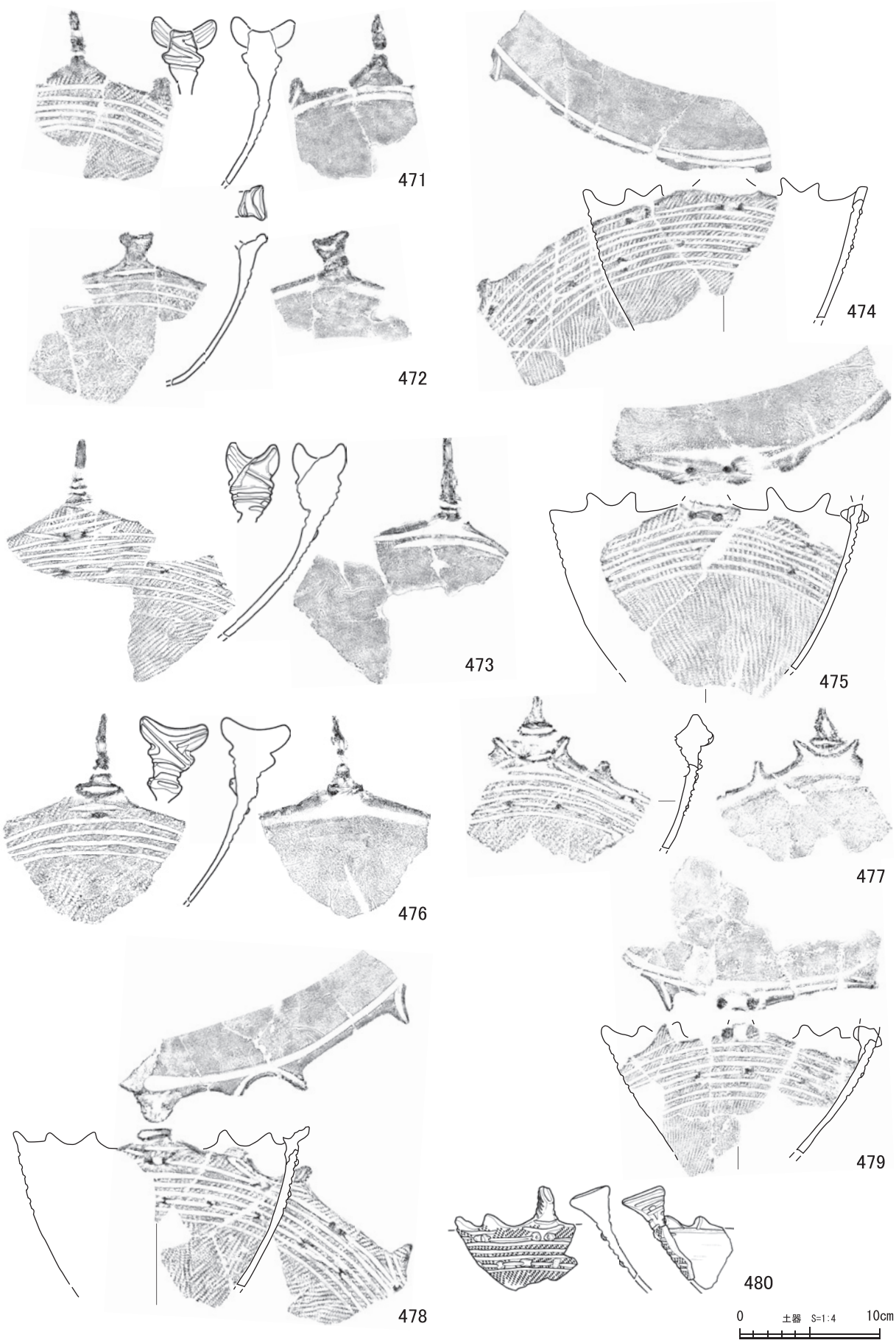
図Ⅳ-33　土器実測図 29



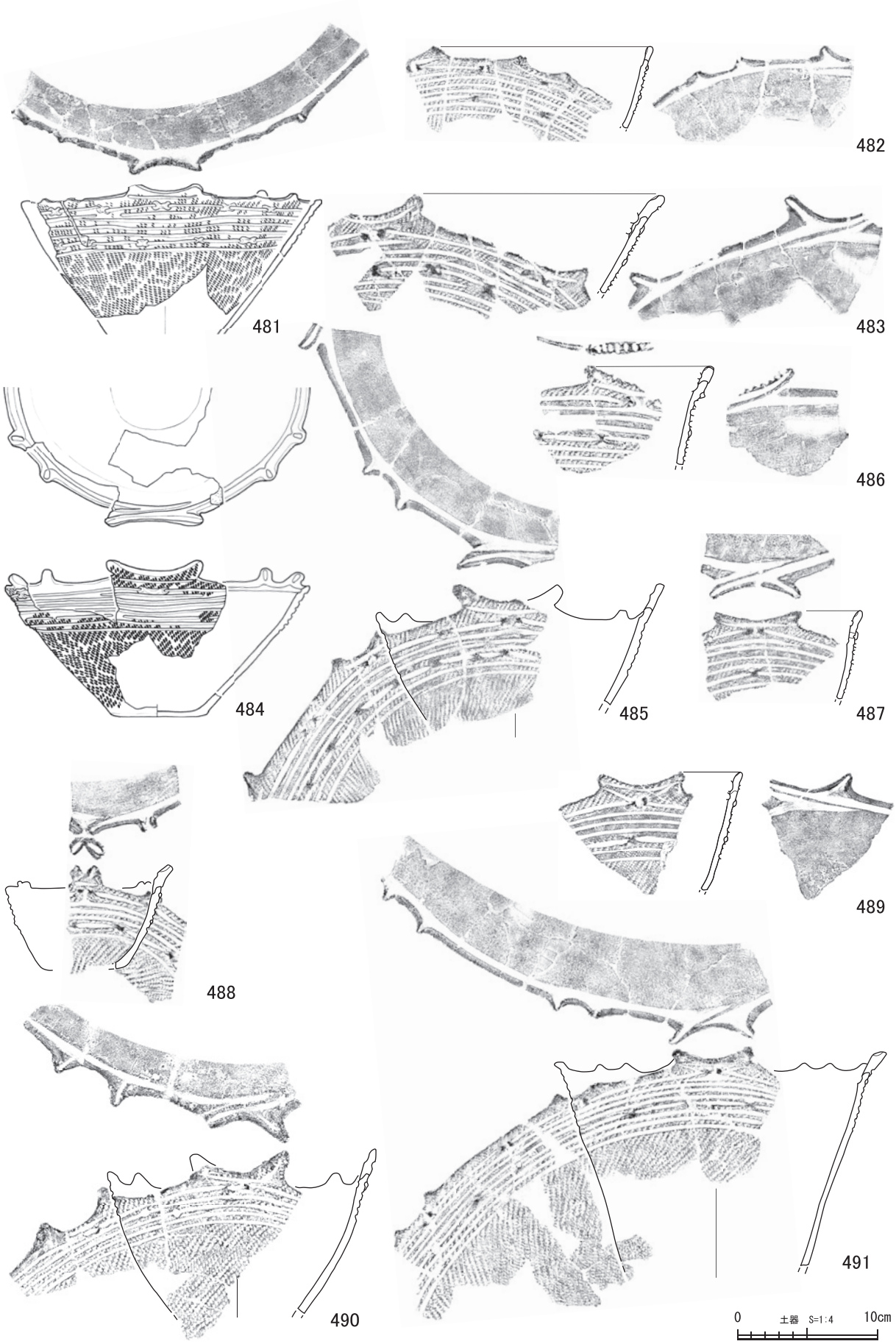
図Ⅳ-34　土器実測図 30



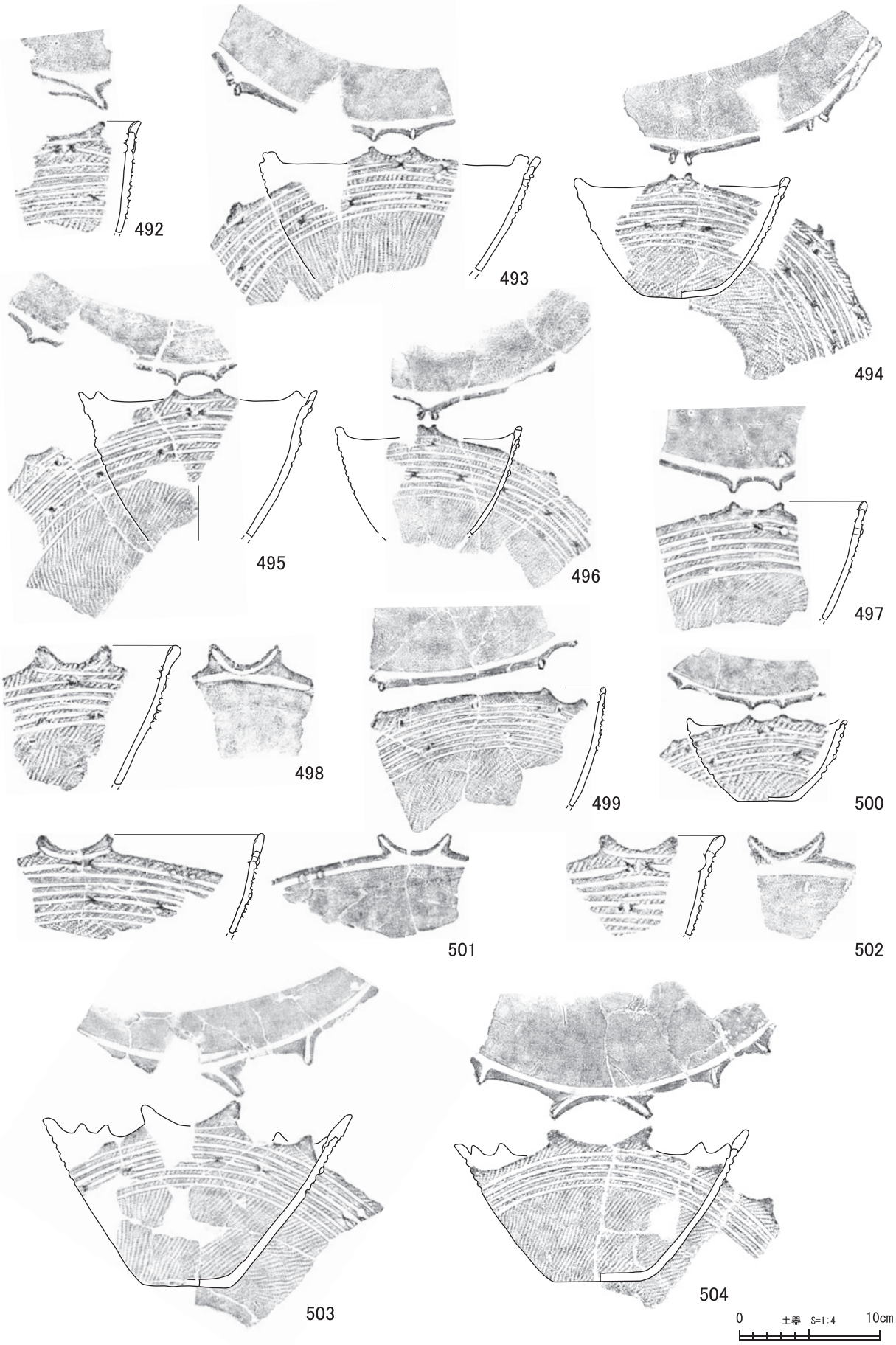
図Ⅳ-35　土器実測図 31



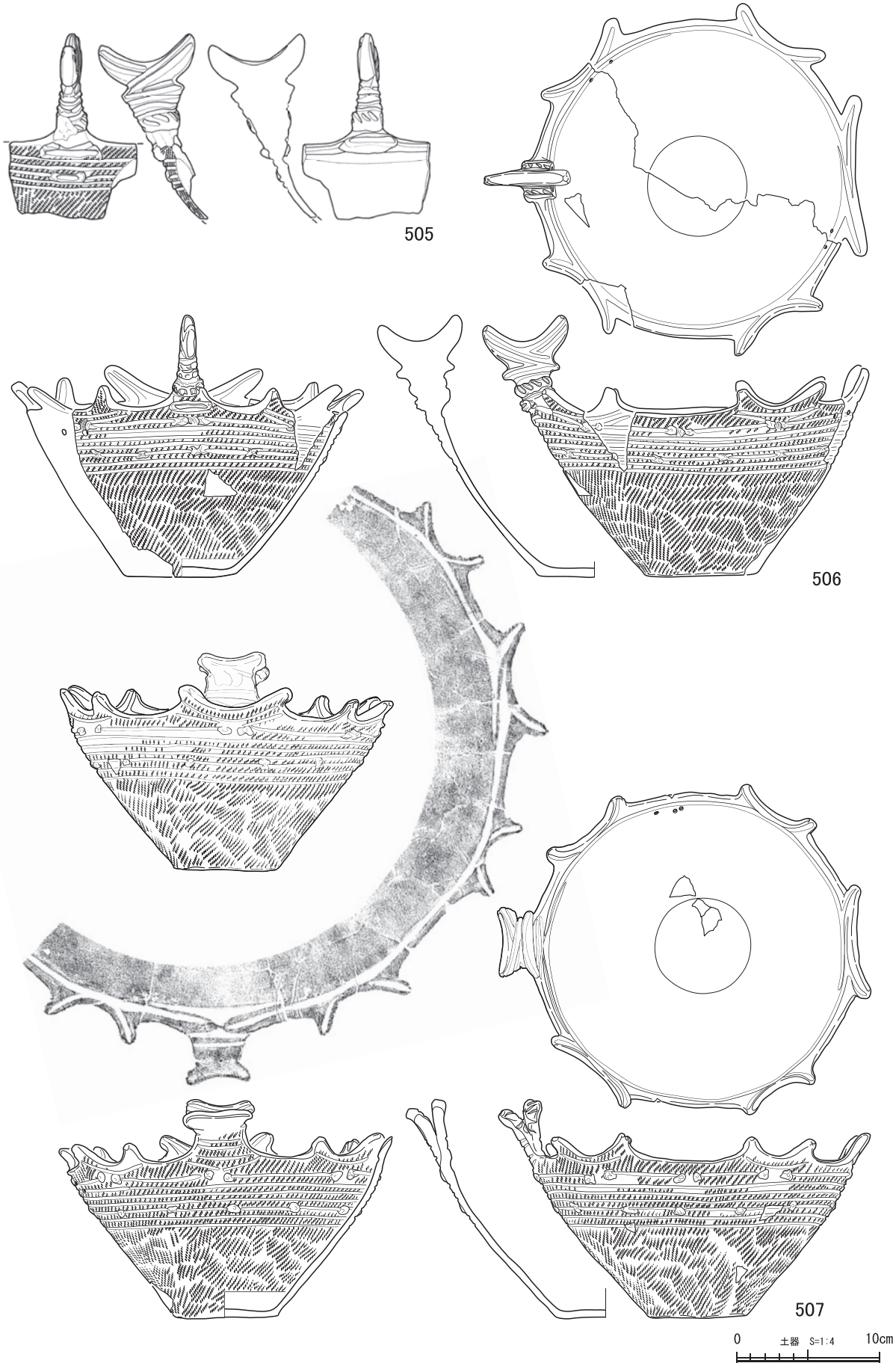
図Ⅳ-36　土器実測図 32



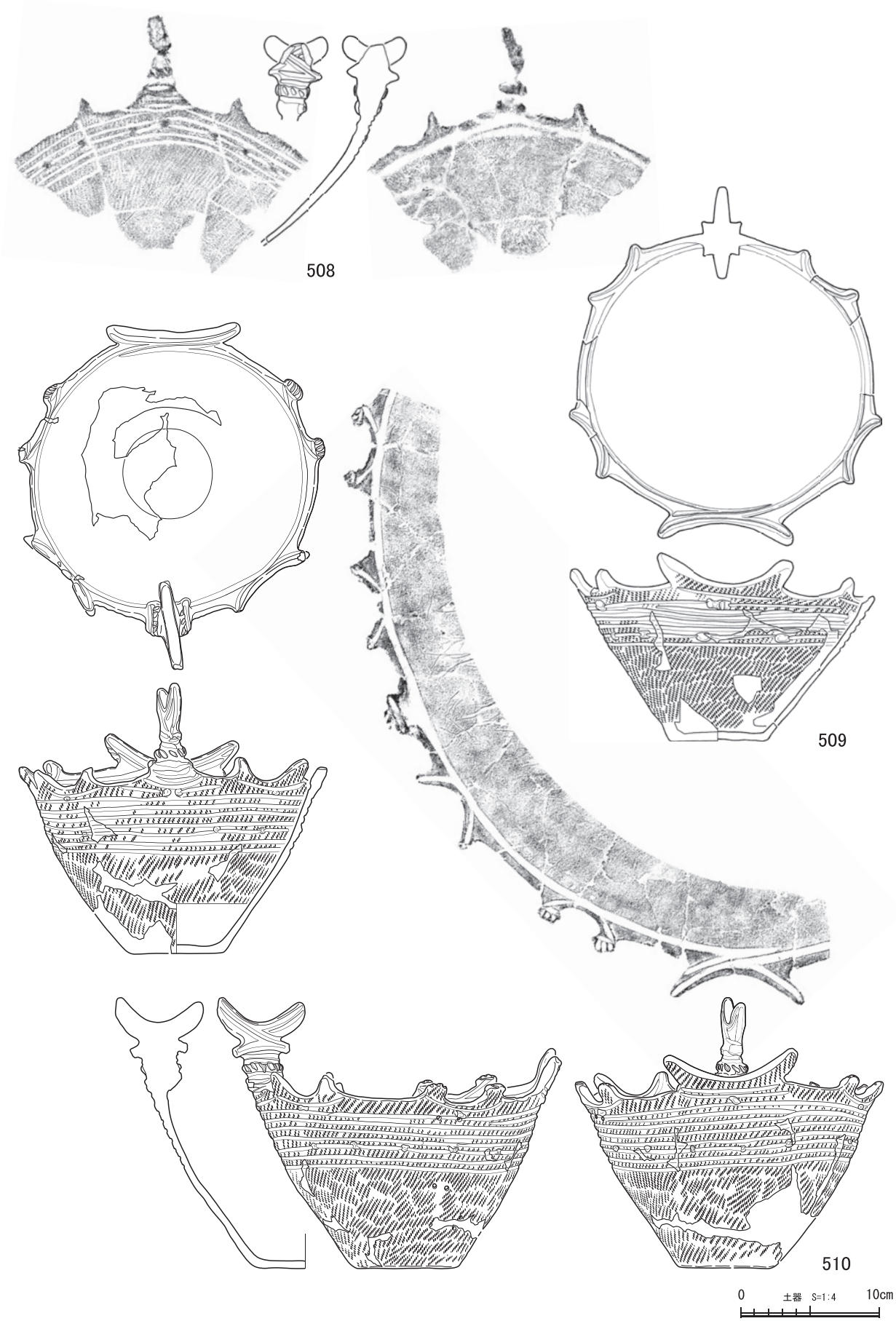
図Ⅳ-37　土器実測図 33



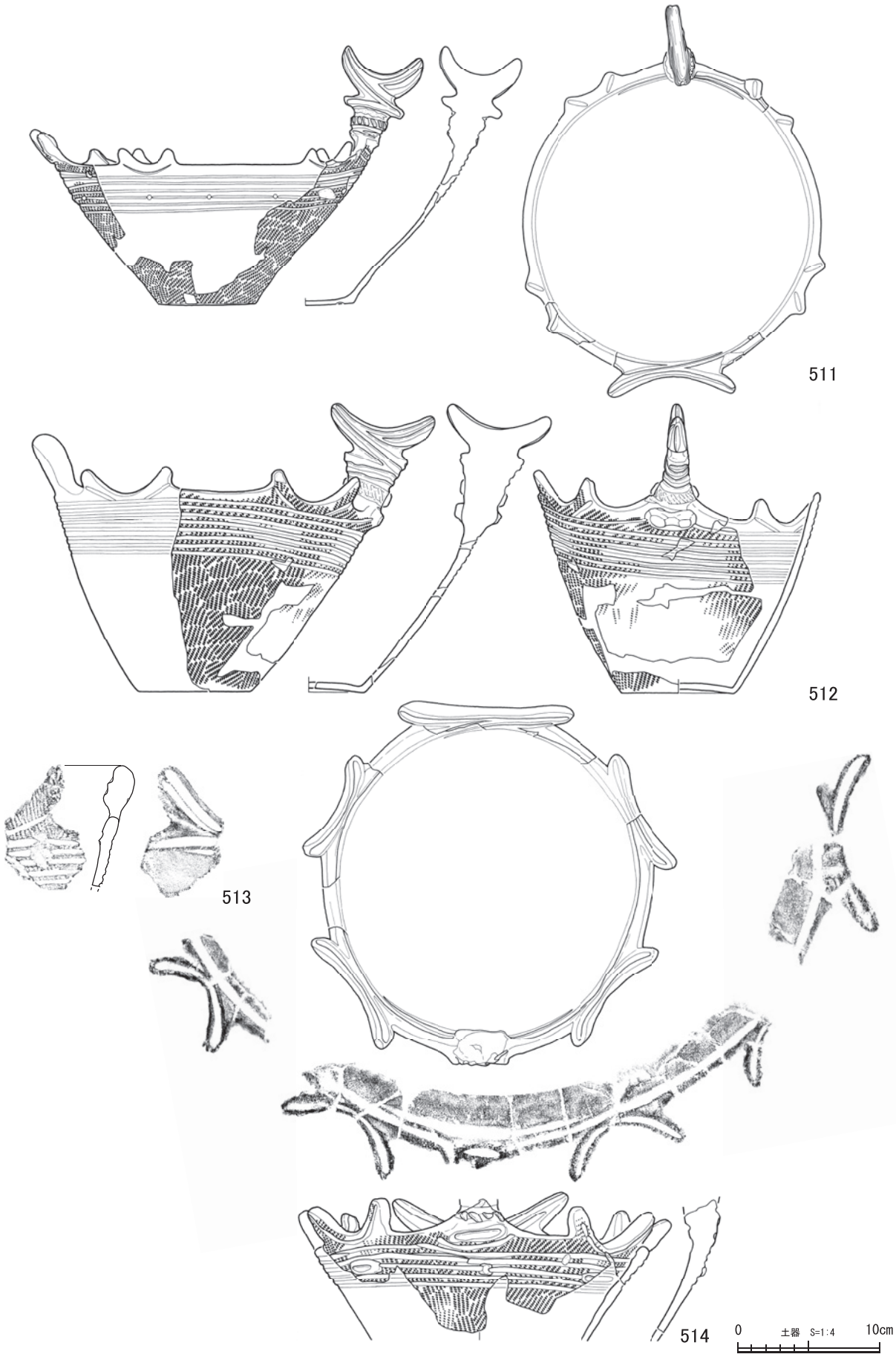
図Ⅳ-38　土器実測図 34



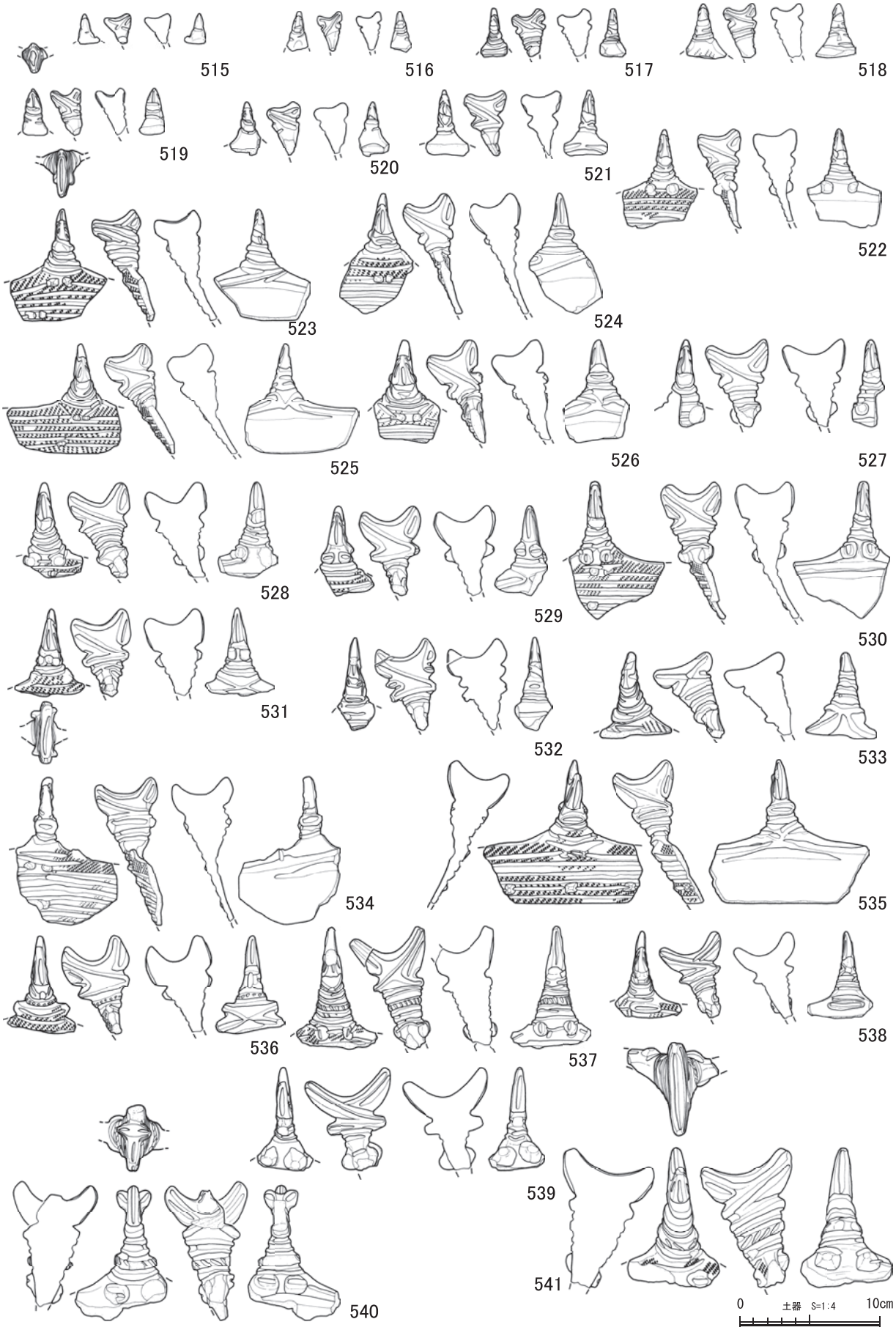
図Ⅳ-39 土器実測図 35



図Ⅳ-40　土器実測図 36

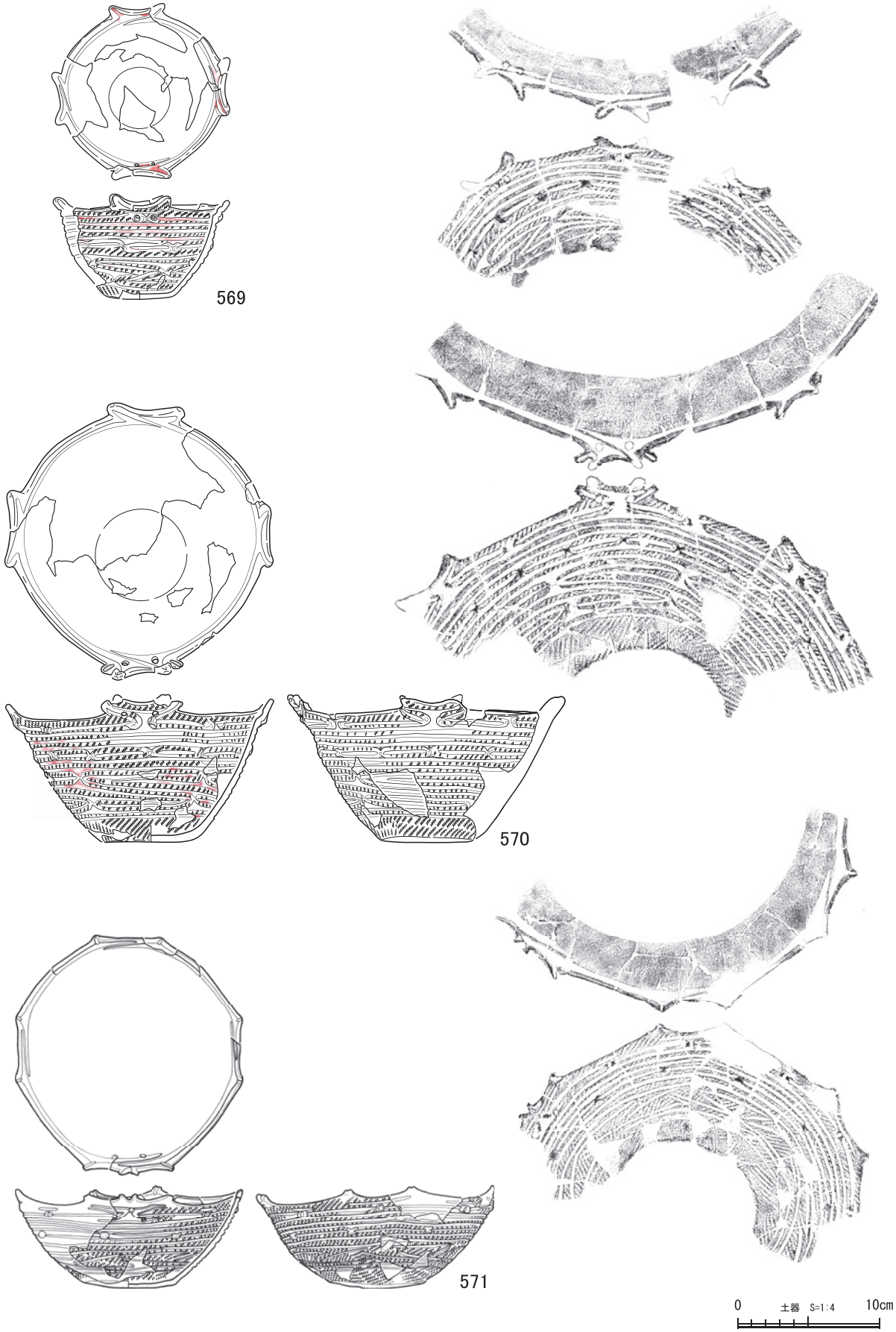


図Ⅳ-41　土器実測図 37

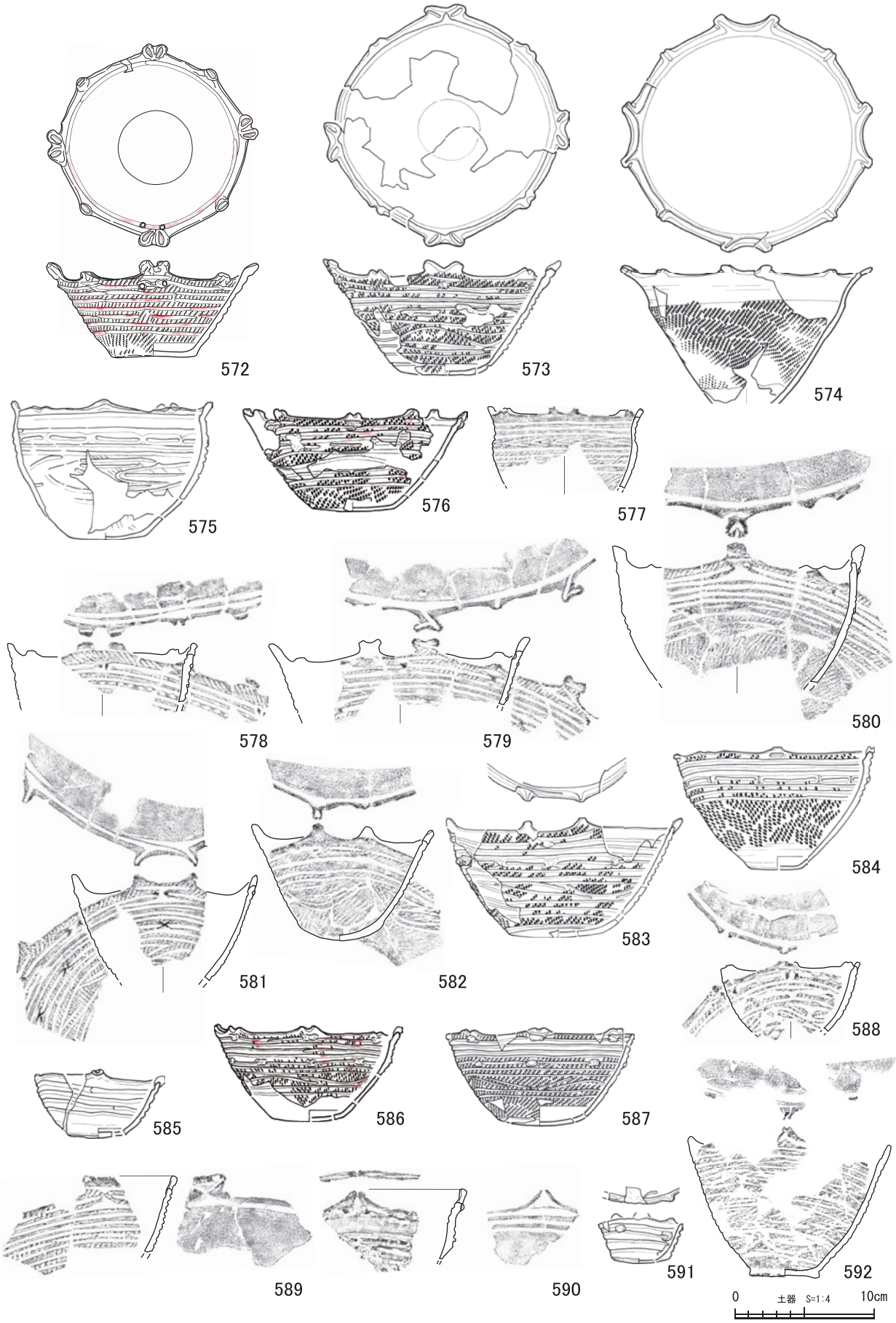


図Ⅳ-42　土器実測図 38

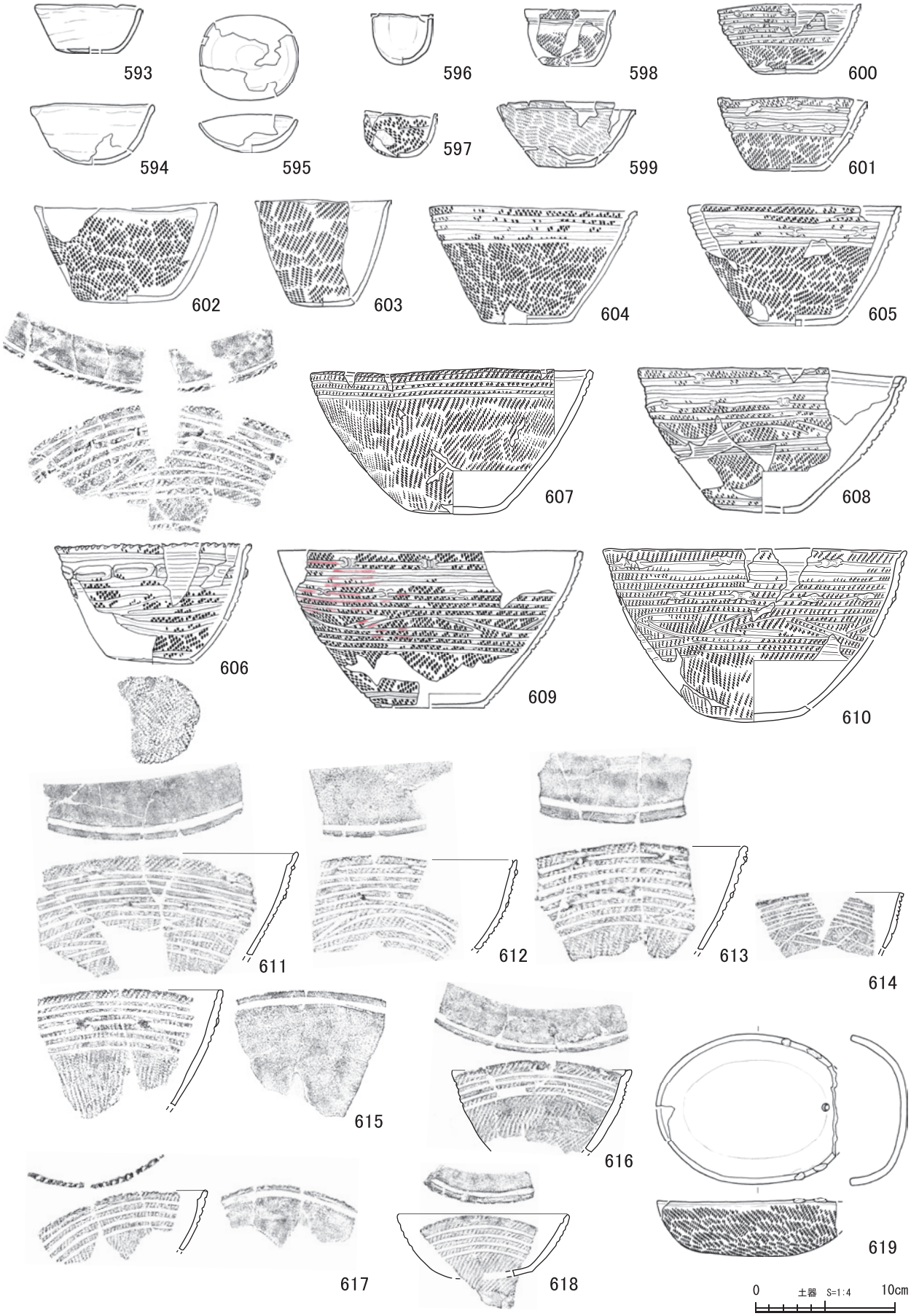
図Ⅳ-43　土器実測図 39



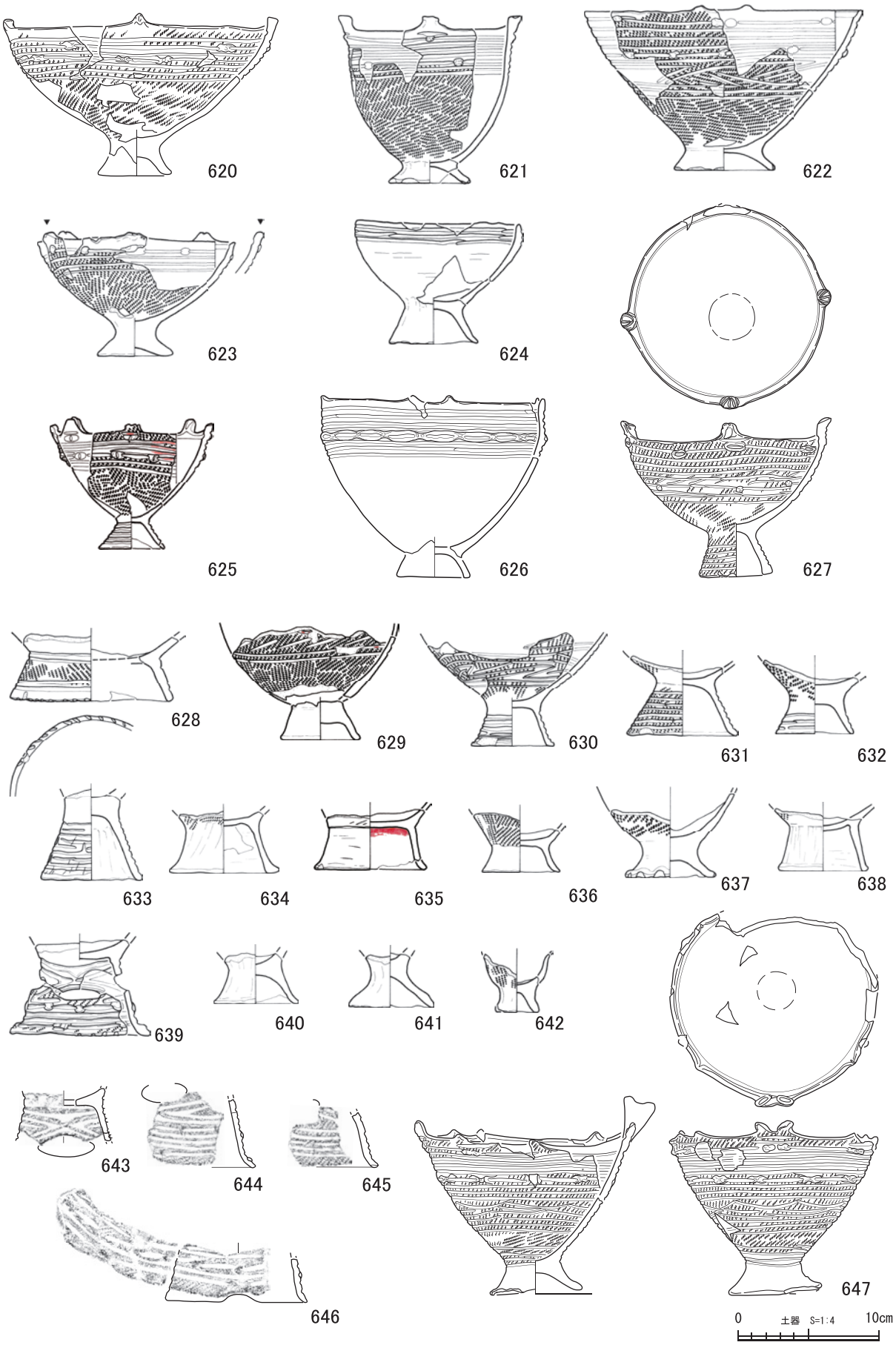
図Ⅳ-44　土器実測図 40



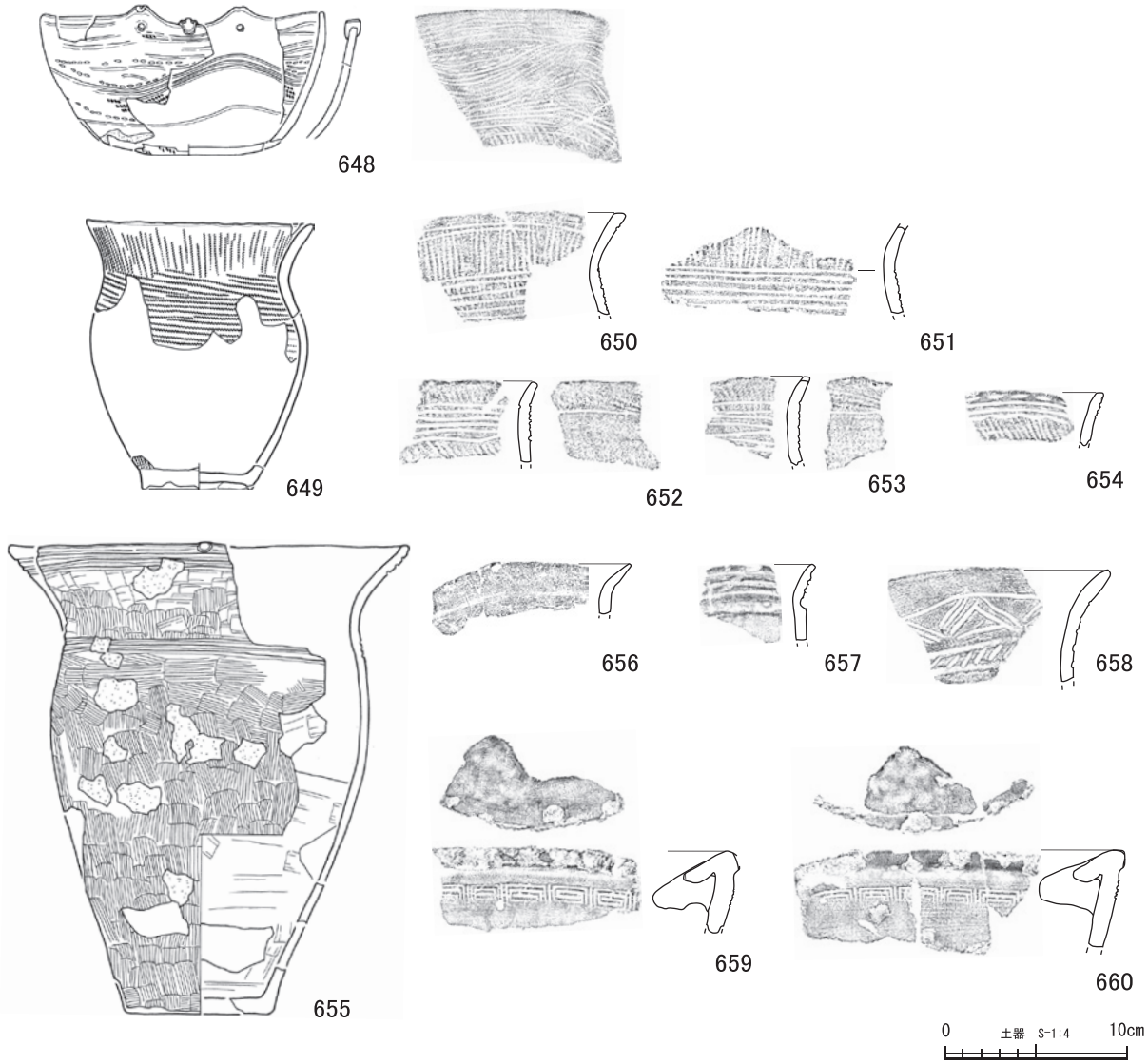
図Ⅳ-45　土器実測図 41



図Ⅳ-46　土器実測図 42



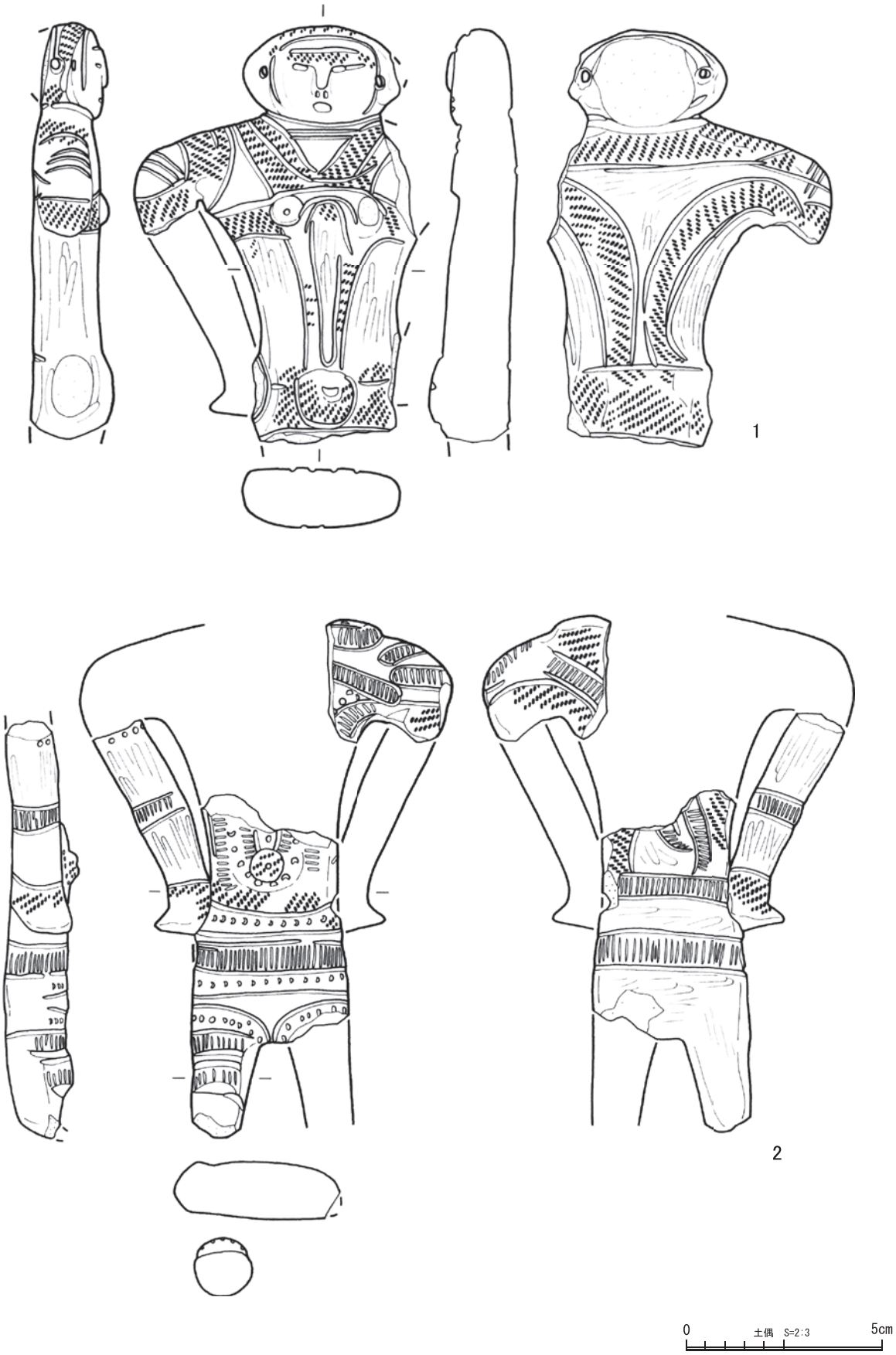
図Ⅳ-47　土器実測図 43



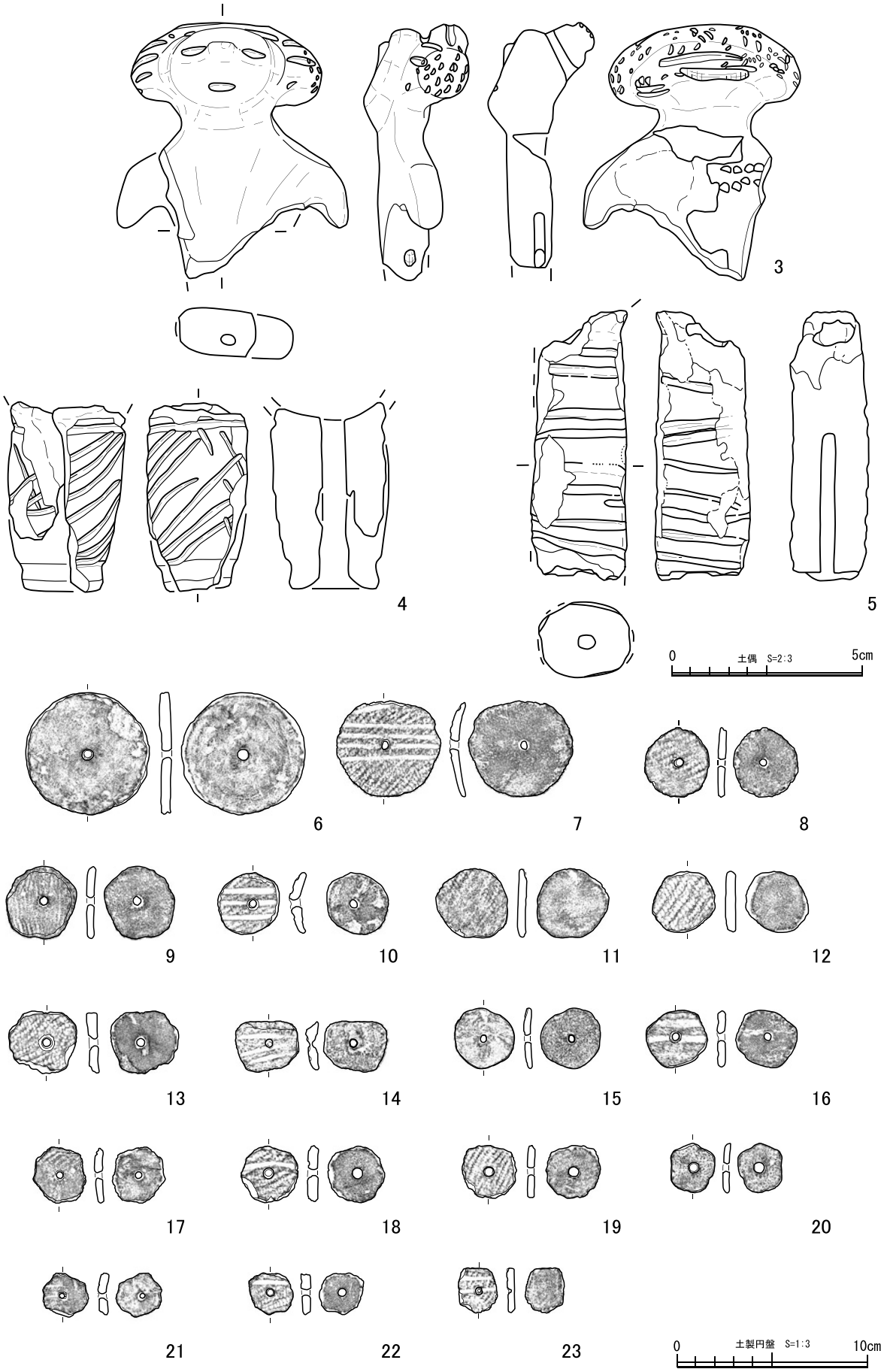
図Ⅳ-48　土器実測図 44

２　土　製　品

土製品は97点出土した。そのうちの63点が焼成粘土塊で、それ以外は、土製品２点、土偶９点、土製円盤25点である。土製品としたものの１点は、土製品５に掲載した。表採品で、表Ⅳ－２掲載土製品一覧表では土偶？としたが、集計上では土製品としている。上下とも欠損し、上部には中空状の内面の一部が残り、下部は途中まで穿孔される。断面は楕円形で、表面には横走する沈線が付されている。土偶は、縄文時代後期後葉が２体分の５点、晩期後葉が２体分の４点出土し、そのすべてを掲載した。後期後葉の土偶は、４点が斜面縁のd・e98区から出土し、土偶２の肩部が段丘上面b99区から出土している。大きさや腰に手を当てる姿勢がほぼ同じで、文様は同時期の土器の施文と共通する。晩期後葉の土偶３は頭頂部にスリットの入るアーチ状の髪結い型を有する土偶で、胴部は無文、腕は小さく省略されている。胴部中央まで下から穿孔されている。頭部がd98区、胴部はd０区から出土した。土偶４は土偶の脚部とみている。中央が縦に穿孔され、上部は中空状である。６～23は土製円盤である。すべて縄文時代晩期後葉の土器片が使用されている。６は底部片を使用したもの、11、12、14、23は穿孔のないものや加工途中のものである。



図Ⅳ-49　土偶実測図



図Ⅳ-50　土偶・土製品実測図

３　石　器

遺跡からは、剥片石器1,019点、礫石器377点、剥片28,411点、礫35,002点の合計64,809点が出土した。剥片石器の詳細は、石鏃209点、石錐95点、ナイフ類９点、ヘラ状石器10点、スクレイパー類631点、楔形石器24点、石斧34点、たたき石210点、すり石３点、砥石24点、扁平打製石器１点、石鋸44点、石錘１点、くぼみ石50点、台石・石皿10点である。

石器は図Ⅳ－51－１～図Ⅳ－69－320に掲載した。頁岩の産地である木古内町では、石材となる頁岩が豊富にある一方、火山岩に乏しいく、大型の礫が少ない傾向にある。包含層から出土する礫は、長径10～20㎝の円礫が多く、それらを利用した礫石器類が多い。そのためか、剥片石器が大きく、礫石器が小さい傾向がある。掲載した石器類は剥片石器、礫石器とも２分の１にしている。

出土する石器の時期は、土器が多数出土するエリアで同様に石器類も出土するため、最も多くの破片を検出した縄文時代晩期後葉、次いで晩期前葉に伴っている石器群の可能性が高い。

石器１～109は石鏃である。細身で縦長の有茎鏃が目立つなか、無茎鏃が４点図（石器１～３、27）、ひし形状のものが18点（石器４～21）、作りの荒い木の葉状のもの４点（石器51・22～25）、などが混じる。石器２などは、頁岩製だが基部が燕尾形であることなど、同時期の道央部の石鏃の形態に似る。道央部との関係も深い時期で、石鏃には黒曜石製のものが約１割混じる（石器４、５、６、15、31、47、59、72、92）が、有茎の細身の形状のものは少ない。また、黒曜石に関しては、赤井川産や白滝産のものが多く混じるようである。また、アスファルトが付着するものも17点（石器３、19、26、28、32、45、50、58、65、68、76、81、86、88、100、104、107）あり、基部だけでなく先端部にまで付着するものもあった。図中ではアスファルト付着部にグレートーンを重ねている。102はメノウ製で、他の石鏃より幅や長さが大型である。108は長さが56㎜あり、出土した石鏃中で最長である。

石器110～171には石錐を掲載した。形態では、棒状のもの、つまみが付くもの、剥片の一端に尖頭部を作りだしたものなどがある。125は基部にアスファルトが付着する。棒状のものと、つまみが付くものの境は微妙であるが、131～134のように比較的丁寧なつまみの加工があるものは、縄文時代後期後葉のものに似る。170は先端部の残片だが、土器に補修孔を空けたとみられる擦痕がある。原形は169のような厚みのある尖頭器状のものだったとみられる。171も石鏃の未成品にも見えるが、基部の両側に補修孔を空けたときに付いたとみられる擦痕が付き、基部の外形が170と同じである。

172～178はナイフ類である。中でも174～176はつまみ付きナイフで、175は加工の丁寧さから縄文時代前期のものかもしれない。173、177、178は両面調整のナイフである。

179～188はヘラ状石器である。晩期中葉から後葉の聖山遺跡でみられた、縦長の剥離調整で浅い角度の刃部をもつ例はなく、片面調整の深い角度の刃部のものがあり、様相が異なる。179の腹面は、古い剥離面のような光沢がある。183は緑色片岩製で、腹面に擦痕がある。188は玄武岩製である。

189～258はスクレイパー類である。使用痕、加工痕のあるものすべてをまとめている。縦長剥片の長い縁辺に刃部を付けたもの、側面から端部に深い角度の刃部を付けたものなどがみられる。259～265は楔型石器である。両極からの力が加わった剥片を丹念に探したが、聖山遺跡のように多量にはみつからなかった。266、267は石核である。どちらも頁岩の円礫を割ったものである。加工のない頁岩やメノウの円礫は、原石とも考えられるが、礫に分類し集計した。268～284は石斧である。刃部片、基部片、擦切りの残核も含まれている。掲載した石斧の半分近くに擦切り加工の痕跡がある。271、274のような基部が擦切り面に傾斜するものは、刃部が減って短くなった275の様な石斧を、縦に二つに切って使用した可能性もある。270は後期後葉の副葬品にみられる石斧に形状が似る。272は縦長の泥岩に刃部を付けたものである。285～294は石鋸である。粘板岩製のものが多く、石斧の加工に使用

されたものとみられる。288は石刃片の可能性も考えたが、石刃類は出土していないとみた。295は扁平打製石器である。後期前葉の遺物が多かった札苅６遺跡で多く出土していたことなどから、後期前葉のものと考えられる。296～305は敲き石である。敲き石には円礫の一面を執拗に使用しているもの（石器296～299）と、楕円形の扁平礫などの端部を多少使用したもの（300～305）の２種類がみられる。306～314はくぼみ石である。唯一珪岩製の307は、晩期前葉の土坑から出土したもの、そのほかはすべて柔らかい泥岩製である。306には擦痕とは異なる傷が残る。315は唯一石錘としたもの。側断面が方形に近い礫の端部付近の周囲の角に敲打を加え、縄の溝を作ったものと考え、石錘とした。石材は頁岩で、このような石錘に類例があるのかは不明であが、出土状況から縄文時代晩期の遺物とみられる。316～320は砥石・石皿で凝灰岩、砂岩せいのものである。318には石器などが擦れたとみられる擦痕がつく。317は両面を薄くなるまで研磨で使用し割れたもの。316、319、320の表面には研磨の痕跡が残る。掲載した石器類の個々のデータは表Ⅳ－３掲載石器一覧の記載している。

４　石　製　品

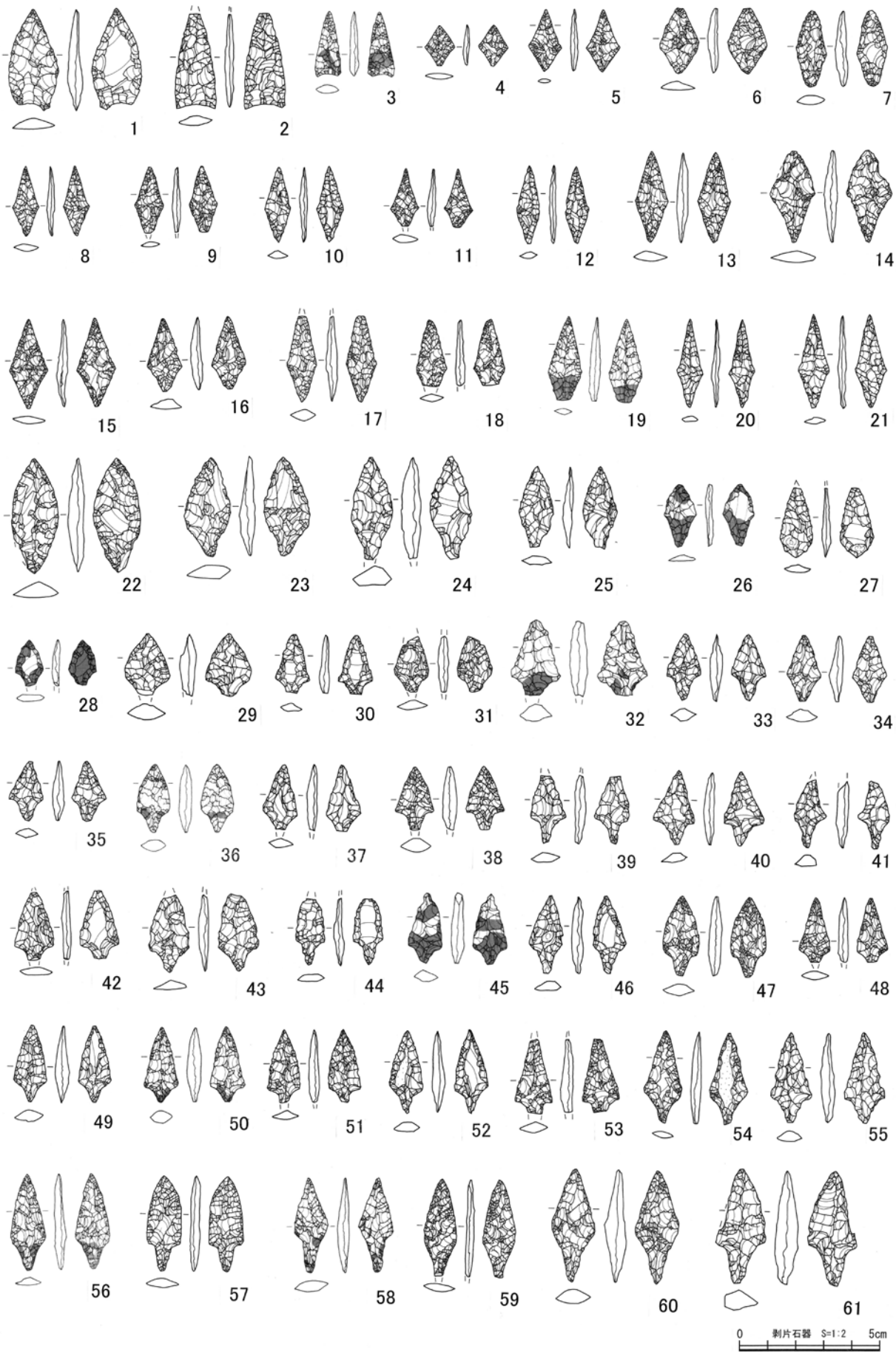
図Ⅳ－70－１～13には石製品を掲載した。１～７は緑色凝灰岩製の平玉である。これらの平玉は出土状況から、すべて晩期後葉のものと考えられる。２はe98区の標高3.17mで、晩期後葉の土器530の破片わきから出土した。３～６はd98区の標高3.15m前後で晩期後葉の土器500の破片上で４点がまとまって出土した。７は、c94区の土器324のわき、標高6.44mで最初に見つかった玉で、その後、周辺の調査の際に廃土を回収し水洗したが、みつかった平玉が１のみであった。

８はb１区出土の礫を分類中にみつけたもので、半分は欠損する。泥岩製で、中央の凹んだ自然石の表面を面取り加工し、複数の穿孔を施し、ボタン状の製品に近いものに加工したものとみられる。b１区では晩期前葉の遺物が多量に出土していることから、同時期のものである可能性がたかい。９はd96区の礫を整理中に、緑色の目立った本品を注視したところ、自然石に穿孔しようとした痕跡がみつかったもの。10はb０区の出土で、棒状の泥岩の一端にすす状の黒ずみが付着し、その中に紐などを巻いた痕跡が残っていたもの。小さな石錘かもしれない。11は石棒片である。横断面は紡錘形で、被熱しており細かく割れた破片はe98～e１区、d２区に広く散在して出土した。石棒は晩期後葉には出土例が少なく、石棒片の散らばる範囲は、後期後葉や晩期前葉の土器がまとまって出土した範囲と重なることから、そのいずれかの時期のものと考えられる。

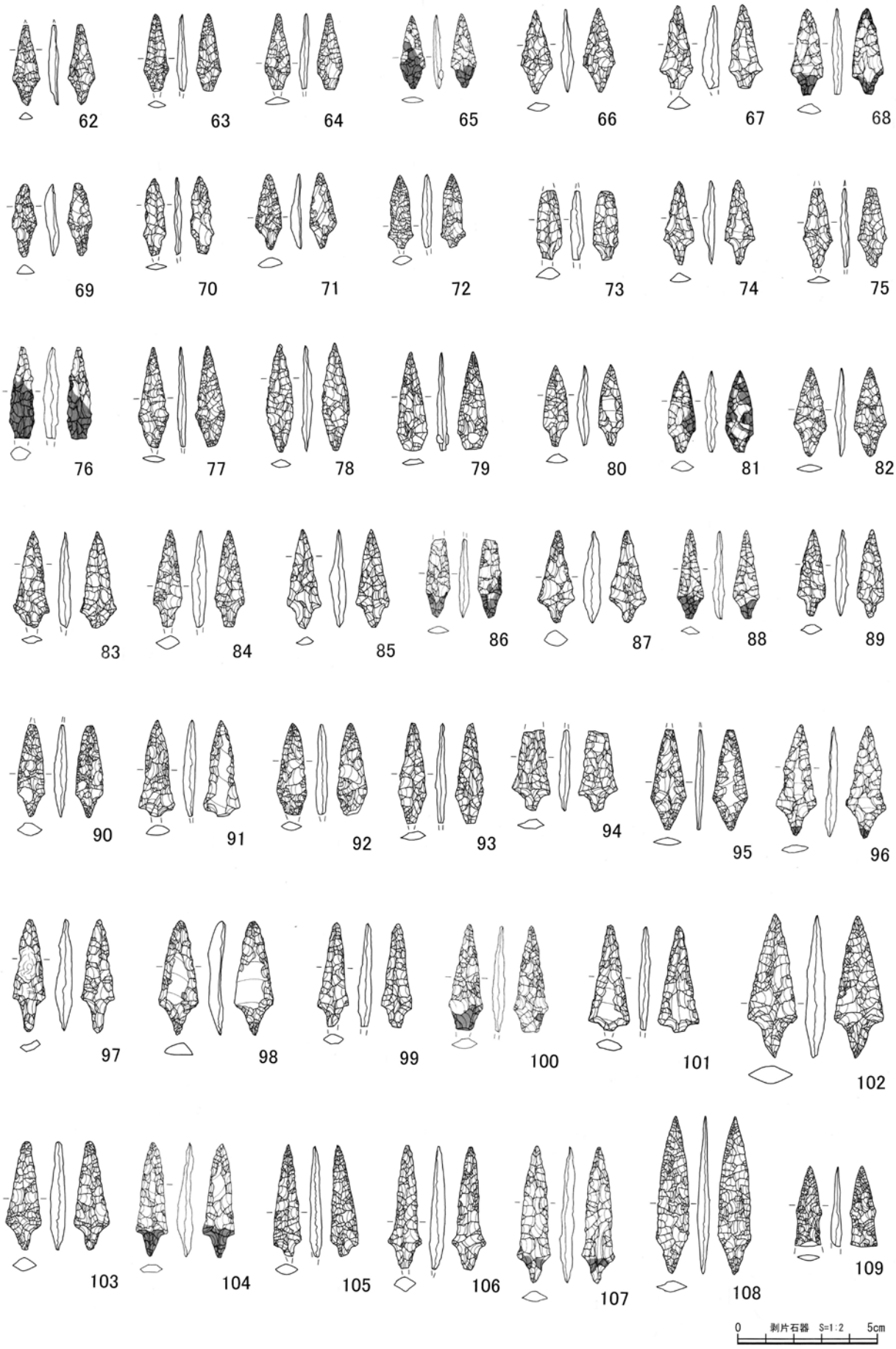
12は滑石製の石筆である。尖らせた先端部はクレヨンの先端と似たすり減りかたをする。13は粘板岩製の石板である。薄く加工し、両面に擦痕などがみられる。石鋸と同じ石材を使用しており、当初は石鋸としていたが、縁の加工が直線で両面を磨き薄く加工しているところが、新しいものとみられ、石板と判明した。石筆は現在も販売されているが、この石筆と石板はセットとみられる。これらのものは、紙（ノート）や鉛筆が普及する以前に、教育現場で使用されていたもので、主に明治期に使われていたものとみられる。

５　漆　製　品

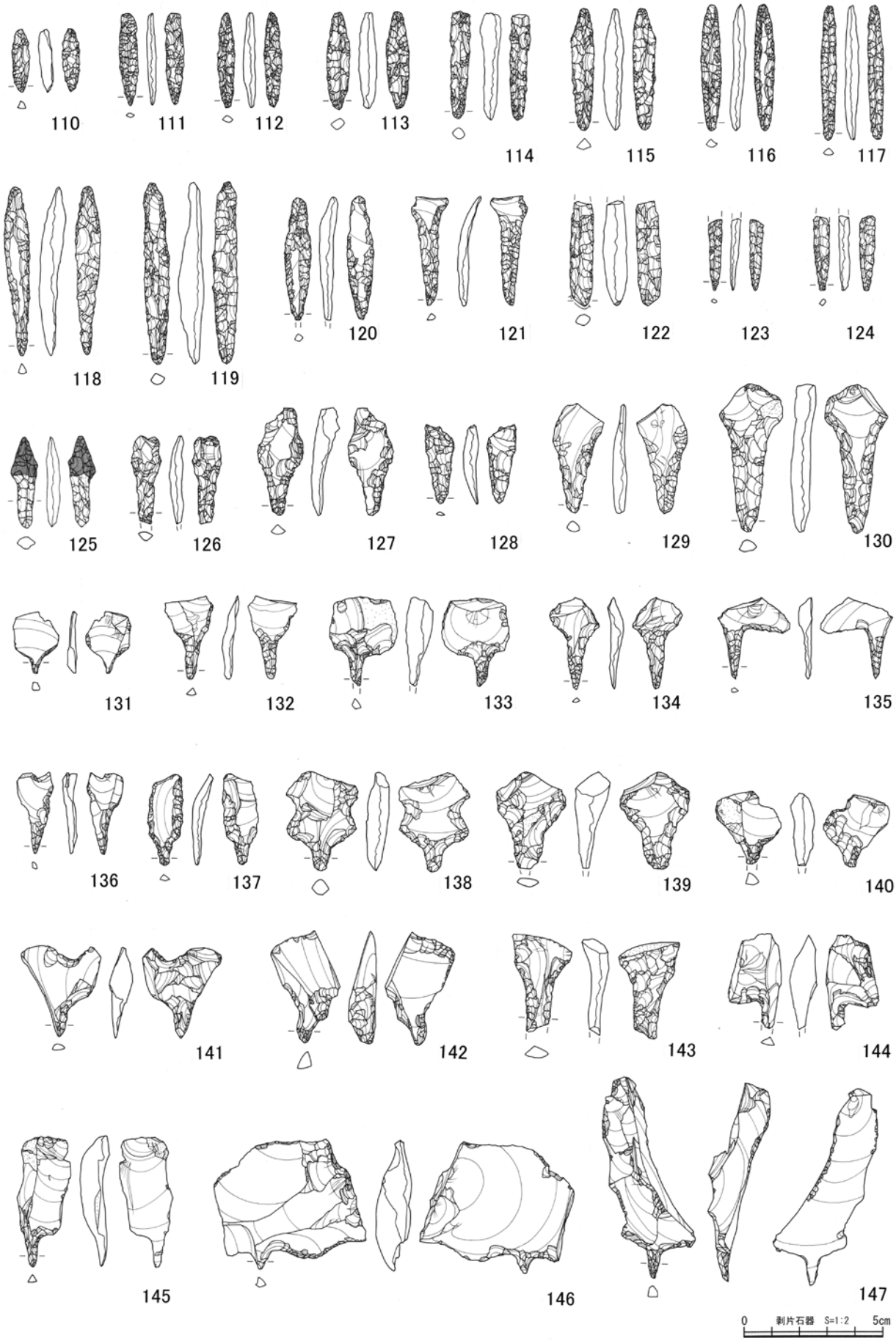
図Ⅳ－70－14～16にはd97区Ⅲ層から出土した漆製品を掲載した。斜面裾の晩期後葉の包含層から礫や土器片が出土する間から破片が検出されている。３片は、約50㎝の間隔で並んで検出されており、同一製品の破片である可能性もある。木質部は失われ、塗膜だけが残ったもので、土ごと取り上げ、固めている。色調は、一部に赤色部分があるが、全般に赤黒い。時期は周囲の遺物と同時期の晩期後葉のものとみられる。


1
2
3
4
5
6
7
8
9
10
11
12
13
14
15
16
17
18
19
20
21
22
23
24
25
26
27
28
29
30
31
32
33
34
35
36
37
38
39
40
41
42
43
44
45
46
47
48
49
50
51
52
53
54
55
56
57
58
59
60
61
0　剥片石器　S=1:2　5cm

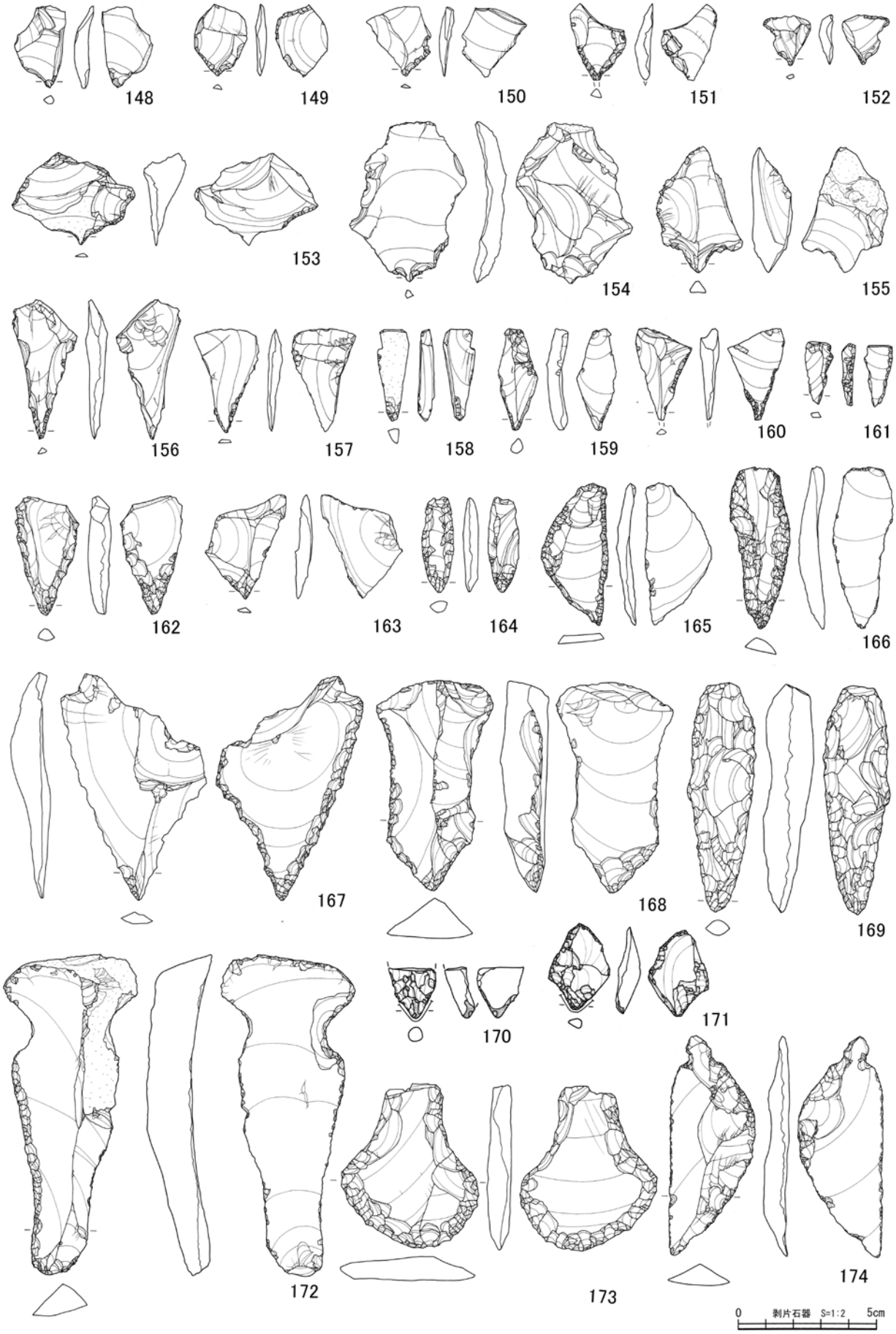
図Ⅳ-51　石器実測図１


62
63
64
65
66
67
68
69
70
71
72
73
74
75
76
77
78
79
80
81
82
83
84
85
86
87
88
89
90
91
92
93
94
95
96
97
98
99
100
101
102
103
104
105
106
107
108
109
0 剥片石器 S=1:2 5cm

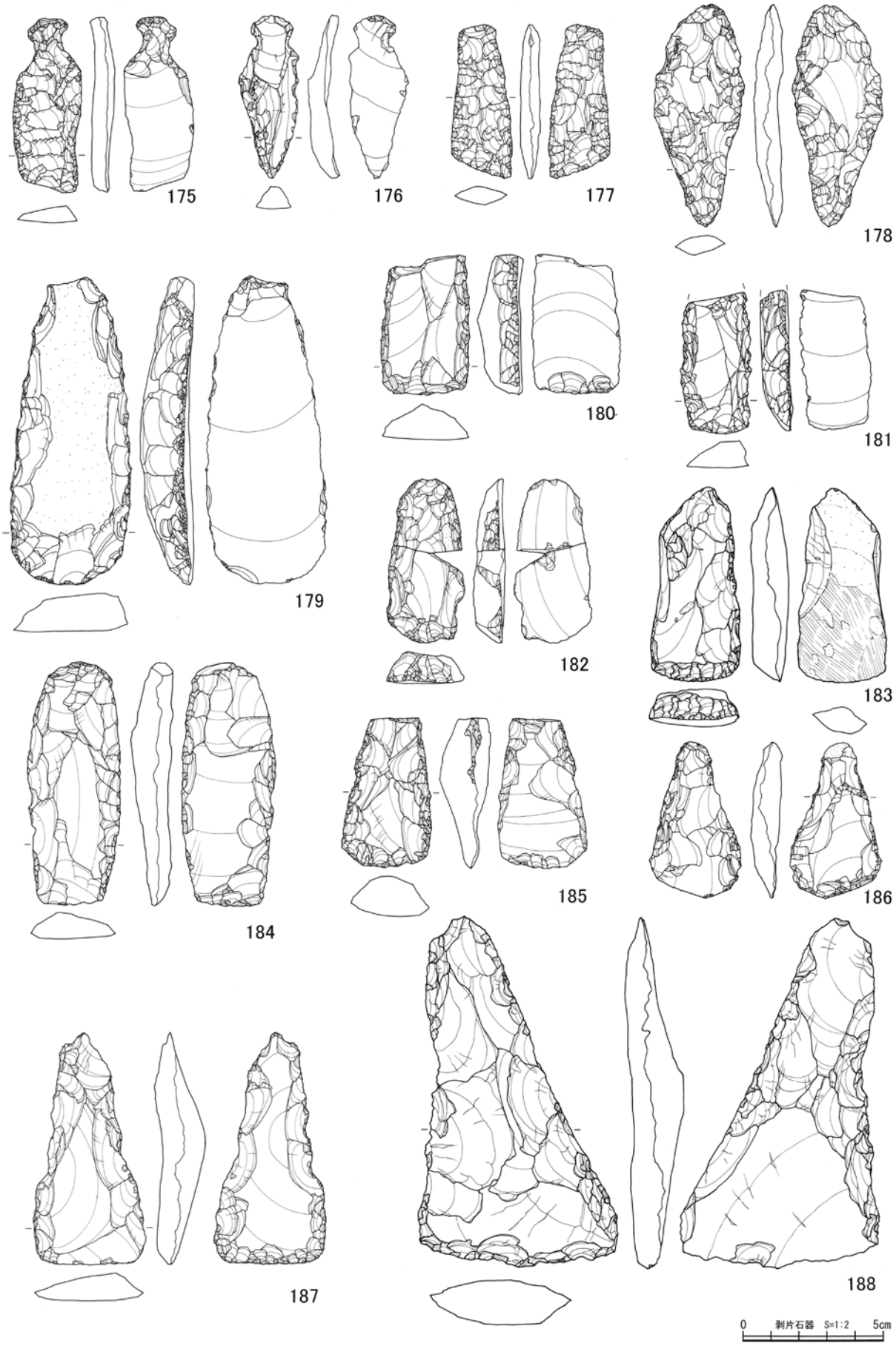
図Ⅳ-52　石器実測図２


110
111
112
113
114
115
116
117
118
119
120
121
122
123
124
125
126
127
128
129
130
131
132
133
134
135
136
137
138
139
140
141
142
143
144
145
146
147
0　剥片石器　S=1:2　5cm

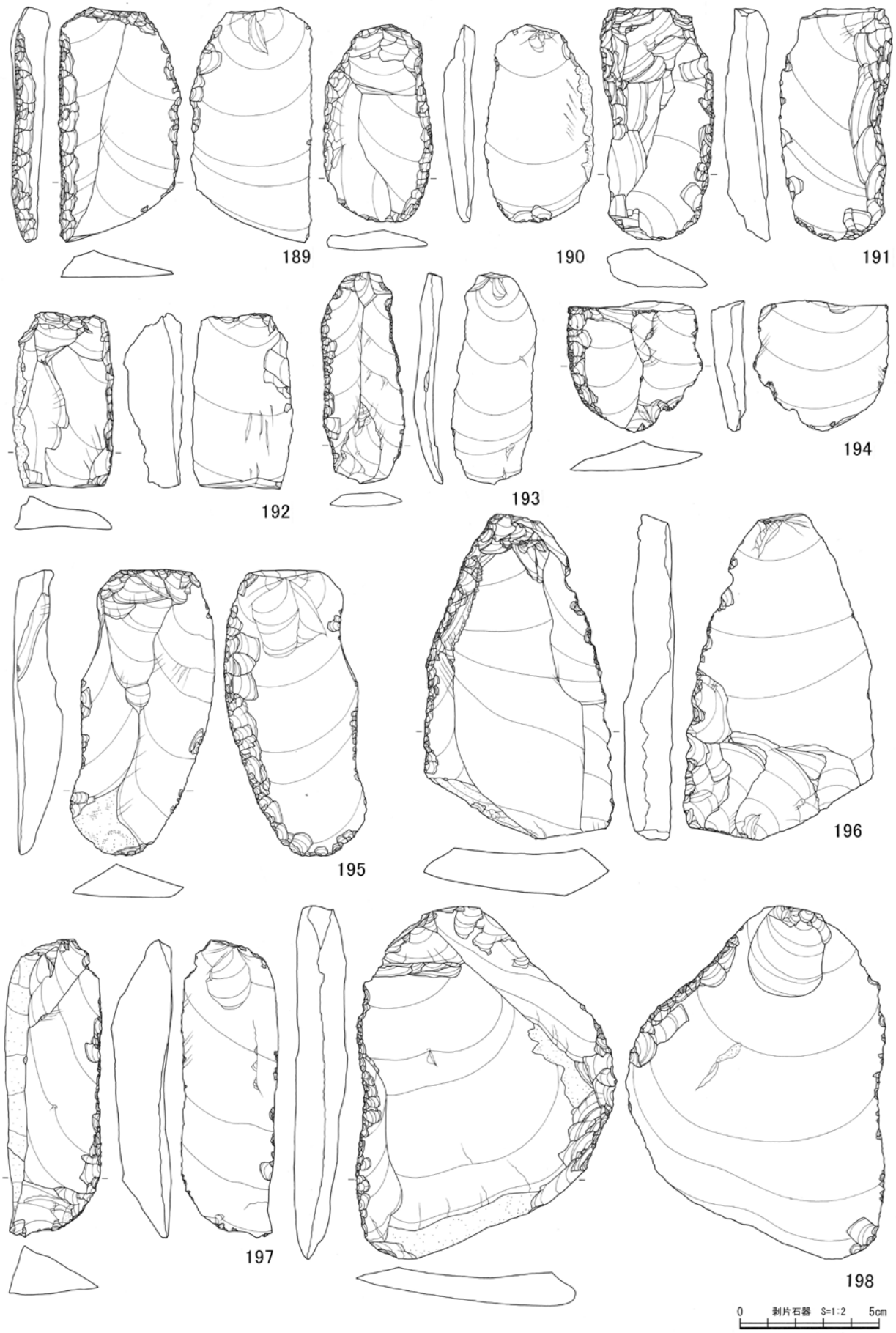
図Ⅳ-53　石器実測図３


148
149
150
151
152
153
154
155
156
157
158
159
160
161
162
163
164
165
166
167
168
169
170
171
172
173
174
0 剥片石器 S=1:2 5cm

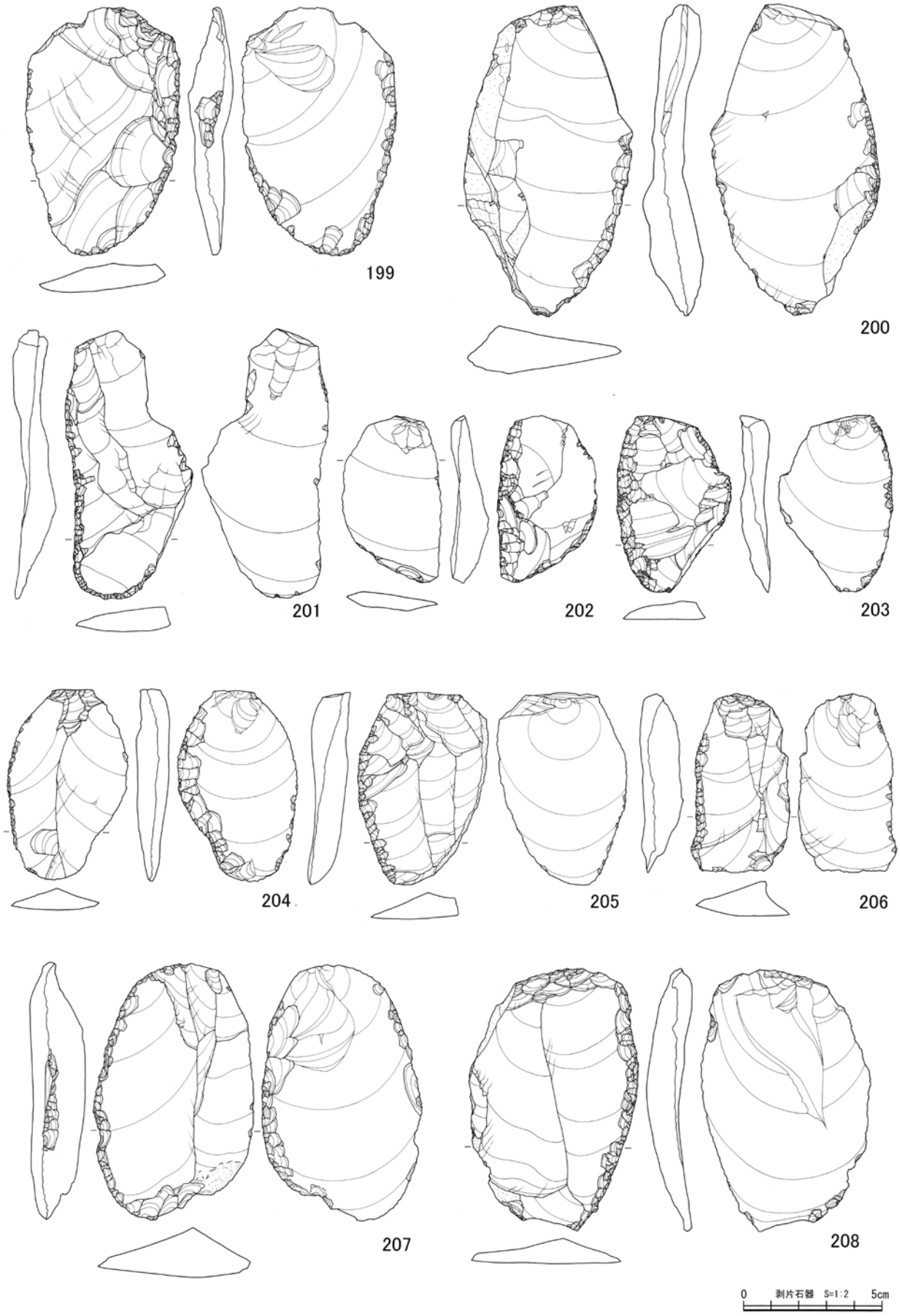
図Ⅳ-54　石器実測図４


175
176
177
178
179
180
181
182
183
184
185
186
187
188
0　剥片石器　S=1:2　5cm

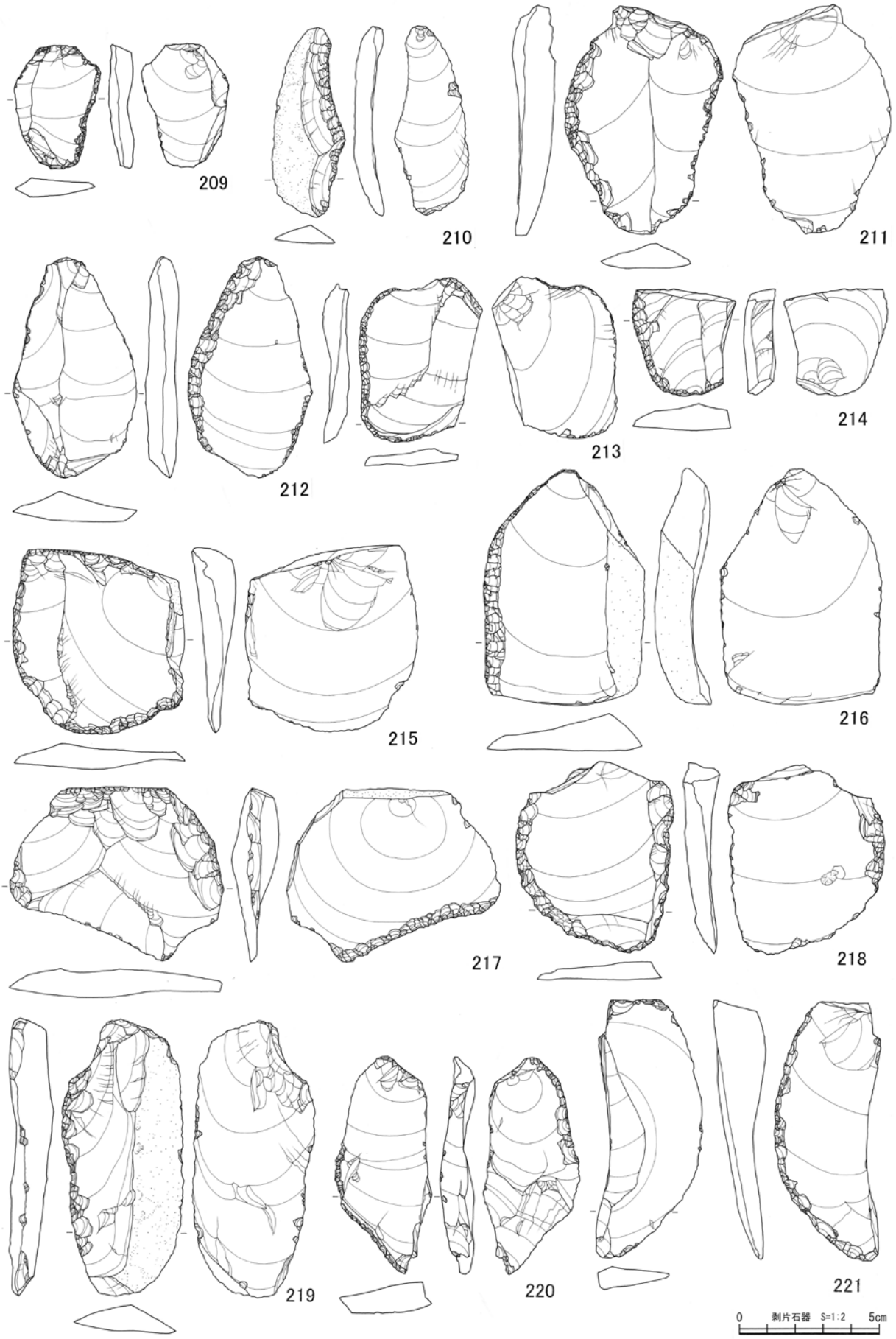
図Ⅳ-55　石器実測図５



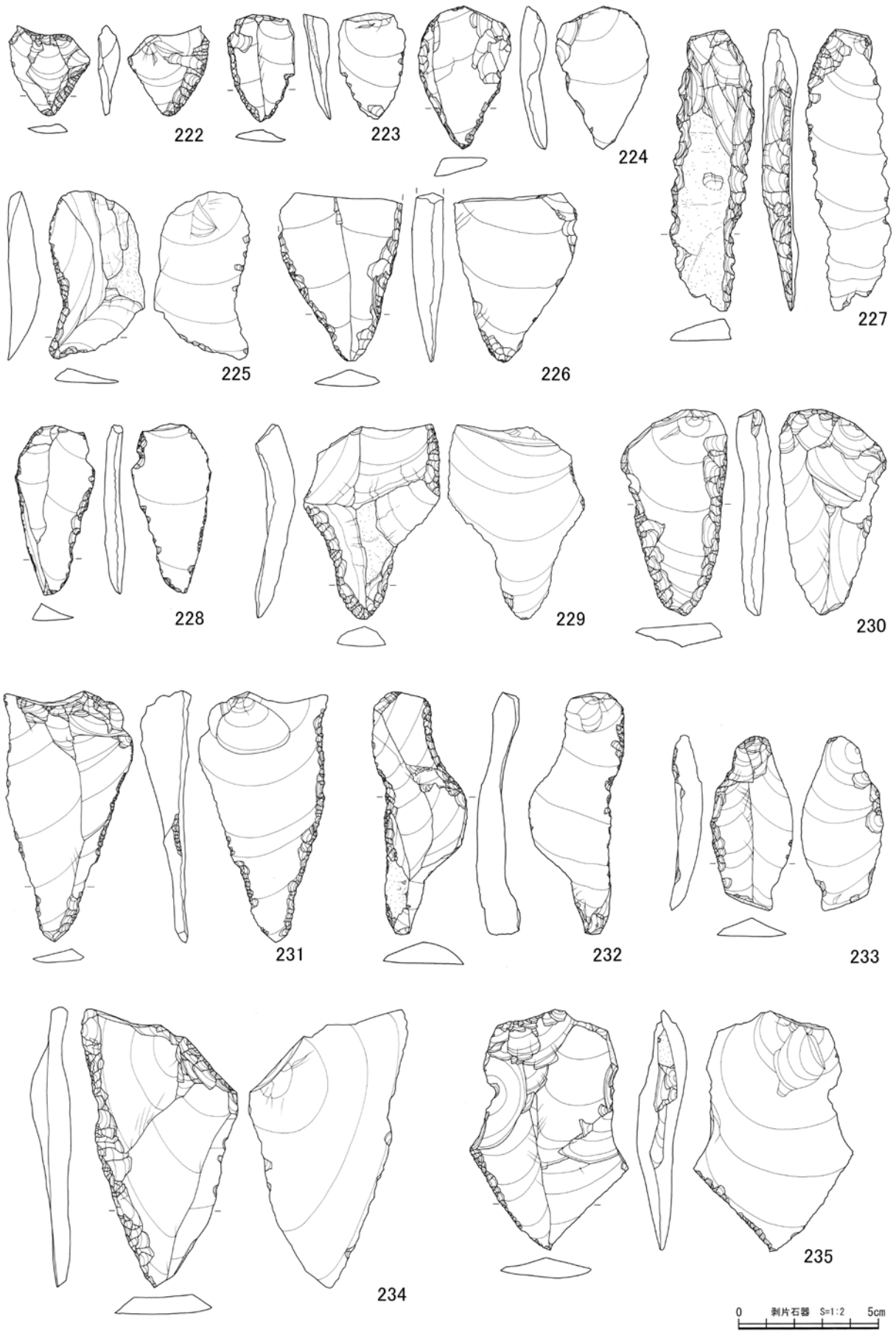
図Ⅳ-56　石器実測図６



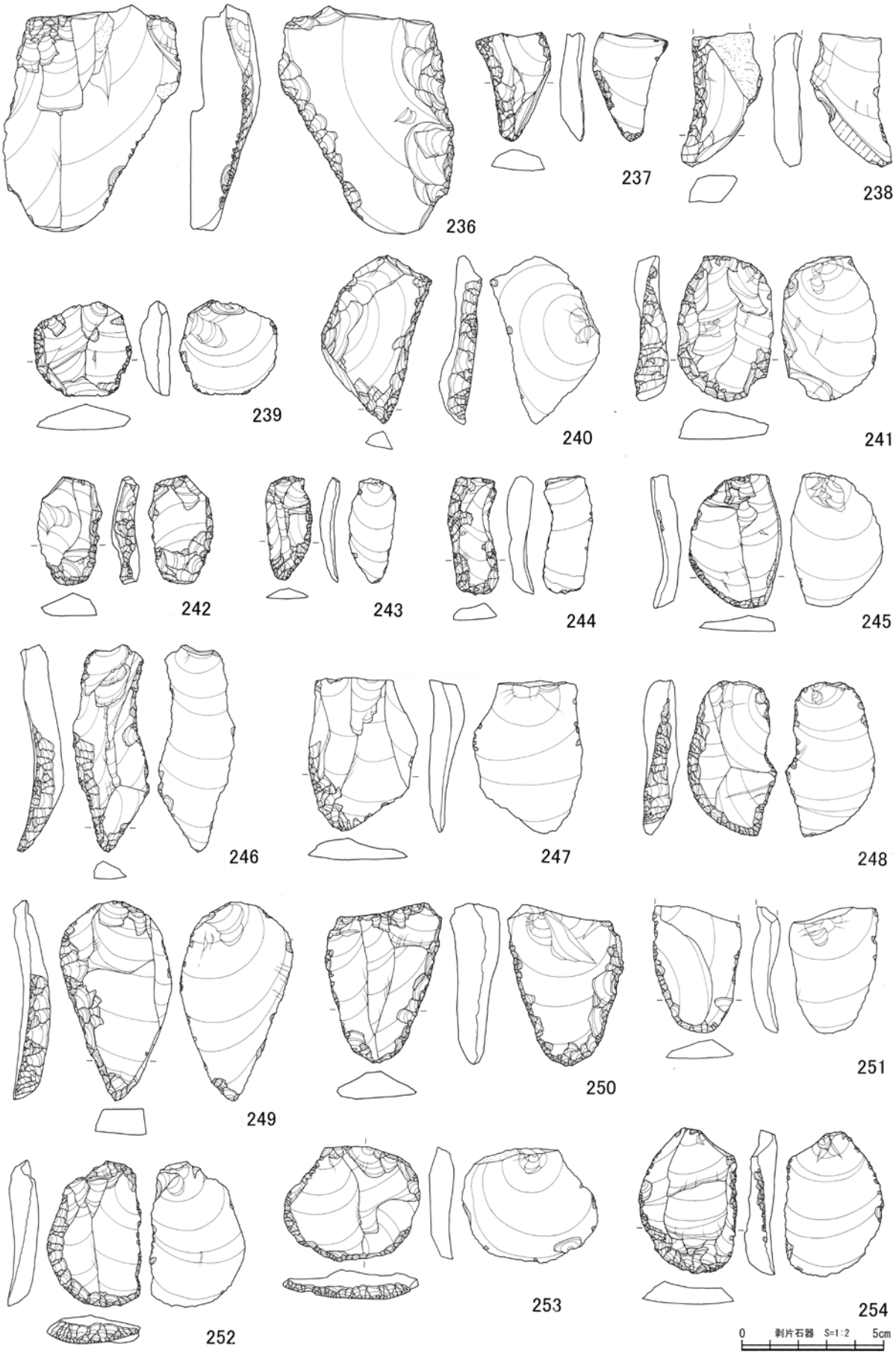
図Ⅳ-57　石器実測図７


209
210
211
212
213
214
215
216
217
218
219
220
221
0 剥片石器 S=1:2 5cm

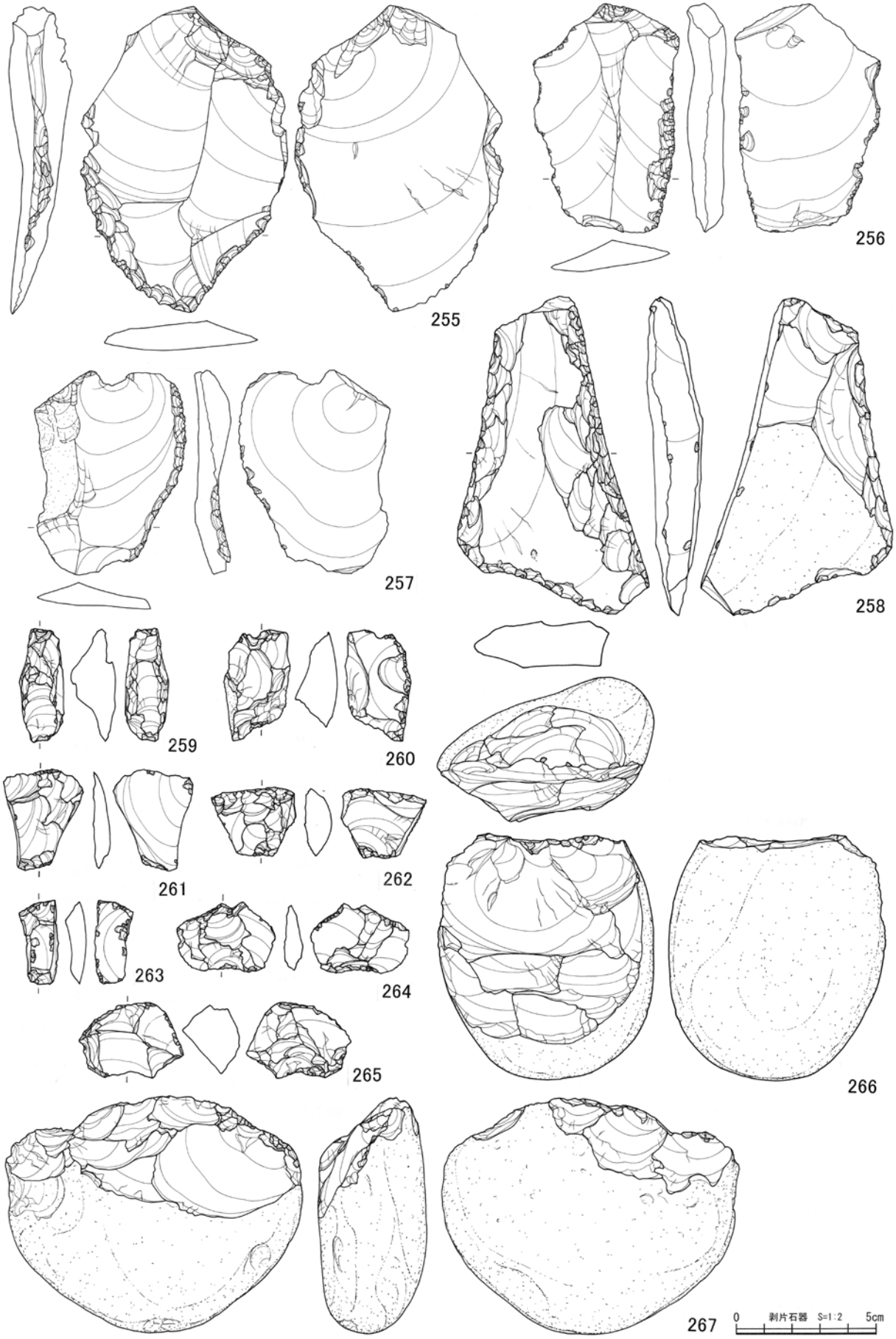
図Ⅳ-58　石器実測図８


222
223
224
225
226
227
228
229
230
231
232
233
234
235
0　剥片石器　S=1:2　5cm

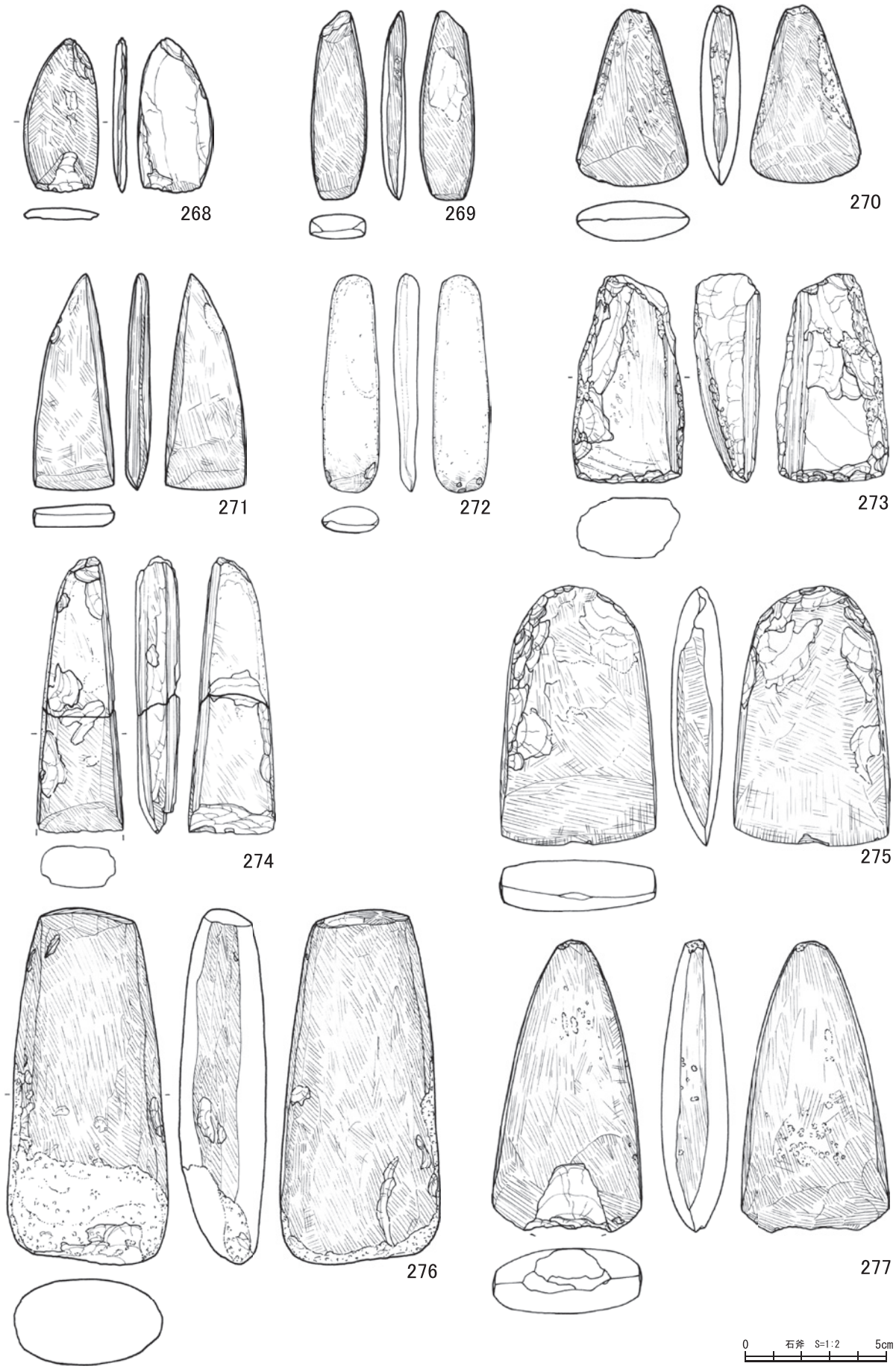
図Ⅳ-59　石器実測図９



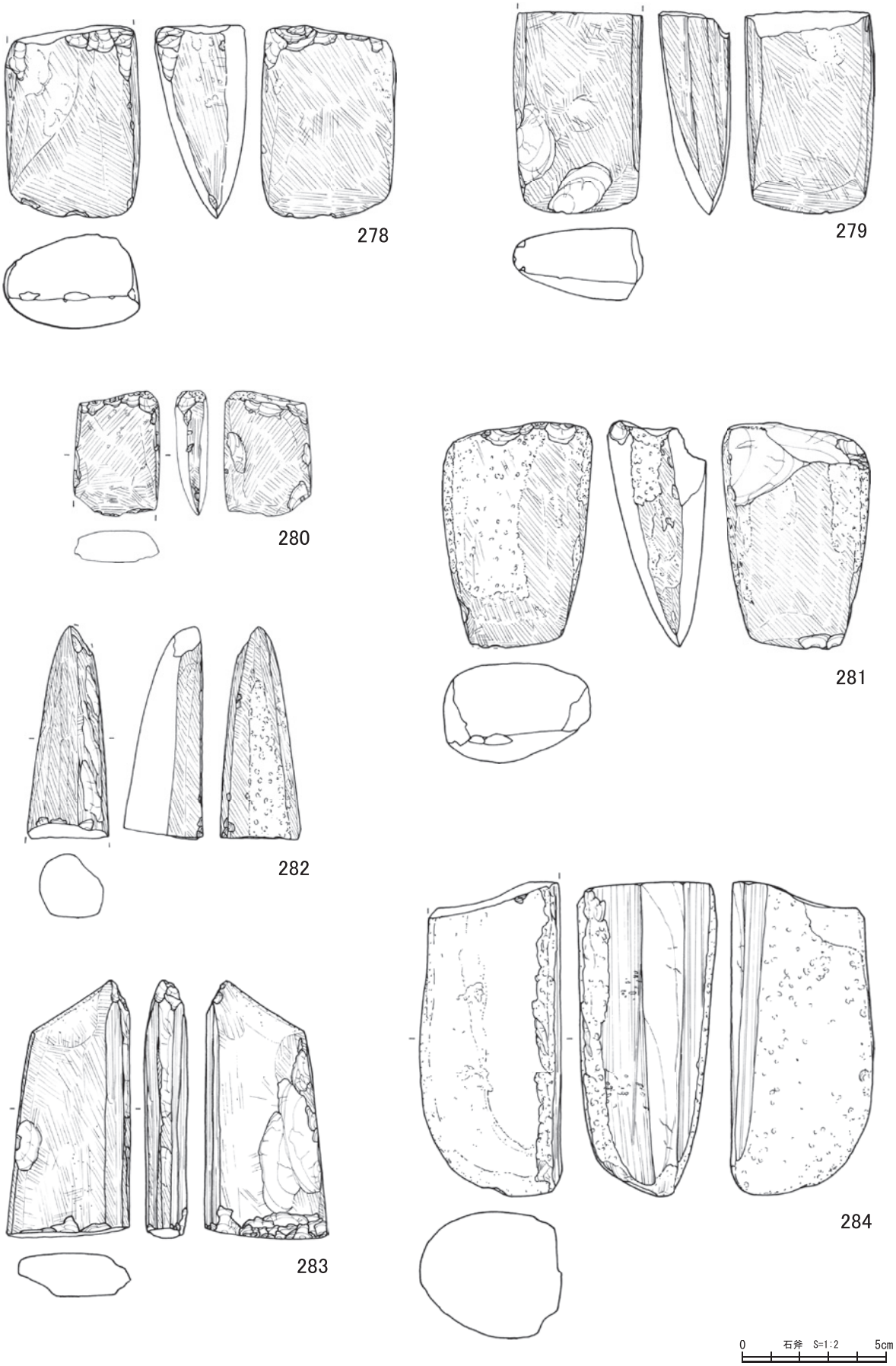
図Ⅳ-60　石器実測図 10



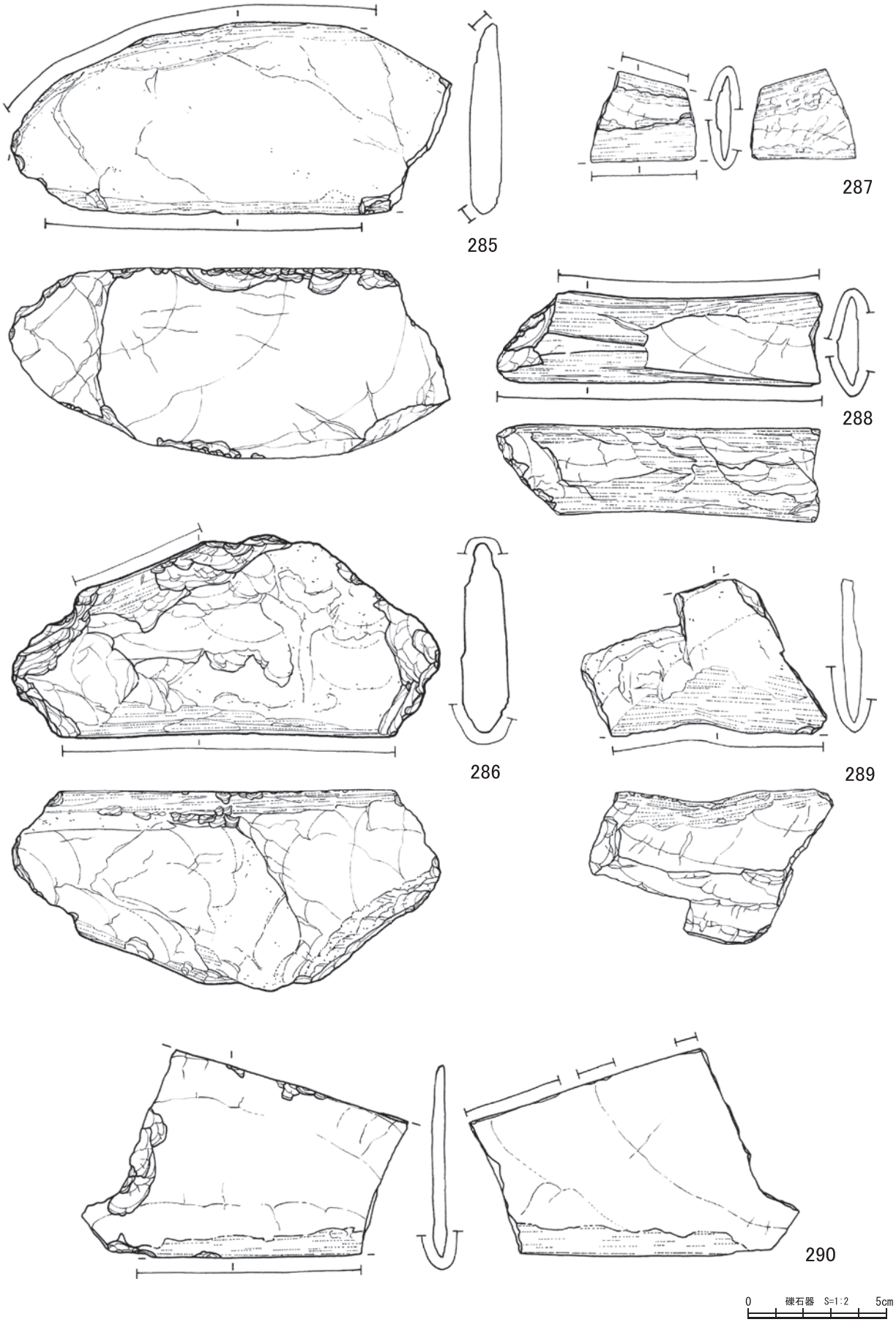
図Ⅳ-61　石器実測図 11



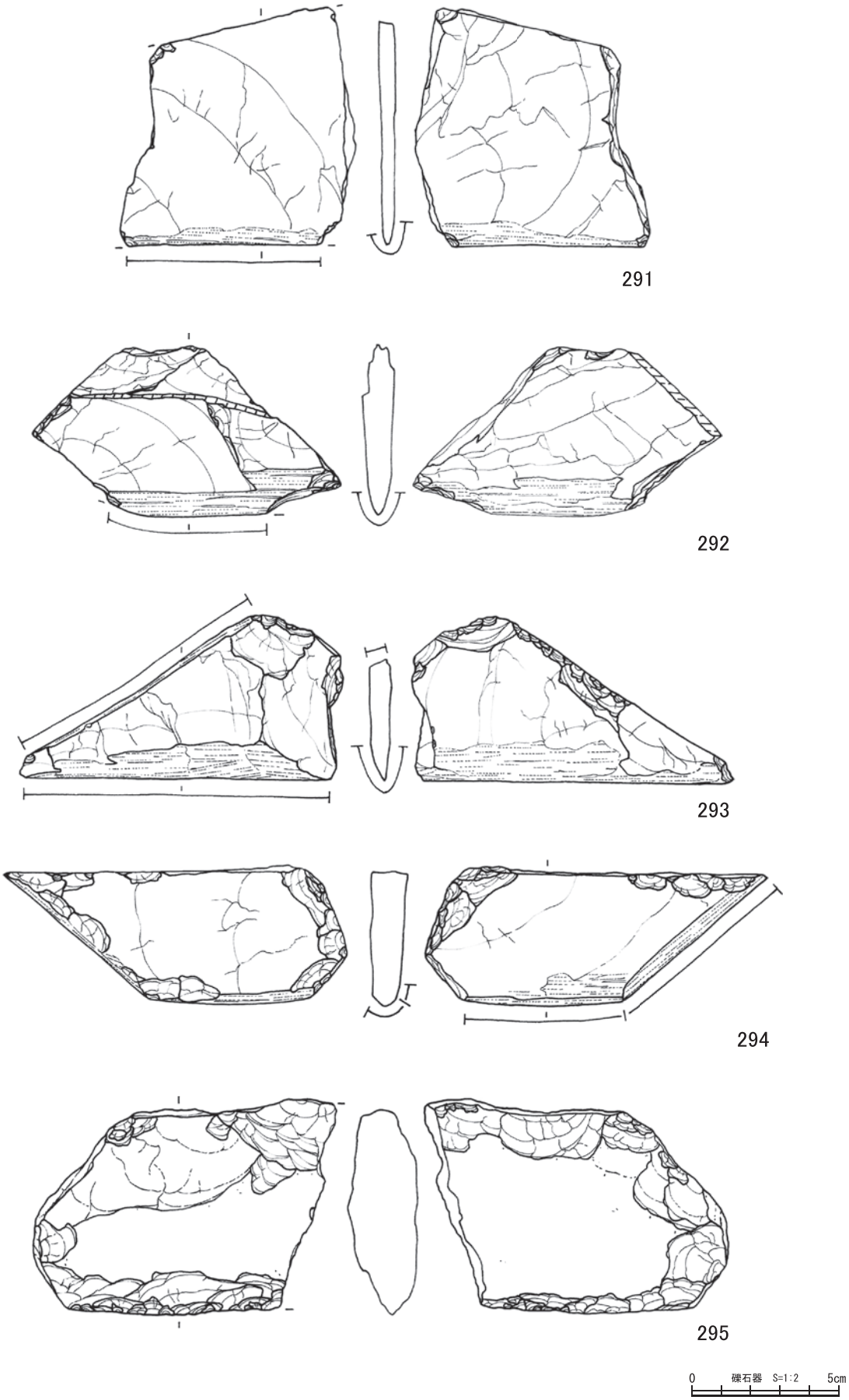
図Ⅳ-62　石器実測図 12



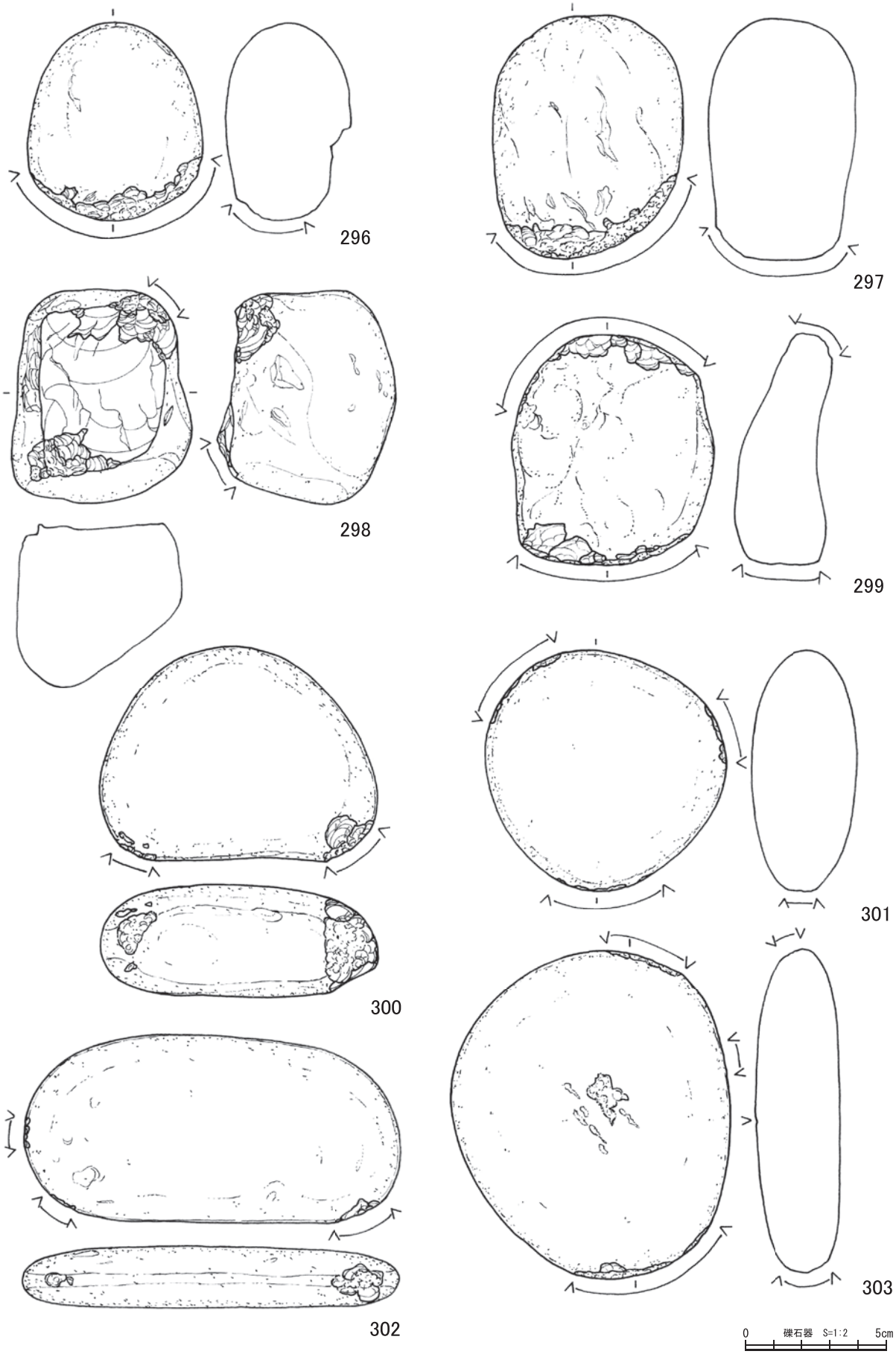
図Ⅳ-63　石器実測図 13



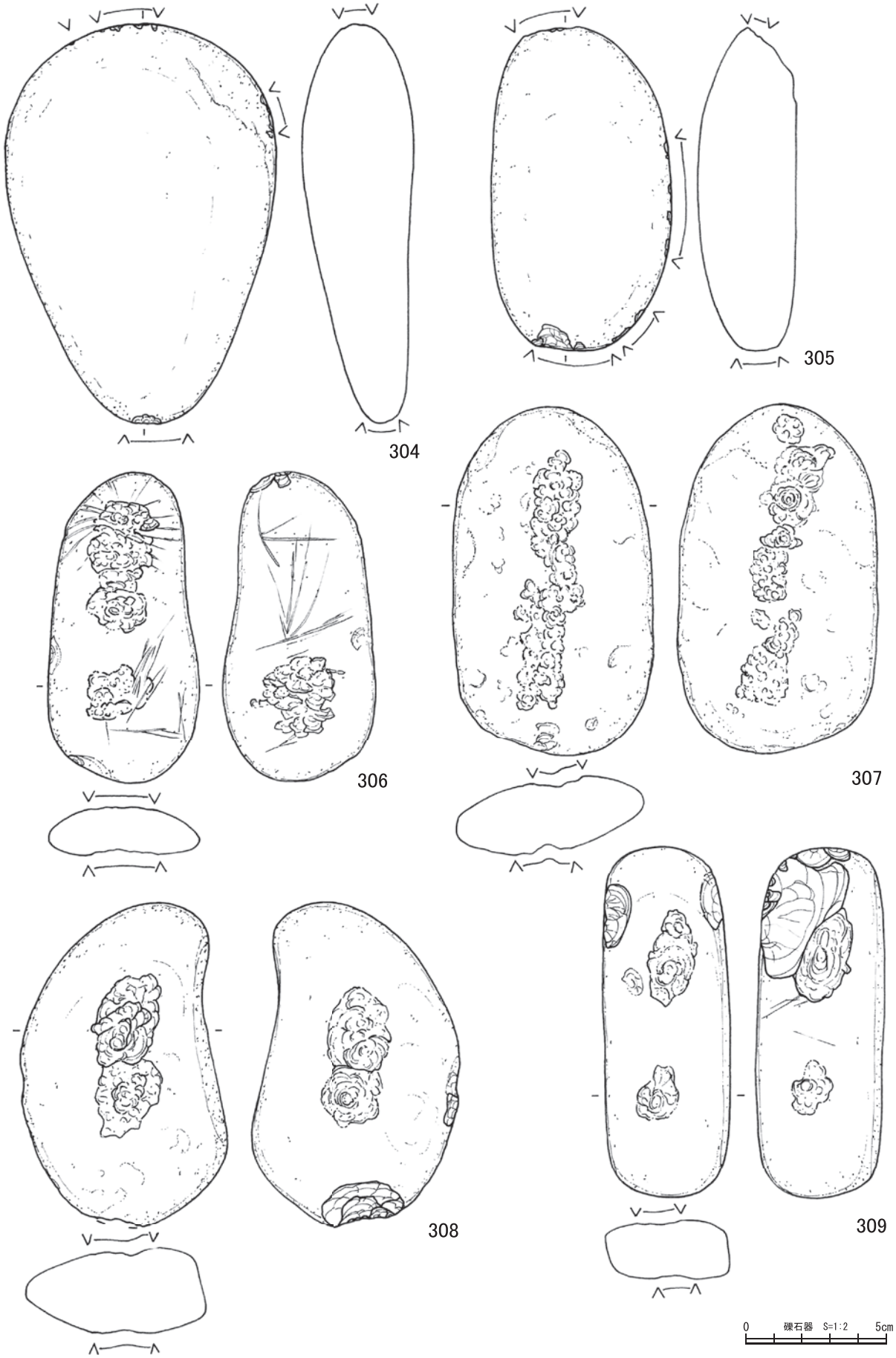
図Ⅳ-64　石器実測図 14



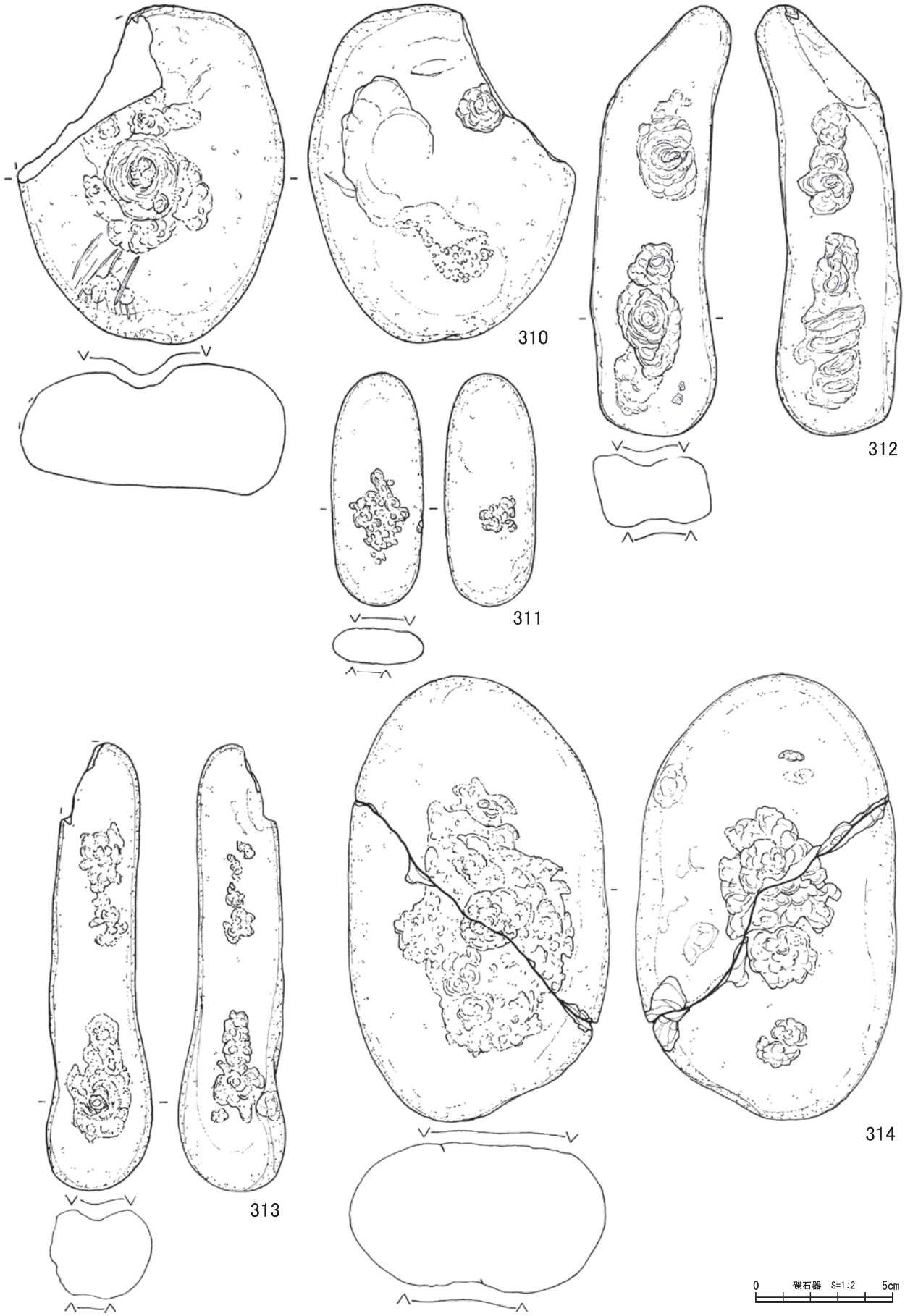
図Ⅳ-65　石器実測図 15



図Ⅳ-66　石器実測図 16

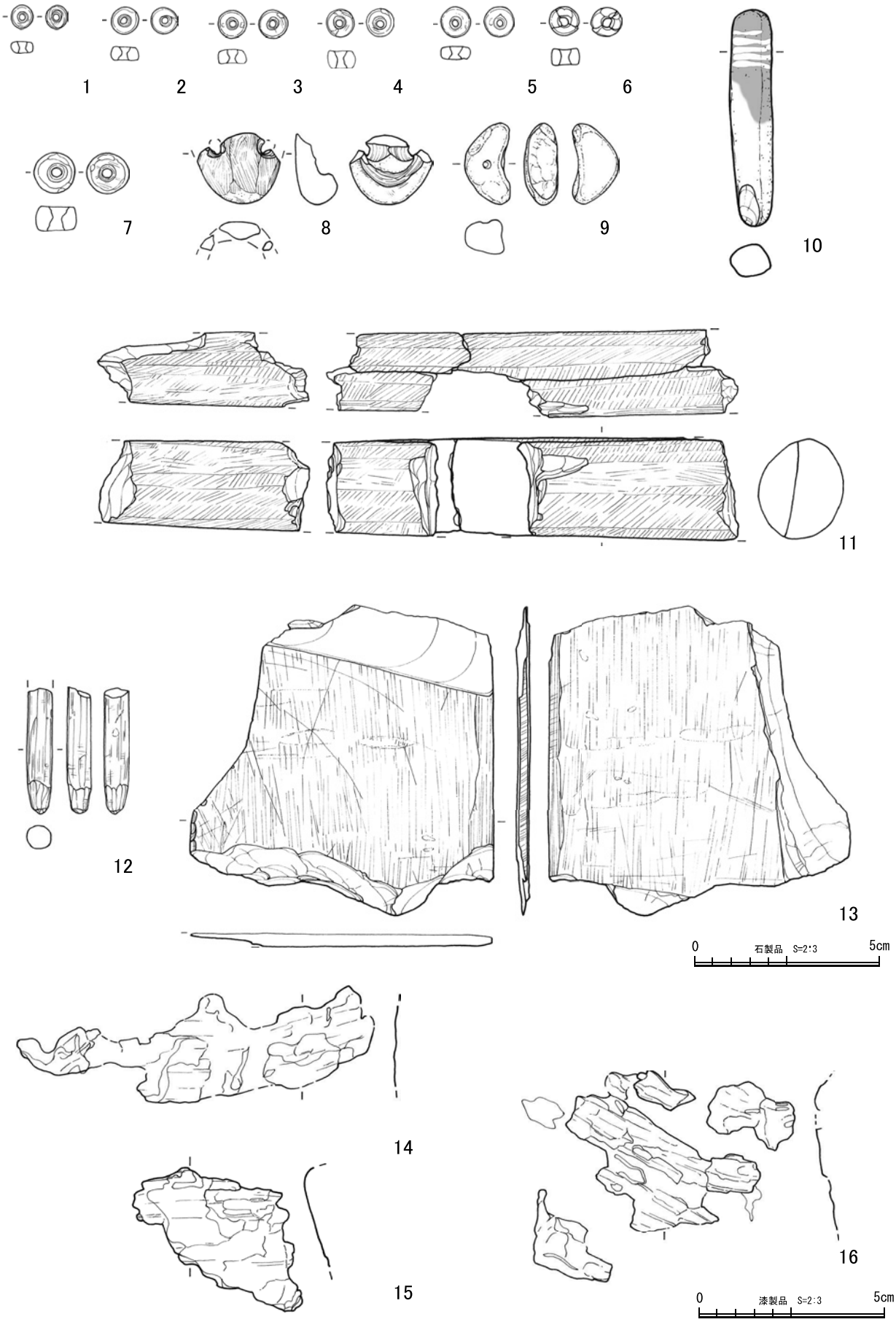


図Ⅳ-67　石器実測図 17



図Ⅳ-68　石器実測図 18

図Ⅳ-69　石器実測図 19



図Ⅳ-70　石製品・漆製品実測図

報　告　書　抄　録

ふりがな	きこないちょう　おおひらいせき
書名	木古内町　大平遺跡(4)
副書名	高規格幹線道路函館江差自動車道工事用地内埋蔵文化財発掘調査報告書
シリーズ名	公益財団法人　北海道埋蔵文化財センター調査報告書（北埋調報）
シリーズ番号	第329集
編著者名	土肥研晶
編集機関	公益財団法人　北海道埋蔵文化財センター（http://www.domaibun.or.jp）
所在地	〒069－0832　北海道江別市西野幌685－1　　Tel.　(011)386－3231
発行年月日	平成28（西暦2016）年11月25日

ふりがな 収録遺跡	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積 (㎡)	調査原因
		市町村	遺跡番号					
おおひらいせき 大平遺跡	ほっかいどうきこない 北海道木古内 ちょうあざおおひら 町字大平63-3	01334	B-05-07	41° 41′ 24.99″	140° 26′ 54.78″	20130513 ～ 20131108	1,700㎡	道路建設に伴う記録保存

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
大平遺跡	集落址	縄文時代後期後葉		土器・石器	
		縄文時代晩期前葉	墓３基、土坑２基	土器・石器	漆塗り竪櫛×２
		縄文時代晩期後葉	小ピット	土器・石器	
		中世以降　畝状遺構			

要約

遺跡はJR木古内駅から南西へ２km、木古内川河口付近の左岸にある海岸段丘上から低位の段丘面に立地し、標高は約12～３mの範囲である。

検出された遺構は、縄文時代晩期前葉の墓３基のほか土坑５基が主なもので、墓の副葬品として土器や石器のほかに、漆塗り竪櫛やサメ歯の装身具が出土した。

縄文時代晩期後葉では、聖山式以降の土器様相を考える上で、良好な資料とみられる、大洞A式併行期の土器が、小ピットや捨て場からまとまって出土した。

（公財）北海道埋蔵文化財センター調査報告書　第329集

木古内町　大平遺跡（4）

―高規格幹線道路函館江差自動車道工事用地内
埋蔵文化財発掘調査報告書―

発行　平成29年２月28日
編集　公益財団法人　北海道埋蔵文化財センター
〒069-0832　江別市西野幌685番地１
TEL（011）386-3231　　FAX（011）386-3238
http://www.domaibun.or.jp

印刷　三浦印刷株式会社
〒064-0809 札幌市中央区南９条西６丁目
TEL（011）511-6191　　FAX（011）512-6041